日本写真家協会会報

NO.182
(2024. Sep.)

■展望「アフターコロナのフォトフェス事情」
■新・声のライブラリー　松本徳彦さん
■JPS2024 年新入会員展「私の仕事」

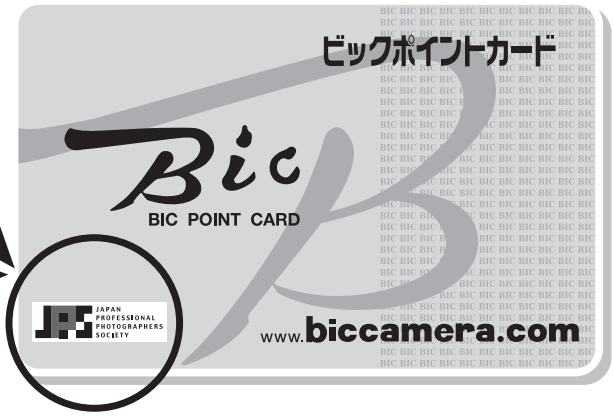
JPS

Photo Komatsu Yuka

ビックカメラ

日本写真家協会 会員様限定 特別優待カード

お申込み・年会費 無料



通常 10% ポイントサービス商品の場合

特別優待カードで ポイントを貯めるだけで 2%ポイントアップ!!

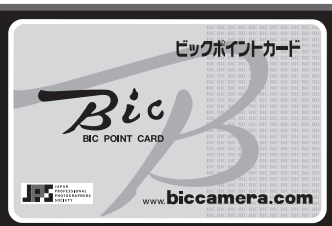
基本 **12%ポイントサービス!!**

通常ポイントカード

現金・デビットカード・交通系ICカードでお支払いの場合 基本 **10%ポイントサービス!**

クレジットカードでお支払いの場合 基本 **8%ポイントサービス!**

特別優待ポイントカード



現金・デビットカード・交通系ICカードでお支払いの場合 基本 **12%ポイントサービス!**

クレジットカードでお支払いの場合でも 基本 **10%ポイントサービス!**

お申込みの際はJPS事務局までお問い合わせください

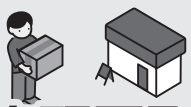
売るのも買うのもサポートもビックカメラグループ!!

買取でお得に買い替え!!

ご自宅のカメラ・用品 → 高額買取！ → お得に買い替え！

※買取可能な品目に限ります、製品の状態によってはお値段の付かない場合もあります。

2つの選べる買取受付



店頭買取

店舗一覧

おうちで買取

買取アプリ ラクウル

買取価格　買取品目

こちらから確認できます！

SIGMA

全面的な進化を遂げた

“至高の標準”

Art

24-70mm F2.8 DG DN II

ミラーレス専用 | フルサイズ対応

価格：オープンプライス
付属品：ケース、レンズフード（LH878-05）、
フロントキャップ（LCF-82 III）、リアキャップ（LCR II）
対応マウント：Lマウント用、ソニー Eマウント用

※製品の外観、仕様などは変更することがあります。
※ソニー Eマウント用は、ソニー株式会社とのライセンス契約の下でライセンスを受けた
Eマウント仕様書に基づき開発・製造・販売されています。
※Lマウントはライカカメラ社の登録商標です。

シグマのプロダクト・ラインについては、こちらへ。

sigma-global.com

株式会社シグマ　〒215-8530 神奈川県川崎市麻生区栗木2-4-16　お客様相談窓口 info@sigma-photo.co.jp

日本写真家協会会報　182 号　目次　2024 年 9 月

■*Gallery*　JPS ギャラリー　佐藤倫子、田中 博、一色龍太郎、曽布川善一　三浦 誠、タカオカ邦彦 …… 5

■*First Message*　新たなるフェーズに向けて …… 熊切大輔　11

■*Telescope*　アフターコロナのフォトフェス事情 …… 柴田 誠　12

■*Zooming*　写真の散歩道（連載９） …… 鳥原 学　14
　写真の新しい「記録性」をめぐって

■*Workshop*　著作権研究（連載 57）　デジタル時代の著作者名表示を考える …… 吉川信之　16

■*Technical*　新型フィルムカメラ「PENTAX17」登場 …… 桃井一至　18

■*Topics*　賛助会員トピックス …… 20

■*Wonder Land*　＜新・声のライブラリー＞松本徳彦さん（名誉会員） …… 22
　「舞台に憧れ、時事を追い、歴史に学ぶ」　聞き手：小池良幸専務理事、伏見行介常務理事

■*New Face Gallery*　JPS2024 年新入会員展「私の仕事」 …… 29

■*Education*　第６回「おやこ写真教室」開催 …… 教育推進委員会　32

■*Exhibition*　第 49 回 2024JPS 展入賞作品紹介 …… 34

■*Education*　2023 年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告 …… 38

■*Exhibition*　第 49 回 2024JPS 展報告・第 50 回 2025 JPS 展案内 …… 40

■*General Meeting*　2024（令和 6）年度第 25 回定時会員総会報告 …… 43

■*Archives*　「日本写真保存センター」調査活動報告（41） …… 寺師太郎　44

■*Report*　セミナー研究会レポート …… 46
　2023 年度第３回・2024 年度第１回技術研究会報告、著作権セミナー
　「人を撮ること、人が写ること 著作権と肖像権を考える」、2024JPS 展
　関連イベント「フィルムカメラ散歩撮影会＆暗室体験ワークショップ」
　「プリントしてフィルム愛を分かちあおう」、国際交流委員会ウェブサイト企画
　「表現者たち」 Vol.15 ～ 16

■*Books*　JPS ブックレビュー …… 49

■*Information*　追悼＝正会員・今井光潔、麻賀 進、工藤弘之、富山愛子、岩崎日照 …… 54
　／経過報告／編集後記

■*Congratulations*　おめでとうございます　第 50 回「日本写真家協会賞」受賞 …… 61
　ライカカメラジャパン株式会社 代表取締役社長 福家一哲さん

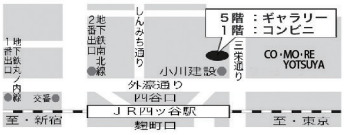
■*Message*　Message Board …… 62

■*Gallery*　X ギャラリー　大久保勝利、川村剛弘、山下晃伸 …… 64
　表紙・小松由佳、表４・清家道子

広告案内

■（株）ビックカメラ
■（株）シグマ
■ポートレートギャラリー
■（株）タムロン
■リコーイメージング（株）
■キヤノンマーケティングジャパン（株）
■（株）ヨドバシカメラ
■（一社）日本写真著作権協会(JPCA)
■富士フイルム（株）

〈写真文化の発信基地〉みなさまの作品発表の場としてご活用下さい。



―― 人に出会い、自然に触れる ――
ポートレートギャラリー

■JR 四ツ谷駅・四ツ谷口　徒歩３分　■地下鉄丸ノ内線１番出口　徒歩５分
■地下鉄南北線２番出口　徒歩３分

一般社団法人 日本写真文化協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-7-12 日本写真会館５階
TEL：03-3351-3002 FAX：03-3353-3315
URL https://www.sha-bunkyo.or.jp

深濵 ―――――――――――――――――― 佐藤倫子

コロナ禍の影響で 6 年ぶりに開催された 2023 年富岡八幡宮例大祭。53 基の神輿が一斉に渡御する神輿連合渡御の最後しんがりを務めるのは深濵神輿。私はこの深濵睦保存会に入会し撮影を続けてきました。前日に富岡八幡宮にてお祓いが終わった直後の、一同が 6 年ぶりを喜び、気合が入った熱気ある瞬間を撮影した写真。

写真展「深濵」

東京トンボ日記 ―――― 田中　博

「東京ではトンボを見なくなりましたね」とよく言われる。最初は「東京にもトンボがたくさんいます」と言葉で言っていたものの、写真で見せるのが一番……と思って撮り始めて十年以上。この写真は、浜離宮恩賜庭園で高層ビル群を背景にアキアカネを撮影していたところ、偶然、後ろに新郎新婦が通りかかった。昆虫そのものの美しさを撮影するだけでなく、「トンボがいる東京の風景」を残していきたいと思っている。
写真展「東京トンボ日記」

初笑い ―――――――――――――――― 一色龍太郎

愛媛の石鎚山系山間に、谷川に沿うようにしてある鞍瀬集落。戦死者が出て終戦直後に暗いムードが漂ったという。そのムードを皆で笑って払拭しようと始まった「初笑い」。その後も元旦に磐根（いわね）神社に集い、センスを持った指揮者の「ワッ、ハッ、ハッ、ハアー」のかけ声に続いて、皆が大きな声で笑いを三度繰り返す。終わると火鉢を囲み酒や茶を飲み、菓子などほおばりながら新年の話に花が咲く。過疎化が進む集落だが、恒例行事として今も続く。
写真集・写真展「石鎚山に抱かれて」

富士信仰 天拝神事 ―――――――― 曽布川善一

約八千年前の富士山噴火が残した溶岩洞穴「人穴」は、古くより仙元大菩薩（富士山）の在所と伝えられ、16 世紀に洞穴に籠り荒業を繰り返した長谷川角行が、民衆のための富士信仰を興した。霊場となった人穴では、天から授かった“気”を信者に分け与える「天拝神事」が、蝋燭の灯りのもとで行われ洞穴内には信者たちが一斉に唱える「拝み」の声が反響する。江戸時代から続くこの神秘的で独自の神事は一般には知られていない。
写真集・写真展「10 万年の噴火史からひもとく富士山」

「螻蛄の唄」より ―――――――――――― 三浦　誠

何かが語りかけて来る
小さな窓の中の景色から　かすかに聞こえて来る声は
視線を外すと止んでいる
わずかの時間の経過で記憶も薄れてしまう
空間が時間の悪戯で言葉を失わせてしまう
小さな窓は覗くたびに感性を刺激し　記憶に留まる事をさせない
存在する何かを見つける事が出来ないまま
膨大な時間を彷徨い続けている
写真集『螻蛄の唄』

勝負のメロン（安井政彦　静岡県袋井市）―― タカオカ邦彦

1980 年半ばから、日本の農家、畜産、養蜂、漁業など第一次産業の仕事や人々のひたむきさに魅力を感じ、取材等を通して、全国で撮る機会を得て、今日まで撮影してきた。安井家は長年、家業はトマト作りを続けてきたが、将来性に限界を感じ自分の意思で転換したメロン栽培だからこそ、頑張り続けられた。贈答用となるメロン作りには、ハウスの換気、温度等に最新の注意を要するため、見回りは欠かせない。高級メロンだけに、見た目にも気を配り、職人気質を身につけた。
写真集・写真展「大地とともに」

新たなるフェーズに向けて

会長　熊切 大輔

新体制となって1年を超え様々な挑戦や改革に取り組んできたが、内部だけでなく外部からもその変化を実感し評価していただく声が多く聞こえてきている。これはひとえに理事や各委員会の皆さん、そして会員の皆さんの変えたいという思いと行動の成果だといえるだろう。JPSの注目度が確実に上がっていることを皆さんも感じているのではないだろうか。

2024年になり多くの印象的な出来事が起こった。新年早々開催した「第18回名取洋之助写真賞」受賞作品写真展は、非常に高い評価を受けた展示となった。その3名の受賞者のうち、すでに会員の中条望さんを除く2名の若き写真家が、新入会員としてJPSに加わってくれたのは嬉しいニュースだった。そんな若い世代の写真家が写真界をそしてJPSをけん引する原動力となってくれることを確信している。そんなフレッシュな仲間とともに今年度は29名の新入会員を迎えることとなった。まさに多種多様バラエティーに富んだ写真家の皆さんは世代も幅広く、その豊富な経験を存分にいかして一緒に写真界を盛り上げていただければと思っている。

5月に行われたJPS展も大きな盛り上がりをみせた。応募者数や入場者数、図録の売り上げも順調に伸びており来年50回という節目を迎えるに当たり、大成功という勢いのつく形となったのは非常に喜ばしい出来事だろう。

今まで関わりの薄かった様々なイベントにも新たに積極的に関わったのもこの半年のトピックといえる。冬から春にかけて行われたCP+やPHOTONEXT、KYOTOGRAPHIEなど大型写真イベントに積極的に関わることで、新たな交流そして次の可能性への芽が生まれてきている。

そして夏本番を迎え全国的にうだるような暑さが身に堪える中、10度ほど気温の低い北海道東川町では写真甲子園及び東川町国際写真フェスティバルが熱く開催された。今回JPS会長として初めて参加することとなったが、第40回となったフェスティバルは大勢の来場者と多種多様なイベントでたいへんな盛り上がりを魅せていた。作家のトークイベントやワークショップなど様々な写真を楽しむ催しが行われる中、著作権セミナーも注目を集めていた。そこでは我々が常日頃から大事にしている著作権の話はもちろん、肖像権や性的姿態撮影罪など撮影のモラルやマナーについても話が及んだ。

スナップ撮影においてネット上に真偽不明なネガティブな話題が飛び交う中で、過剰に街での撮影を恐れる声も聞こえてくる。被写体としっかりとしたコミュニケーションを取ったり、人を傷つけるような撮影に及ばなければ、街での撮影で揉めることはほとんどないのではないか、と私の実体験としても思っている。それでもなぜ揉めるようなことが起きるのであろうか。それは被写体との意思疎通はもちろん、その場所やタイミングでの思いの至らない撮影が不快な思いを与えてしまう。被写体や周りをおもいやる気持ちが欠如したときに、トラブルに発展するのではないだろうか。

これは撮影現場だけに限ったことではない。社会生活の中でも同様に気をつけなければいけないのは、当然のことだろう。通常の生活の中でも起こりうるのが、ハラスメントだ。自分では自覚のないままに、もしくは意図的に相手を傷つけることが、身の回りで起きていないだろうか。過剰な上下関係から起きるいじめやセクシャルハラスメントなど、写真界でも起こっていることと自覚し、真剣に考えなければいけない問題である。

今更ではあるが、早急に取り組む必要がある。このハラスメントに対する意識と知識を高めるために、当協会もまずは理事と各委員会委員長がハラスメント講習を受けることとなった。わかっているつもり、やっていないつもりでも、もしかしたらとハッとする内容は、自分の行動を振り返る良いきっかけになるだろう。

このような意識改革も新体制になったからこそ積極的に取り組むべきタイミングと考える。写真を撮るということ、それは総合的な人間力をも問われているのではないだろうか。JPS会員がモラルの模範となることが、写真界のさらなる健全化につながるメッセージとなると考えている。

コロナ禍はフォトフェスティバルをどう変えたのか

アフターコロナのフォトフェス事情

柴田 誠（JPS 会員）

コロナ禍が収束し、人々の動きも活発になり、様々な分野でコロナ前の状況に戻りつつあることが報道されている。私たちにとって身近な写真業界はどうだろうか。国内外のフォトフェスティバルがコロナ禍によってどう変わったのかを見ていこう。

■コロナ前は世界各地で多くのフォトフェスが開催されていた

国内外を問わず人の往来が途絶え、国によっては都市のロックダウンにまで及んだコロナ禍。2020 年から 2022 年にかけては、多くのイベントが中止される事態となった。写真業界も例外ではない。多くのフォトフェスティバルが開催中止となった。

フォトフェスティバルが多く開催されるようになったのは、2010 年頃のことだ。それ以前から「パリ・フォト」（1997 年～）、「フォトシティさがみはら」（2001 年～）などが開催されていたが、アート志向の高まりや 2011 年の東日本大震災などをきっかけに増えていき、2010 年代には、100 を超えるフォトフェスティバルが世界各地で開催されていた。

フォトフェスティバルといってもその形態や規模は様々だ。大きく分けると、

1）「KYOTOGRAPHIE　京都国際写真フェスティバル」のような**写真の展示を中心としたもの**。
2）「パリ・フォト」や「アートバーゼル」のような**写真作品や写真集の販売を中心としたもの**。

そしてもっとも多いのが、

3）展覧会、ワークショップ、ポートフォリオ・レビューなどを組み合わせた**総合的なフォトイベント**。

「東川町国際写真フェスティバル」をはじめ「アルル国際写真フェスティバル」「アンコールフォトフェスティバル＆ワークショップ」「フェスティバル　イメージズ　ヴヴェイ」そして米国ヒューストンで開催されていた「フォトフェスト」など、多くのフォトフェスティバルが会期中に様々な関連イベントを開催して、ひとつの大きなフォトイベントを形成するようになっている。

■コロナ禍で継続できなかった影響は小さくなかった

多くのフォトフェステイバルが、コロナ禍によって中止を余儀なくされ、そのまま再開できずにいるものも少なくない。その理由の多くが資金難によるものだ。

フォトフェスティバルの運営には、展示会場の確保や展示作品のプリント、フォトアワードの賞金や賞品、ワークショップの講師やレビュアーのギャラなど、多くの費用が必要になる。開催期間は数日で終わるものもあれば、数か月に及ぶものもあり、期間が長くなればそれだけ経費も膨らんでいく。企業スポンサーからの資金提供や公共機関、関連団体などのサポートがあったとしても、フォトフェスティバルの運営はけっして楽なものではない。ボランティアスタッフを募ったり、入場料や参加費の収入でなんとかやりくりしているというのが、多くのフォトフェスティバルの実情だ。

こうした運営状況の中で、数年間フォトフェスティバルを開催できなかった影響は小さくない。コロナ禍で中止されていた 2 ～ 3 年の間にスポンサーや出展社（者）の置かれている状況も大きく変わってしまい、スポンサーが撤退したり、協賛を見直すという動きが出てくるようになった。それにより事務局の運営自体が立ちいかなくなってしまったところも少なくない。

また、運営スタッフに継続してノウハウを伝えることができなかったことも再開を困難にしている要因のひとつになっている。

■小規模なイベントが多い国内のフォトフェス

一方、国内のフォトフェス事情は海外とはやや異なっている。総合写真祭「フォトシティさがみはら」（2001 年～）や「東川町国際写真フェスティバル」（1985 年～）など、比較的長い歴史のフォトフェスティバルは、自治体や美術館を中心としたイベントという印象が強い。その点ではコロナ禍による運営への影響は少なかったかもしれない。

浅間山麓の地域を舞台に 2018 年から始まった「浅間国際フォトフェスティバル」は、長野県御代田町に誕生予定だった「御代田写真美術館（MMoP）」の開館を見据え、世界に向けて写真文化を発信する目的の国際的な写真フェスティバルだ。写真美術館を中心に据えたフォトフェスティバルではあるが、協賛に多くの地元企業が名を連ねている点が興味深い。

「塩竈フォトフェスティバル」（2008 年～）は、同市出身の写真家・平間至氏を中心に写真に親しむイベントとしてスタートした。写真家が核となっているという点では、海外のフォトフェスティバルに近いものがある。個人からの寄付も多く、地方独自の視点で発信している点は好感が持てる。東日本大震災を経て「写真」の持つ本質や役割について再考し、塩竈市のこれから

を写真文化を通じて考え、発信していくことを掲げている。東北で最大規模のフォトフェスティバルではあるのだが、地理的な要因もあって、規模的にはあと一歩といったところだ。

このほかにも東京駅東側エリアで展開される屋外型国際写真祭「T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO」、野外展示型写真祭「軽井沢フォトフェスト」など、新たなフォトフェスティバルも次々と誕生してきているが、残念ながら海外のフォトフェスティバルに匹敵するような規模のものは、見られないというのが現状だ。またアートフェスティバルの一部というものも多く、写真単独で1つのフェスティバルにしていくというのはなかなか難しいようだ。

■今注目されているフォトフェス4選

◎アルル写真フェスティバル（フランス・アルル）

アルル国際写真フェスティバルの公式サイトより。会期中には展覧会をはじめ、スライドショー、シンポジウム、ポートフォリオレビュー、ワークショップなど様々なイベントが開催される。

ゴッホゆかりの地として知られる南仏アルルで開催される、もっとも歴史あるフォトフェスティバル。スタートしたのは1970年で、今年で55回目を数える。運営費の約半分は公共の予算で、残りを入場料と私的な寄付によって賄っている。2024年の会期は7月1日～9月29日まで。今年はライカカメラ社が参加し、写真展やフォトウォーク、ワークショップ、トークイベントなどを行っている。

また文化・芸術の各分野で活躍するインスピレーションを与えた人物や新たな女性の才能を表彰する「ウーマン・イン・モーション」のフォトグラフィー・アワードを日本人で初めて石内都氏が受賞した。受賞を記念した石内都の個展『Belongings』のほか、50年代から現代までの26名の日本人女性写真家の作品を展示する『I'm So Happy You Are Here:Japanese Women Photographers from the 1950s to Now』も開催中だ。

◎ KYOTOGRAPHIE　京都国際写真フェスティバル（日本・京都）

『TRANSCENDANCE（超越）』展は、アルル国際写真フェスティバルの会場で開催されている。

京都を舞台に開催されるアジアでもっとも大きな国際写真祭。2011年の東日本大震災をきっかけにして、アートの力で世界をより良く変えていきたいという想いで始められ、今年で12回目となる。12の会場で13の展覧会が開催されたほか、33のパブリックプログラム・教育プログラムが実施された。GWをはさんだ30日間の会期中の来場者数は270,718人（前年比15%増）。サテライトイベントとして、これからの活躍が期待される写真家やキュレーターの発掘と支援を目的とした公募型アートフェスティバル「KG＋」や「KG＋ PHOTOBOOK FAIR」なども同時期に開催されている。

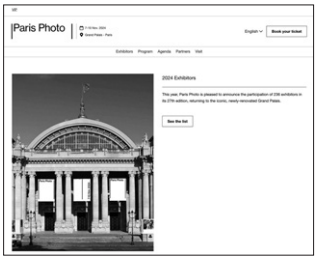
また「アルル国際写真フェスティバル」の「アルル・アソシエ（Arles Associé）」で、6人の日本人女性写真家の作品を展示する『TRANSCENDANCE（超越）』展を2024年9月29日まで開催している。

◎アンコール・フォトフェスティバル＆ワークショップ（カンボジア・シェムリアップ）

アンコール・フォトフェスティバル＆ワークショップの公式サイトより。アジアの写真家向けに無料で開催されるワークショップの様子が紹介されている。

アンコールワットのあるカンボジアのシェムリアップを拠点に、2005年にスタートした東南アジアでもっとも歴史ある国際写真イベント。アジアの写真家のために無料で開催されるワークショップをはじめ、写真展、映写の上映、講演などで構成されている。開催は例年冬の時期で、20回目となる2025年は2月7日～16日まで開催される。

◎ Paris Photo（フランス・パリ）



Paris Photoの公式サイト。各種プログラムや出展社リストの確認ができる。チケットもこのサイトから購入が可能だ。

27回目となるヨーロッパ最大の写真イベント「パリ・フォト」は、巨大な美術館で展示施設でもあるグラン・パレを会場に2024年11月7日～10日の会期で開催される。写真作品の発展とサポートを促進することを主な目的とした国際見本市で、ギャラリーや出版社、アーティストが作品を展示する。

昨年は約190のギャラリーと出版社が出展し、会期中には約400人の写真家がサイン会などのイベントに参加。日本からはPGIや小宮山書店が出展していた。入場料は1日32ユーロ（約5,200円）。また10～11月のパリでは、ルーヴル美術館での展覧会を中心とする「Photo Days」、写真・映像の展示会「Salon de la Photo」、写真系の出版社が出展するフォトブックイベント「Polycopies」などが開催される。

この時期には、著名な写真家の写真展も数多く開催。アートセンター「LE BAL」では、石元泰博氏の欧州初の大回顧写真展『YASUHIRO ISHIMOTO DES LIGNES ET DES CORPS』が11月17日まで開催されている。

連載　第9回　写真の散歩道

写真の新しい「記録性」をめぐって

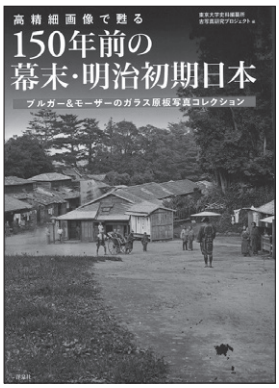
鳥原　学（写真評論家）
Torihara Manabu

●古典技法の潜在的可能性

「写真の価値はなによりも記録性にある」。写真に携わる者なら誰もが聞き続けてきた言葉だと思う。じっさい私自身もそう考えてはいるのだが、「記録性」の内実にはずいぶんと多様なニュアンスが含まれている。被写体の存在証明であるとともに、撮影者の行為の痕跡でもあり、美学的な根拠としても捉えられるのだ。さらに撮影当時の社会背景を突き合わせて考えると、解釈の幅はずいぶんと広がってしまう。

そんなことを改めて考えたのは、ここ数年間のうちに、古い写真を読み直す試みが目立ってきたからだ。もちろん「古写真ブーム」と呼ばれる現象は、いままで何度もあった。たとえば、柔道家で戦前から古写真を収集していた石黒敬七の「石黒コレクション」は長くその主役だった。同コレクションからは、都市風俗や著名人の肖像、あるいは秘められてきたポルノ写真などをまとめた写真集が何冊も出されている。なかには「おもしろ写真」と副題がつけられたタイトルもあって、私も小さい頃からワクワクしながら眺めていたのだった。「過去は外国である」との格言もあるが、写真の中のもの珍しい風景を旅し、当時の人々と出会った気分に浸っていたのだ。

それに比べて現在の古い写真に対する関心は、きわめて実証的な進化をとげている。社会学的な調査手法で写真の由来を明確にすると同時に、進化した画像解析技術によって写真を精密に解析、文字情報には含まれない事実を見出している。文字文献が研究の中心だったアカデミズムの世界で、写真などヴィジュアル資料に対する注目度が急速に上がっているのだ。



『高精細画像で甦る150年前の幕末・明治初期日本　ブルガー＆モーザーのガラス原板写真コレクション』（洋泉社）

レベルの高さを教えてくれたのは、2018年に出版された、東京大学史料編纂所古写真研究プロジェクトによる『高精細画像で甦る150年前の幕末・明治初期日本　ブルガー＆モーザーのガラス原板写真コレクション』（洋泉社）だった。本書はオーストリア＝ハンガリー帝国が明治初期に派遣した「東アジア遠征隊」の一員として来日したヴィルヘルム・ブルガーと、その弟子で約5年半を日本で過ごしたミヒャエル・モーザーが撮影した、270点もの湿板写真のガラス原板を詳細に解析した成果だ。

まず高性能スキャナーでガラス原板から読み出された写真は、それまでの古写真集を見ていたのとはまったく違っていた。江戸の街並に、すっと吸い込まれていくような没入感を覚えたのだ。この感覚をもたらしたのは、圧倒的な解像度の高さだ。銀粒子レベルで解像しているガラス原板の情報量は、いままで私たちが目にしていた紙のプリントでは十分に可視化されないのだ。いや、頭で分かってはいたが、じっさい見ると納得の度合いが違うのだ。

デジタル解析の成果は、解像度の再現だけではない。薬品の調合が写真師によって違うため、写真家の考え方や作業手順の痕跡もたどることができる。こうした最新技術の成果に触れると、まるで時空のドアが開いたように、歴史の距離感が一気に縮まるのを感じるのだ。

●カラー化の成果と倫理的な課題

写真を読み直す新しい技術で、急速な進化を果たしているのがカラー化だ。抽象度の高いモノクロ画像に対して、具体的で表層性が強調されるカラー画像の訴求力はより直接的で強い印象を与える。モノクロ写真のカラー化自体は、写真が発明された19世紀から近年に至るまで主に手作業によって行われてきた。ただし、その精度や目的は、AIの登場で大きく変わり、動画においても活用されている。

進化を如実に示したのは、2023年9月に放送されたNHKスペシャル「映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間」だった。番組で使われたのは、国立映画アーカイヴに保存されていた震災の記録フィルムをデジタル技術で修復、8Kに解像度を上げたうえでカラー化を施した映像である。そこに防災学の専門家の解析

や被災者のインタビューが加えられ、震災被害が拡大していく様子を詳細にたどっている。番組全体の臨場感はまさに怖いくらいだった。

写真のカラー化技術にとってエポックとなったのは、早稲田大学の研究グループが2016年に発表した「ディープネットワークを用いた大域特徴と局所特徴の学習による色付け」という手法である。グループは同じ絵柄の白黒写真とカラー写真をひと組にした大量の画像を、コンピューターに学習させることで、精度の高い自動化を実現させたという。

『AIとカラー化した写真でよみがえる　戦前・戦争』（光文社新書）

その成果を最初に活用したのが、2020年に出版された『AIとカラー化した写真でよみがえる　戦前・戦争』（光文社新書）だった。1941年から46年までに撮られた、戦場や銃後の家庭生活などの写真約350枚を鮮かに色づけし、大戦中の雰囲気をごく身近なものとして伝え直している。このカラー化技術がさらに進化すれば、映像から受ける過去と現在との感覚上の境界は、限りなく薄くなるのだろうと思えた。

同書の共著者である東京大学先端技術研究所の渡邉英徳は、同書のコンセプトを「記憶の解凍」だと語っている。渡邉がその意味を実感したのは、写真の所有者との対話を通じてだった。最終的にカラー化は所有者の確認もとって行われているが、彼らは写真を前にしたとき、忘れていたはずの過去の記憶が急速に蘇ってくることがあるという。これもまたは写真の記録性を考えるうえでの、重要な要素だと思わされる。

●定点撮影の労作

カラー化技術の進化は成果をあげつつあるものの、それを全面的に肯定できるかと問われるとじつは戸惑ってしまう。例えば『AIとカラー化した写真でよみがえる　戦前・戦争』のなかには、ドロシア・ラングとアンセル・アダムスが撮影した、有名な日系人収容所の写真も含まれている。写真史の文脈で私が見てきたものにも関わらず、それとはまるで別の写真になったというような違和感を覚えたのだ。

最近では、著作権が満了した著名な写真に色付けをしてネット上に公開したり、電子書籍として販売したりするケースも増えている。それらの写真を見ていると、色彩を獲得したかわりに、大切なことがらが画面から失われているように思うことが少なくない。それは、撮影者が込めた表現上の意図である。モノクロ時代の写真家は、その抽象的な表現性を意識して撮っていたはずなのだ。

このことが議論になったケースのひとつに、2018年に公開された第一次世界大戦の記録映画をカラー化した『彼らは生きていた』がある。同作についてはリニューアルされた映像の出来栄えを称賛するものが多く、歴史を現代によみがえらせ、映画中の兵士たちに人間性を与えたことが評価されている。だがその一方では手厳しい批判もあった。『ニューヨーク・タイムズ』紙のレビューでは「フランケンシュタイン博士が死者をもてあそんだように、命を吹き込んだという実感はぬぐえない」とし、さらに彼の代表作を例にあげて「自分の『ロード・オブ・ザ・リング』が100年後に手を加えられたら、どう思うだろうか」との疑問が呈されている。確かに写真や映像作品の価値は、ただ視覚情報の精細さや具象性の高さのみに還元されえないのだ。カラー化はさまざまな発見と共感とをもたらすことが間違いないが、基本的にはオリジナルを翻案した二次創作物として扱われるべきだろう。

さて、こうした先端技術とは別のアプローチで、きわめてアナログ的な手法で過去の写真に命を吹き込もうとする試みもある。それが、今年、鷹野晃が刊行した『定点写真で見る　東京今昔』（光文社新書）だ。同書は、古くは江戸時代の1859年から、バブル絶頂期の1980年代末までに撮影された写真との比較撮影を行ったものだ。

『定点写真で見る　東京今昔』（光文社新書）

著者の鷹野はこれまでにも定点撮影を行ってきた写真家として知られる。同書では、距離、アングル、画角といった撮影において基本的な部分について、できうる限り忠実に再現しようと努めていることが注目に値しよう。本書のまえがきでは、「この旅に必要なのは『空想力』や『妄想力』です」と書いているが、その点を刺激するためには技術的精度が必要だと知っているのだ。じっさいその精度によって、建物や道路などのように時代ごとに変わるものと、変わらぬ地形などの差が浮き彫りにされている。不思議なことに、私には後者の方が印象に残った。変わらぬ地形は過去と現在の違い如実にするとともに、未来の東京の景観も空想も促してくれるのだ。

プロとアマチュアとを問わず、カメラを手にする人はその時代ごとの技術を使って撮影を行ってきた。その膨大な蓄積は、すべて人間の営みの記録である。それを昔のできごとを知る資料として眺めるだけではなく、自分たちの今の暮らしと重なるものとして捉え直す。いわば当事者の視点で歴史を眺めるのを促すこと、それが写真の記録性についての新しいアプローチになり得るはずである。

著作権研究（連載 57）

デジタル時代の著作者名表示を考える

吉川信之（理事・著作権担当）

著作権者不明の著作物をオーファンワークス（孤児作品）と呼び、写真著作物の分野ではその増加が問題となっています。著作権法の改正で、授業目的での著作物の使用に対し著作者に補償金を支払う「授業目的公衆送信補償金制度」の運用・分配がスタート。この制度を活用するためには、公表された写真に写真家名（著作権者名）が明記されることが必要です。改めて、デジタル時代の著作者名表示を考えてみませんか。（著作権委員会）

著作権法では著作者人格権のひとつとして氏名表示権を定めています。著作者（写真家）は、撮影した写真を公表するときに著作者名を表示するか、しないか、表示するならば本名で公表するのか、ペンネームを使用するかを自由に選択できます。この権利は人格権なので「一身専属」とされ、他人に譲渡したりすることはできません。氏名表示権は大切な権利です。

近年、オーファンワークス（孤児作品）と呼ばれる、著作権者不明の写真が急増して大きな問題となっています。写真の著作権は写真家の死後 70 年間保護され、権利者に占有されます。他人の写真を使うためには、使用許諾が必要となります。「写真を使いたいのだけれど撮影者がわかりません。どうしたらよいのでしょうか？」という相談が JPS 写真著作権相談室に寄せられます。正しい手続きをして写真を使いたいのだけれど、著作権者がわからないので使えない、というケースが増加しているのです。

写真は著作権の保護期間について、長い間特別な扱いを受けてきました。旧著作権法では「発行または製作後 10 年間（他の著作物は著作者の死後 30 年間）」、現在の著作権法（1971 年施行）改正時にも写真だけが「公表後 50 年間」とされました。写真著作権が他の著作物と同様の「著作者の死後 50 年間」に改正されるには 1996 年（翌年施行）までかかりました。

理由として「著作者不明の写真が多いから」と議論されたことが国会の記録にも残っています。「かつては著作者名の表示を欠く場合が非常に多かった。そして、その写真の著作者をなかなか特定することが難しかった（原文ママ　第 139 回国会　参議院文教委員会議事録第一号抜粋『著作権関連記事Ⅱ』JPS）」。著作者不明の写真が多いと「著作者の死後から保護期間を起算するルール」が機能しなくなってしまうという指摘です。著作者名表示の徹底は、写真界全体にとっても重要な問題なのです。

●Exif ファイルに著作権情報を書き込む

デジタル写真に、どのように著作者名を表示すればよいのでしょうか？これは写真データでの受け渡しと、作品の公表に分けて考える必要があります。

かつて、写真の受け渡しにはモノが介在しました。プリントの裏に著作者名や連絡先を書いたシールを貼り、ポジのマウントやネガ袋に必要な情報を明記する。デジタル移行した後でも、DVD-ROM などのレーベル面に著作者名や連絡先、使用条件などを記載することができました。しかし、オンラインで写真データのみを送受信するようになると状況が変わりました。物理的な書き込みができる写真の入れ物がなくなってしまったのです。

対策として、写真ファイルの Exif に著作権情報を書き込むという方法があります。Exif フォーマットの中には、撮影年月日や撮影情報などとともに著作権情報を記録できる項目が準備されており、カメラや現像ソフトを使って書き込むことができます。

カメラで設定すれば、撮影した写真に自動的に著作権情報を書き込むことができ便利ですが、情報量に制限があります。現像ソフトでは、多くの情報を記載できるのがメリットです。写真の使用条件を記載することなども可能で、複数のプリセットを作成し、目的に応じて内容を使い分けることができます。

筆者はこれらを組み合わせて使用し、撮影時にカメラの設定で基本的な情報を記載、必要に応じて現像ソフトで詳しい情報を上書きしています。

記載する情報は最低限、著作者名と連絡先が必要でしょう。著作者は誰か、どのように連絡をとることができるのかということです。しかし、電話番号や仕事用のメールアドレスを写真データに記載してしまうことに抵抗がある方も多いでしょう。

その場合は、転送設定をしたフリーメールなどを準備し、著作権管理用とする方法も有効です。

●Web での公表は画面内に記載！

写真の公表はインターネット上のホームページやブログ、SNS など行われることが多くなりました。この変化もオーファンワークス増加の原因です。

インターネット上で写真を公開することは、写真データ自体の掲載です。写真の隣に著作者名を記載することは大切ですが、ページ上では写真と著作者名は別のファイルとして存在します。もし、写真だけをドラック＆ドロップでコピーしたり、インラインリンク（画像の直リンク）で表示されてしまえば著作者名は反映

されません。

無許可での写真の複製や使用は著作権の侵害となりますが、私的な範囲や教育目的での使用（後述）では権利が制限されることもあります。また、「インラインリンクはWebのページ上の写真データへの直のリンクなので著作権侵害に当たらない」という判決もあり厄介です。写真と著作者名が別ファイルとしてインターネット上に掲載されることは大きな問題なのです。

対策として、写真の画面の中に著作者名を記載する方法があります。最近ではブログやSNSなど、インターネット上での写真公開で、この方法を使っている写真家が増えてきています。

方法は簡単。アップロードする写真を複製し、画像ソフトなどで著作者名を記載すればよいのです。誰かが意識的にレタッチしなければ、記載した著作者名が消えることはありません。

写真家にとっては馴染みの薄い方法ですが、絵画や書、彫刻などの分野では一般的。作品の中に署名を記載することは昔からの習慣となっています。

●著作権者IDを活用しよう

公表した写真をオーファンワークスにさせない方法として、Exif情報の活用と写真画面への著作者名の記載という方法を紹介しました。しかし、これでは情報不足だという方も多いでしょう。

一般社団法人日本写真著作権協会（JPCA）では加盟する11写真団体会員の職業写真家をはじめとする会員に「著作権者ID」を付与しています。

この番号は写真や美術などといった視覚芸術団体とともに作成した、著作者を特定するための識別番号です。JPSではすべての正会員に著作権者IDが割り振られ、会員証に記載。JPSホームページの「会員情報」でも公開しています。

著作権者IDは先頭のアルファベット4文字が国や著作物の分野を示し、続く数字4桁が所属団体名、末尾4桁が個人番号（JPSでは会員番号）を表します。所属団体名と会員番号を組み合わせることで、著作者を特定することができるという仕組みです。含まれる情報は団体名と会員番号だけなので、安心して使用することができます。

カメラの設定で、写真ファイルのExifに自動的に著作権情報を書き込むことができます。

写真の使用を希望する人がこの番号から写真家にアクセスするためには、JPCAの事務局に問い合わせることから始まります。JPCAは番号から写真家が所属団体を判断し、団体の事務所を紹介。照会者が団体を介して問い合わせることで写真家と連絡をとることができます。多少の手間はかかりますが個人情報を守り、著作者の転居などにも対応することができます。是非、ご活用ください。

●公衆送信に伴う補償金の発生

現在、2018（平成30）年の著作権法改正によってスタートした「授業目的公衆送信補償金制度」の運用が始まっています。従来から学校の授業などでは「必要かつ適切な範囲」での著作物の複製などが著作権者の許諾を得ることなく、無償で認められていました。

近年、タブレットやコンピューターなどのICT技術を活用した機器が学校の授業で使用されるようになりました。著作物のデータをコンピューターやタブレットに送信して使用することは複製ではなく公衆送信になります。著作権法の改正で、著作物を許諾なしに使用できる範囲を公衆送信まで拡大し、権利を制限される著作権者に対して補償金を支払うことになりました。なお、補償金の支払い対象者は著作権者本人とされています。

この制度では学校の設置者から指定管理団体（SARTRAS）が学校種別ごとの単価に生徒数を乗じた額の補償金を収受し、権利者に分配します。補償金の徴収と分配はすでに始まっています。

具体的には、授業の予習・復習用の資料をメールやサーバーで送信したり、リアルタイムの配信授業や講義映像の送信なども可能です。しかし、インターネット送信はその広がりに制限がなく、権利者への不利益が大きくなることが懸念されます。そのバランスを取るために制度を利用する教育機関の設置者が補償金を支払い、著作権者に分配するという仕組みです。

教育現場ではたくさんの写真が使われることでしょう。補償金の支払いは著作物を利用した教育機関からの利用報告などを元に集計されるので、著作者不明の写真には補償金を支払うことができません。公表された写真に著作者名が明示されることが必要なのです。

続いて2021年には図書館での複写サービスに公衆送信を加える「図書館等公衆送信補償金制度」が成立し、補償金制度の導入や運用の検討が進められています。この場合にも、写真を公表する際に著作者名表示が重要となります。

写真の著作者名表記の問題は、氏名表示権という写真家の精神的な問題に加えて、経済的な問題である補償金の受け取りにも及ぶことになりました。写真家自身の問題として真剣に著作者名表示を考える必要があると考えます。

新型フィルムカメラ「PENTAX17」登場

手間の掛かる操作が文化になっていくのか

桃井 一至（JPS 会員）

2024 年 6 月、リコーイメージング社より、PENTAX17（イチナナ）が発表、7 月 12 日より発売された。これは同社が 2022 年 12 月に公表した「フィルムプロジェクト」に端を発して誕生したモデル。

予約開始から数日で受注停止に至るほど、カメラファンの間では久しぶりのフィルムカメラ登場に沸いた製品だが、本題に入る前にこれまでのフィルムカメラの動向や現状を振り返っておこう。

■フィルムからデジタル移行への 20 年

デジタルカメラが主流になって久しいが、デジタルとフィルムのターニングポイントは 2001 年に遡る。2001 年はレンズ交換式デジタルカメラではキヤノンは EOS-1D、ニコンは D1X が登場した頃で、上級モデルの黎明期。コンパクトデジタルカメラはその少し前から普及しはじめ、この年を境に国内市場ではデジタルカメラがフィルムカメラの出荷台数を抜き、一気に置き換わっていった。

私たちの仕事も印刷の DTP 化やインターネットの普及や回線の高速化も伴って様変わりし、それらと親和性の高いデジタルカメラに移行。高画素化や画質も年を追うごとに改善されて、こと業務撮影に関して、フィルム使用が急速に減少していったのもこの頃だ。

フィルムカメラはメーカー各社、市場の縮小に伴い、レンズ交換式一眼レフではキヤノン EOSKiss7（2004）、ニコン F6（2004）、ペンタックス *ist（2003）、ミノルタ α -70（2004）あたりを最後にフェードアウト。チェキに代表されるインスタントフィルムカメラがデジタルネイティブ世代に受け入れられたが、近年のフィルムカメラといえば、趣味性の高いライカ M6 が復刻したとはいえ、トイカメラが主流だ。

■久びさのフィルムカメラ登場

このように長らく風前の灯となっていたフィルムカメラだが、レコードなどと同様に根強いファンも多く、写真作家やベテラン愛好家が楽しむ一方で、近年、スマートフォンなどに幼い頃から慣れ親しんだデジタルネイティブ世代にヒット。筆者の感触では、2010 年代中頃以降、これまで中高年層が中心であった中古カメラ店に若者が来店、フィルムカメラの使い方を店員に習って購入する姿を見かけるようになった。

人気の秘密はレトロブームやフィルムの持つ独特の階調や柔らかみのある描写、レンズ設計の古さから発生しやすいレンズフレアーなどが「エモい」（気持ちが揺さぶられた感情表現、エモーショナルが語源）と、一般的に高画質とされるデジタルカメラのクッキリした描写との違いが、好意的に受け入れられたものと思われる。

一方、そのブームの影で生産終了後、時間の経過と共に、程度の良いフィルムカメラも減り、価格も高騰。修理対応期間の期限切れやパーツの払底。修理業者の高齢化など、ファンにしてみれば不安要素を抱えて、フィルム撮影を楽しむほかない現状が続いている。

そこへ一石を投じたのが、リコーイメージング社の PENTAX17 というわけだ。

もちろん、この 1 台の登場だけではすべての問題解決は叶わないが、メーカー保証のあるフィルムカメラが新品で手に入るのは、これからフィルムを楽しみたいと思う人たちには大きな福音となるはずだ。

タイミングよくリコーイメージング株式会社の PENTAX17 の企画担当者、スズキタケオ氏へインタビューできる機会があったので、その内容も織り交ぜて紹介していこう。

■シンプルな作りに歴代機のデザインを汲む

本題の PENTAX17 は 35 ミリ判フィルム 1 コマの約半分となるハーフサイズフォーマット（17 × 24 ミリ）の単焦点フィルムコンパクトカメラ。フィルム 1 コマが 35 ミリ判（36 × 24 ミリ）のほぼ半分の面積のため、36 枚撮りフィルムならば、72 枚撮影可能になる。また本機では通常のカメラの構え方では縦位置になる。私たちには少々違和感あるが、同氏によれば、先入観ないままにスマートフォンに親しみ、TikTok をはじめと

リコーイメージング株式会社「PENTAX 17（ペンタックス イチナナ）」 メーカー希望小売価格は 107,000 円（税別）

レンズは 25 ミリ F3.5（35 ミリ判換算、37 ミリ相当）の固定式単焦点レンズ。3 群 3 枚構成に 9 枚羽根の絞りと HD コーティングを採用。ゾーンフォーカスに連動する距離目盛が下に見える。　（撮影：柴田 誠）

する縦位置動画などに慣れ親しんでいる世代には、抵抗なく受け入れられるとのことだ。

全体的な構造は至ってシンプル。レンズにズームはなく、25mmF3.5 の固定式単焦点レンズで、ペンタックスのフィルムコンパクトカメラ ESPIO（エスピオ）mini のレンズをモチーフにしたレンズ構成の極めてシンプルなトリプレット 3 群 3 枚を採用。画角は扱いやすく定評のあったリコーオートハーフに揃えたという。

オートフォーカスはなく、ピント合わせは遠近の 6 か所 [マクロ（0.25m）、クローズアップ・テーブルフォト（0.5m）、至近距離（1.2m）、近距離（1.7m）、中距離（3m）、遠距離（5.1m ～∞）] のアイコンイメージから距離を設定するゾーンフォーカス方式を採用する。

ファインダーは光学式のアルバダ式ブライトフレームファインダー。フィルム送りはレバー巻き上げ式。撮影終了後の巻き戻しはクランクで行い、後付のモータードライブなどの用意もなく、すべて手動で行うことになる。

露出モードはカメラ任せのオート露出がメイン。モードダイヤルにてフラッシュ発光、非発光にグループ分けされ、そのなかでボケやバルブ、低速シンクロなどが設定できる。

なお露出補正は上部にあるダイヤルで設定可能だ。

外観はフィルムカメラの高級機 、ペンタックス LX の記念モデルのカラーをモチーフにしたほか、巻き上げレバーや意匠、シャッターボタン周りなどにペンタックスの歴代モデルを彷彿とさせるデザイン要素を盛り込み、新旧ファンが共に喜びを味わえる仕上がりだ。とはいえ、往年のフィルムカメラを知るベテランからすれば、古典的な初心者向けカメラで、少しさみしく感じるかもしれないが、スズキ氏によれば、フィルムカメラでは当然のように用いられていた、撮影完了後に裏ブタを開けると同時にフィルムカウンターが戻る機構ですら、メカが複雑で、現代に作るには難易度が高く、むしろモーター給送でデジタルカウンターを設けるほうがやさしい、という。

時の流れとともに、時代とともにモノづくりも変わり、昔の当たり前が通用しないため、生産現場ともお互いに入念な相談や調整をしながら、製造にこぎ着けたと説明。なおフィルムカメラ全盛期にレバー式フィルム巻き上げに携わった開発者も、最後のひとりが今春に定年退職を迎えられたらしく、ギリギリ間に合ったとのことだ。

■一過性のブームで終わらない文化として

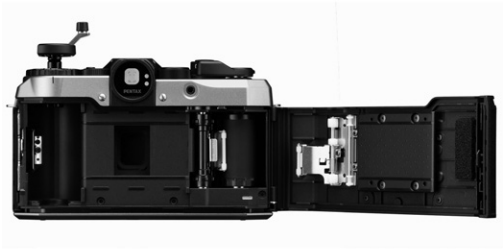
同社は今回のモデルを第一弾に継続的にフィルムプロジェクトとして、フィルムカメラのモノづくりを進めて行きたいという。もちろん、カメラメーカーだけが頑張っても、フィルムの製造や現像など後処理も含めたインフラの継続も重要で、一過性のブームでなく、文化として残していけるかが大きな課題になるが「PENTAX17 だけでなく、フィルム愛好家全体で盛り上げていきたい」と語る。

レンズを向ければ、どんな難しい撮影対象でも失敗なく撮れる現代のカメラと比べれば、とにかくナイナイづくし。潔いほどにシンプルで半世紀以上、タイムスリップしたかのような構造だ。

スズキ氏は「あえて全自動でなく、今のカメラでは忘れつつある、人がひとつひとつ操作する余地を残すことで、創造性や個性が発揮できる。そして現像が出来上がるまでのワクワクする気持ちも楽しんで欲しい」と説明する。

（製品画像：メーカーホームページより）

中央左側には巻き戻しクランクや ISO 感度ダイヤルと露出補正ダイヤル。右側にはモードダイヤル、メインスイッチ、シャッターボタン、巻き上げレバー、フィルムカウンターを備える。



画面左から右へのフィルム送りに対して、ハーフ判のため、撮影画面は縦位置になる。フィルム装填時は先端をマークに合わせて置く、イージーローディング方式を採用。

ニコンイメージングジャパン

フルサイズミラーレスカメラ　Z6III 想像を超えた表現が待っている。

・高速の被写体も逃さず捉える、さらに磨きをかけた高速性能

部分積層型CMOSセンサーにより、高速データ読み出し及び画像処理エンジンEXPEED7との連携により、約20コマ/秒の高速連続撮影（拡張）時も滑らかなファインダー像（電子シャッター時）を実現。プリキャプチャーも可能な最高約120コマ/秒（※）の高速連続撮影も可能です。（※JPEGのみ。撮像範囲はAPS-Cサイズ/DXフォーマット）

・明るい環境下でも被写体を確実に確認できるEVF

Z6IIIのEVFはZ9をもしのぐ明るさを実現。屋外での撮影、色鮮やかな被写体の撮影、あるいはHLGでの撮影でも、鮮明でシャープな結果が得られます。

・6K 60p N-RAWの内部収録をはじめ、高い動画性能を発揮

12bit 6KのN-RAW、ProRes RAW HQや10bit 5.4KのProRes 422 HQの内部収録が可能に。外部レコーダーなしのコンパクトなカメラシステムで、グレーディングの自由度が高い映像を撮影できます。1回の撮影で最長125分（[H.265 8-bit（MOV）]の場合）の連続記録が可能。さらに、最大10倍のスロー映像、フルHD 240pのH.265（10bit/8bit）も収録できます。

【問い合わせ先】
株式会社ニコンイメージングジャパン
インターネットからのお問い合わせ
https://www.nikon-image.com/support/contact/internet.html
電話でのお問い合わせ
ニコンカスタマーサポートセンター
TEL:0570-02-8000 営業時間 9:30～18:00

タムロン

10.7倍の高倍率ズームレンズ 28-300mm F/4-7.1 Di III VC VXD（Model A074）ソニーEマウント用 2024年8月29日より発売

1本で広角28mmから望遠300mmまでをカバーする、フルサイズミラーレス一眼カメラ用の高倍率ズームレンズです。ズーム倍率10.7倍ながらも、長さ126mm、質量610gを実現。描写性能も優れており、リニアモーターフォーカス機構VXD（Voice-coil eXtreme-torque Drive）を搭載することで、ズーム全域ですばやいピント合わせが可能です。また手ブレ補正機構VC（Vibration Compensation）を搭載し、300mmまでの望遠域の撮影をサポートします。広角端28mmでの最短撮影距離は0.19m、最大撮影倍率は1:2.8と、ワイドマクロの撮影も楽しめます。

静止画・動画撮影の表現の幅を広げる独自開発の専用ソフトウェアTAMRON Lens Utility ™用コネクターポート・フォーカスセットボタンを搭載しているほか、簡易防滴構造と防汚コートも採用。撮りたいあらゆるシーンに、この1本が応えます。

【問い合わせ先】
株式会社タムロン　映像事業本部
マーケティング企画部
担当：西角・城山
TEL：048-681-1513（直通）
E-mail：tamron_photo_pr@tamron.co.jp
URL：https://www.tamron.com/jp/consumer/

日本写真芸術専門学校

ハービー・山口氏が新校長に＆「フォトコミュニケーション科」新設

日本を代表する写真家の一人であるハービー・山口氏が、2024年4月1日付で本校の校長に就任しました。山口氏の才能とご経験、そして教育への情熱が、次代を担う優秀なクリエイターの育成に不可欠である。そうした判断から、このたび招聘する運びとなりました。去る6月25日（火）～7月2日（火）には渋谷ヒカリエにて、山口氏による校長就任記念写真展も開催しました。

また今春より、社会人や高校既卒者の“学び直し”に主眼を置いた「フォトコミュニケーション科」を新設。仲間と共に写真を学び、その成果を社会に結びつけていく

「写真を通した人や社会とのつながり」を育む経験を重ねながら、人生を豊かにするための学びが得られるカリキュラムです。本学科では、山口校長が直々に教鞭を執る授業も予定しております。

写真業界のますますの発展に貢献すべく、本校ではこれからもさまざまな取り組みにチャレンジして参ります。

【問い合わせ先】
学校法人呉学園　日本写真芸術専門学校
入学相談室　Mail：npi.info@ndg.ac.jp
Tel：03-3770-5585
HP：https://npi.ac.jp/

旭東エレクトロニクス

SUNEAST® VPG400対応 CFexpress™ Type Bカード発売。

SUNEAST® VPG400対応CFexpress™ Type Bカード（400GB/800GB/1600GB）は、動画と写真撮影において、プロフェッショナルなパフォーマンスを発揮するために設計されています。このカードは、VPG400規格に準拠し、最低継続書き込み速度1600MB/秒（400GBは800MB/秒）を保証するため、8Kビデオ撮影や高フレームレートの映像記録に最適です。

この商品は、厳しい品質管理の下で製造されており、最大読み出し速度1600MB/秒、最大書き込み速度1500MB/秒を実現。高速データ転送と迅速なワークフローを提供

します。さらに、-10℃～70℃の動作温度範囲と-40℃～85℃の保管温度範囲に対応し、過酷な環境下でも信頼性を発揮します。

また、各主要カメラメーカーにて互換性検証済みであり、幅広い機器での使用が可能です。長期保証として、日本国内での5年間保証も提供されており、安心して長期間使用できます。

【お問い合わせ先】
株式会社 旭東エレクトロニクス
E-mail: info_pr@suneast.co.jp
URL: https://suneast.co.jp

マンフロット

マンフロット三脚 50 周年

1972 年に創業したマンフロットは、その 2 年後に三脚を発売してから今年でちょうど 50 周年を迎えることになりました。イタリア生まれのブランドながら、遠く離れたここ日本でも多くの写真家の皆さまに支持され、今もなお愛され続けているブランドである事を大変嬉しく思うと同時に、これまで支えてくださった多くの写真家の皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。マンフロットは現在、この 50 周年を記念して、国内の写真誌、カメラ誌横断の特別企画を実施中です。5 月(6 月号)から 12 月まで、毎月いずれかの雑誌および WEB メディアにて、様々なジャンルの写真家の方に、マンフロットへの想い出やおススメ製品などをご紹介いただいていますので、ぜひご覧ください。また、7 月より、これまで 1 年間であった製品の標準保証期間を 2 年間に変更し、これまで以上にマンフロットの高品質を安心してご使用いただけるようにいたしました。マンフロットはこれからも、革新性溢れる製品開発への挑戦と、信頼性の高い製品のご提供を続けてまいりますので、今後とも変わらぬご愛顧の程をお願い申し上げます。

【問い合わせ先】
ヴィデンダムメディアソリューション(株)
マーケティング部　菊池克行
URL：https://www.manfrotto.com/jp-ja/

清里フォトアートミュージアム

ロバート・フランク生誕 100 周年記念展「もう一度、写真の話をしないか。フランクと同時代の写真家たち」

清里フォトアートミュージアムでは、9 月 29 日（日）まで、ロバート・フランク生誕 100 周年記念展を開催中です。ストリート・フォトグラフィーの偉大な先駆者として 1950 年代の写真界に衝撃を与えたフランク。今回は当館収蔵の氏のヴィンテージプリントより、写真集未掲載作品が半数を占める 1948 年～ 60 年代の 78 点、そして同時代に国内外で活躍したウィリアム・クライン、W. ユージン・スミスをはじめ 20 名の作家による 70 点（当館蔵）を公開しています。日本、アメリカ、ヨーロッパで当時撮影された作品を並列し、写真史における 50 年代を再考察、フランクが写真界にもたらした大きなうねりを感じていただき、その生誕 100 周年を祝福して頂く機会となることを願います。

【問い合わせ先】
清里フォトアートミュージアム
E-mail：info@kmopa.com
URL：https://www.kmopa.com/

セコニック

建築照明用カラーメーター 分光色彩照度計 C-4000

セコニックでは、建築照明デザイナー向けのカラーメーター、分光色彩照度計 C-4000 を発売します。本製品はメーター本体での測定のみならず、スマホやタブレットからアプリを介してリモートでの測定が可能です。照度、色温度、⊿uv、演色性（CRI/TM-30)、色度座標の測定ができ、スマホに取込むことで各グラフの閲覧が可能。またアプリ内課金でアップグレードすると、図面をアプリ内に読み込み、図面上に測定値を埋め込むことができます。また測定値へのスマホ画像の添付や GPS 地図データの付帯、アプリ内でレポートの自動作成も可能です。測定できるのは定常光のみ、屋内向けのため照度上限が 10,000 ルクス（EV12）まで。照度限界が低くはありますが、撮影セットの画像を撮影し、各光源の色温度を埋め込んだ、レシピ作りなどに活用できます。

【問い合わせ先】
株式会社セコニック
営業部　営業 1 課　吉澤
TEL：03-3978-2366
URL：https://www.sekonic.co.jp/product/meter/index.html

浅沼商会

「賛助会員入会のご挨拶」

株式会社浅沼商会は明治 4 年（1871 年)、創業者浅沼藤吉が日本初の写真材料店を日本橋呉服町に開業しました。今日まで日本の写真の歴史とともに歩んできました。お陰様で 100 年超の間、お客様に愛されているブランドであるキング写真用品をはじめ、三脚の FOTOPRO、動画撮影機材の IFOOTAGE など様々な撮影関連用品を幅広く取り扱っている企業です。プロ・アマ問わず、カメラ愛好者の方々の痒いところに手が届き愛されるブランドを目指しております。

JPS 会員の皆様と交流を深めることで、より撮影が便利になり写真が楽しくなる製品を世に送り出したいと考えています。こんなことがしたい、こんな機材・用品が欲しい、などのお声をぜひお聞かせ下さい。

【問い合わせ先】
株式会社浅沼商会
イメージング事業部　商品部　山岡
E-Mail:info@asanuma1871.jp
URL:https://www.asanumashoukai.co.jp/

＜新・声のライブラリー＞　松本徳彦さん（名誉会員）
「舞台に憧れ、時事を追い、歴史に学ぶ」

本誌が1973年発行の33号から連載した「声のライブラリー」シリーズでは、各分野で活躍する写真家の生の声を収め、時代を証言する貴重な記録となった。それから時が経ち、日本の写真界も近年は様変わりが著しい。そこで新たに「新・声のライブラリー」シリーズを立ち上げ、写真家の仕事を通して日本の写真の歴史、現代の位置づけについて、思いを巡らせてみることにした。新シリーズの第1回目は、当協会の名誉会員である松本徳彦さんにご登場いただいた。

聞き手：小池良幸専務理事、伏見行介常務理事
2024年6月13日（木）　於：JCII会議室

■ 何でもやってみたかった若き日々

――　まず最初に、松本さんが写真家を志された、その経緯から教えて下さい。

松本：僕が写真に興味を持ったのは、中学校の２年生くらいです。僕は尾道という広島県の古い商都に生まれて、男ばかり３人兄弟の末っ子です。末っ子というのは、いつかは家を出て働かなければいけないという宿命があるわけですね。ですから、将来のことを考えて、何かをやらなければならないということは、高校生の頃から考えておりました。それでは何をやるのかと思ったときに、私は科学雑誌を読むことが多少好きだったことと、それから人に関する日常的な話題に関心を持っていたということがありました。そこで新聞記者のようなものをやってみたいなと思い始めたのが、写真を志すことになったひとつの理由でしょう。父にその話をしたら、「業界紙のようなものは駄目だ」と。それから「お客様仕事のようなものも駄目だ」といわれ、「そうではない。文章を書いたり、写真を撮ったりして、それを多くの人に見てもらう仕事がしたいのだ」と、父とそういうやり取りをしていました。

――　それは、いつ頃のことなのでしょう？

松本：昭和29年のことですね。尾道という町は、幸いなことに空襲にあっていませんから、家は残っていましたし、食べ物に困ることもなかった。その点では恵まれていましたし、世の中のことに関心を持つことができたのですね。父からはどんな本を買っても何もいわれなかった。本屋で自分が探して買ってきた本を読む、というのはよくやっていました。中学くらいまでは、Ｏゲージの鉄道模型作りもやっていましたね。

中学の３年生の時に西宮で「アメリカ博覧会」が開催された。野球場を使い、飛行機やロケットをアメリカから持ってきて博覧会をやった。それに行きたくて父に頼み、親戚が宝塚にいたので、そこに泊まるということにして、１人で出かけたのです。博覧会で感じたのは「アメリカの文化は凄いな」ということでした。ロケットというものは、話には聞いていたけれど、見たことはなかった。「アメリカ博覧会」は、私が科学に興味をもった初めての体験でしたね。

――　ご家庭にはカメラは？

松本：父は戦前からカメラを触っていたようですね。「コダックレチナ」という蛇腹式のカメラを持っていました。戦争中に大阪から疎開してきた少年が「リコーフレックス」という当時のベストセラーとなった二眼レフを持っていました。そのカメラを１週間ほど借りて、町の様子や、造船所を撮りました。山の中腹から、進水式を撮ったこともありました。それが、私が写真を撮った最初です。ですから、その頃までの私は、何でも見てみたい、触ってみたいという子どもだったのですね。高校は県立の進学校に進みましたから、多くの級友が大学に進むわけです。私はマスコミの仕事がしてみたいと考えていましたから、早稲田大学を受験したのですが、失敗しました。田舎へ帰らなければ

ならないと思い、予備校に通う準備もしていたのですが、兄の同級生が江古田に住んでいて、その人が「俺の所に来い。目の前に日本大学の写真学科がある」と誘ってくれた。江古田の駅に降りてみると「マスコミへの近道。日本大学藝術学部写真学科」と看板に書かれていた。広島から来ただけで帰るわけにもいかないから、写真学科を受験したら合格しました。で、入ったのは良いのですが、その時、私はカメラを持っていなかったのです。父の「コダックレチナ」を持って行けば良いだろうと思っていたら、東京の人はニコン、キヤノン、人によってはコンタックスや、ライカ、ローライを持っている。大学１年生の最初の半分はカメラを持たずに、学校に行っていました。いつも友人から借りなければならず、望遠レンズも何もない。実際に写真を撮る授業があっても、人のカメラで撮らせてもらうというのが最初の半年でした。私が下宿したのは、遠い親戚にあたる人の家だったのですが、朝日新聞の編集局長をやった方でした。その方から「メディアの仕事をするなら、まず日記を書け」といわれ、「本を読め」ともいわれた。人がやっていることを、どういうふうにやっているのかを知れということです。

夏休みに実家に帰った時に「みんなと同じようにカメラを持たないと、写真の勉強ができない」と父に話したところ、「何が要るんだ？」と聞き返された。良いカメラを持っている友人はいましたけれど、当時話題になっていたニコンＳ型、これが朝鮮戦争の寒い中でも唯一動いたということで世界的に有名になった。それを買ってくれと頼み、当時、ボディが７万２千円くらいでした。その他にも、暗室用品だ、なんだかんだと注文を出したら、10 万円近くの金額になりました。そこで父が 15 万円用意してくれて、それを持って新宿に出かけ、駅前にあったさくらやという店で道具を揃えました。ただ、カメラのレンズは 50㎜しか付いていない。離れた所も撮らなければいけないから、105㎜のＦ 2.5 だったかな、それを買いました。

―― 在学中に舞台写真と出会ったのですか？

松本：私が子どもの頃は洋画を見るのが一種のステータスでした。父がよく映画に連れていってくれたのですが、私がその当時に一番興味を持ったのは、「The Red Shoes」という 1948 年の英国映画で、当時の最新のテクニカラーで美しい映画でした。それで舞台の世界を知るのですね。それまでは生の舞台を見たことはなかったのですが、大学１年生の時に、私の友人がモデルを頼んだ女性の１人に「小牧バレエ団」のソリストがいました。彼女が「来月、日比谷公会堂で『フレンチカンカン』という作品に出るから、見に来ない？」と、入場券をプレゼントしてくれた。当時は学生券というものがあって、それは２階席の後ろの席なので、「写真が撮れるかな？」と思っていたら、とんでもない。写しはしましたけれど、小さくしか写らない。そこで、「ああ、これはもっと色々な道具が要るんだ」と分かり、「少し長いレンズが要る」と、また父にねだりました。父は、本は何でも買ってくれて、その中にはカメラ雑誌もありました。当時は、海外からバレリーナや、音楽家が来日すると、写真家はまずそれを撮ったのです。というのは、被写体がないから。それから、外国から人が来るということが非常に珍しいことだったのです。来日する人も、その国を代表して来るわけです。その人たちを見ることができる。それから、その人たちを撮れるということ。その２つの喜びがあったものですから、学生券を買っては日比谷公会堂に行っていた。そのうちに、日比谷公会堂の切符切りのおばさんたちとも顔見知りになり、私が学生だと知って、こっそり中に入れてくれるようになった。そして、おばさんたちが「最初の演目が終わったら最前列にいる記者たちはみんな帰ってしまうから、そこに入りなさい」と教えてくれた。その頃、最前列にいたのが、木村伊兵衛さん、大束元さん、大竹省二さん、稲村隆正さん…、そういったプロの人たちと同じ場所に、学生服を着た人間がいるわけですよ。そうやって写真を撮っていたことが、舞台写真を始めるきっかけになりました。

手掛けた印刷物を手に時代を振り返る松本さん

―― 周りのプロの人も、松本さんのことを覚えてしまったのではないですか？

松本：次第にね（笑）。増感現像の方法などについてもみんなから教えてもらいました。何でもやってみたい、というのが、その頃の私だったのでしょうね。

■ カメラを持っていなかった写真学科の学生

―― その時には大学２年生になっていたのですか？

松本：１年生の時に、帝国ホテルでスペインから来たマリア・フェルナンデス・モンテスというダンサーがフラメンコダンスをやるというので、端っこに入れてもらって撮らせてもらったのです。その写真を、「ニッコールクラブ」の展覧会に応募したら２枚が入選した。そのうちの１枚が、次の年に出る『ニッコールクラブ』の会報の３ページ目に拡大して載った。その写真を誰が選考したのですか、と編集部の人に訊ねたら「あれは、木村伊兵衛さんが選んだのだよ」といわれた。嬉しかったですね。

―― カメラを持っていない学生が、いきなりそういうことになってしまった。

松本：それが、僕の人生を決めさせてくれたのでしょうね。そんなことが大学の中でも話題になって、次は秋に行われる大学祭の入口に飾る写真に、「お前の写真を使いたい」といわれた。それをいったのは髙村規君ですよ。今のJPS副会長のお父さん。で、フィルムを渡して学校に行ったら、畳1畳くらいに大伸ばしにされてたものが作られていた。それが当時の学生たちの話題になった。そんな経緯があったから、僕が、舞台の写真をやらざるを得ないかな、ということを感じるようになりましたね。

―― 松本さんが、学生時代に「六の会」との出会いがあったということは、私たちの間でも、時々話題になるのですが、その出会いというのは、どのような形だったのでしょう？

松本：当時のカメラ雑誌には、大竹省二さんのような大御所の写真が出ていたから、そういうものがお手本になったのかもしれない。大学時代には、舞台写真を撮りたいという人が何人もいたんですよ。だから、同級生4、5人で切符を買って、撮影に行っていたけれど、長く続いた人はいなかったね。いつの間にかいなくなっていたから。ほとんど大学時代は、学生は報道部会、ポートレート部会など、6つぐらいに専門ジャンルが分かれて、それに先輩の人がつき、先生や、アシスタントが後輩を教えるというのが、日大のやり方でしたね。僕たちのときはね、伊藤則美さんが報道部会の講師で、僕もそこに足を入れました。そこで、「六の会」のメンバーと出会う。野上透君と、木村恵一君は入っていなかったな、髙村君も入っていなかったな。齋藤康一君は、学生時代から林忠彦さんの助手になっています。木村君は渡辺義雄さんのアシスタントでした。髙村君は自分の家にスタジオがありました。

松本さんの足跡を物語る数々のアイテム

―― 「六の会」は、松本さん、髙村さん、野上さん、木村さん、齋藤さん、それから丹野章さんの助手だった熊切圭介さんの6人になるのですが、この会は学生時代から活動をなさっていたのですか。

松本：僕は田舎から出てきたものだから、東京には知っている人がいないんです。ですから、「六の会」の仲間は、僕にとっては最初の友人であると同時に、色々なことを教えていただく先輩でもあった。僕は昭和11年1月生まれだから、年齢は一番若い。木村君、高村君、野上君の3人は上野に住んでいた。そういうことで、ちょくちょく遊び歩いていた。僕は自宅に暗室がないから、木村の家で暗室を借りようとか、御徒町をベースとして、一緒に飯を食ったりしましたね。

―― 東京での暮らしの中で、お互いに助け合ったりして…。

松本：齋藤君は早くから林忠彦さんの助手をやっていたから、もうプロの写真家の世界にいた。髙村君はもともとがコマーシャル系をやっていた。木村君も上手い写真家でね。渡辺義雄さんの助手をしながら。でも助手をやって給料を貰うことは、我々の時代にはなかった。当時、『江戸っ子』という雑誌があって、その仕事をやるようになって、職人の写真を撮らせたら、彼は上手いですよ。そういう関係で、好きだった仕事を一緒にやったのであって、この会は特別な組織ではありません。

―― ということは、活動は大学を卒業した後のほうが活発だった？

松本：そうです。「六の会」の仲間は、僕もそうだったけれども、写真の展覧会を見るのが好きだったのです。展覧会を見に行って、そこに本人がいたら、「話を聞かせてください」と話を聞いたり、中にはお茶を飲ませてくれたりすることもあって、先輩というよりも、仲間に紛れ込んでいたといった方が良いのかもしれない。そういう存在ですね。それが「六の会」です。それが後に日本写真家協会（JPS）でまた一緒になったのです。

■ 1年に150日出張していた時代

―― 学校を卒業なさって、次は就職で、主婦と生活社に行かれた…。

松本：就職しなければいけないと思っていたのは僕だけかもしれない。先ほどもいったように、「六の会」の仲間は、みんな東京人で、自分の世界を持っていたから。

―― 松本さんが、女性誌に進まれたというのは、興味深いところです。

松本：女性誌というよりも婦人雑誌です。当時は百万部くらい出ていた。凄いものですよ。僕は在学中の10月11日から働き始めた。週割りで計算した月給をもらって。

―― 在学中ですよね？

松本：在学中です。だから、給料をもらいながら大学を卒業した。別に僕自身が優れていると思っているわけではないけれど、運が良かったのかもしれないですね。僕がね、何故募集に受かったのかというと、野上君と僕の2人だけが、自分が撮った写真を、アルバムにしていたのです。野上君は「自分がやっていたことを、分かるようにしておかないとダメだよ」と、先輩にいわれていた。僕はいってみれば田舎者ですから、自分が読みたいものをリストにするようなことが好きだったのだろうね。

六の会のメンバー　左から木村恵一、熊切圭介、齋藤康一、髙村規、野上透の各氏と松本さん
（写真提供・髙村達）

―― 当時の雑誌って、勢いがありましたよね。忙しかったですか？

松本：『週刊女性』は忙しかったです。一番多い時はね、年間150日くらい出張していました。皇太子殿下、妃殿下が行啓すると、それについていって、長い時には軽井沢に半月から1か月近くいました。

―― そうした取材は、代表取材とか、そういうのもあったじゃないですか？

松本：それもありました。僕は多かったです。

―― 責任重大ですね。

松本：写真家はもっと要領よくやればいいのにと思うことが何回もあって、侍従に話したことがあるのです。

いつも同じようなことではなく、「殿下は明日プールに行きますから、今日ここで撮って下さいと、それればっかりじゃね、こちらが耐えられなくなる。陛下がお泊りになっているプリンスホテルの裏に大きな池があるでしょう、あそこに次の日、朝早く連れて行ってくれませんか?」と頼むわけです。演出ですよ。それで、朝の8時くらいに殿下に外に出ていただく。「どうぞ、出て下さい」と。そういう演出もね、多少はやりましたよ。

―― 出版社には、月刊誌もあれば、女性週刊誌もあるけど、両方の仕事なのですか？

松本：両方です。僕が会社に入った時は11番目のカメラマンだったのですよ。普通はね、最初は暗室マンをやるんですよ。1年間か2年間それをやって、やっと撮影現場に出かけられるようになる。僕はたまたま若かったからか、威勢が良かったからか、「お前、若いから行ってこい」と、張り込みにも行かされました。そういう現場には、新聞社も、テレビも、雑誌社も、各社がいて、多い時には20人くらいいる。新聞の連中は脚立を先に置いて、どこかに行っちゃうんです。いつも雑誌は隅っこの方に追いやられる。共同通信社にそういう場をまとめる幹事の人がいて「何とかなりませんかね」と、話をしたら「そうか。それはそうだな。それでは雑誌にも場所を作らなければな」と、撮影の場所を決めるクジを作ったこともありましたね。僕たちは撮影現場に毎日行く。新聞社は必要な時にしか来ない。「何やってるんだ！」っていいたいのだけれど、でも先輩がたくさんいるわけだから（笑）。

■ 人と違うやり方で、人に負けない仕事をする

―― 松本さんが、JPSに入られたきっかけというのは？

松本：JPSに入ったのは昭和37（1962）年です。入ってすぐにJPSの広報をやらないか？といわれました。「昔は新聞記者になりたいと思っていた」というようなことをいっていたものですから、周りが気を使ってくれたのでしょう。

―― この「声のライブラリー」シリーズの初期に、土門拳さんにインタビューをしているのですが、その記事をまとめたのが松本さんでした。

松本：父からよく「知らないことは、訊かなきゃ駄目だよ」といわれていましたから、人に訊くことと、それをまとめることは好きだったのですね。兄からは「写真の学校に行ってもいいが、人と同じことをやっていては駄目だ。人と違うやり方で、人に負けない仕事をする。それが仕事というものだ」と。

―― フリーランスになった後は、どのような仕事をされたのですか？

松本：僕が会社を辞めた年に日生劇場（1963年落成）ができたのですね。その時に「松本という人が舞台の写真を撮っているよ」という話を聞きつけた人がいて、連絡がきた。「芝居の写真を撮れますか？」「やれば、できるでしょう」というやり取りがあって、1年間のスケジュールが送られてきた。芝居というものは、まず劇場を確保しなければいけない。それから脚本家を確保して、役者を確保する。1年近く前から準備するわけです。9月の演目は7月に宣伝の準備をする。舞台撮影というのは、夜の仕事になることが多いわけです。そうすると、昼間には一般的な取材ができる。そして、夜は舞台の撮影をやる。いつ自分の仕事をすれ

写真展「世界の舞台芸術家展」搬入風景
1972年　銀座ニコンサロン　（写真提供・松本徳彦）

ば良いのかが分かる。海外に行くのはこの時でいいやと。それともうひとつ、劇場には新聞社に配る写真というものがあるのだけれど、日生劇場の場合は、１つの演目で五百枚くらいの写真を用意する。キャビネの写真を５枚組にして、100組。これを袋に入れて記者に渡すわけ。そのプリントも大きな仕事になりました。この他にも、稽古の様子の撮影もして、日給が４万円。それを２日やれば８万円です。

―― 現在の貨幣価値に換算すると、幾らになるのだろう？かなり良い条件ですよね。

松本：焼いたプリントは１枚100円だったかな？

―― 凄いですね。

松本：よく働きましたよ。

―― 松本さんというと、越路吹雪の撮影で知られていますが、越路さんと出会ったのも日生劇場ですか？

松本：そうです。それまでにも越路さんの撮影はしていましたけれど、本格的に撮影を始めたのは、日生劇場からです。

越路吹雪さんの葬儀の際に使用された写真　1980年11月、日生劇場　（撮影・松本徳彦）

―― 松本さんがJPSに入会された頃のJPSはどうでしたか？

松本：入会した時に、「写真100年　日本人による写真表現の歴史展」という企画が立ち上げられていました。この時は、東松照明、中平卓馬、内藤正敏…という方たちが集まっていました。その時に「松ちゃん、お前何をやる？」といわれて、「何も希望はありません」と答えたら、「お前は文章を書いていたから、年表を作ってくれないか」ということになり、写真家協会が年表を作ったのは、その時が初めてです。年表を作るために本を読んだり、人に話を訊いたりする。話を訊くことも10回以上やっています。「写真100年展」というのは、西武百貨店の催事場を借りて、パーテーションを取り払ってやった。それまでにそういうスタイルで写真展が開催されたことはなかったから、そういう意味ではエポックメーキングな出来事になったのかもしれないね。

1968年、西武百貨店での写真展「写真100年」会場　左から松本、渡部雄吉、土門拳の各氏
（写真提供・松本徳彦）

―― 費用などはどうされたのですか？

松本：「後で払います」と（笑）。まだ、年度での予算立てなどやっていない時代でしたから。それよりも問題は「100年展」に展示するにふさわしい写真をどうやって探し出すか、ということでした。全国に向けて手紙を出すわけにもいかない。お付き合いがあった人たちに電話をかけて、実際にそこに出かけて写真を見せていただくということを、みんなで手分けしてやった。これはどんな事業でも一緒だと思うのだけれど、「こういうことをやりますよ。参加したい方は手を挙げて下さい」と働きかけると、最初は20人も30人も手が挙がるんです。けれども作業を続けているうちに、１人減り、２人減りで、最後まで残ったのは５人だけだったりする。そういうものなのです。だから、人が減るのは気にしないことです。逆にいえば、仕事は５人優秀な人がいれば、何でもできます。人数が多ければできるのかというと、人数が多ければ多いほどできない。

―― 松本さんは、長く写真に携わる仕事をなさってきたわけですが、その中で、いちばんご自身が影響を受けた写真家、写真というのは何でしょう？

松本：展覧会としては、「The family of Man」です。

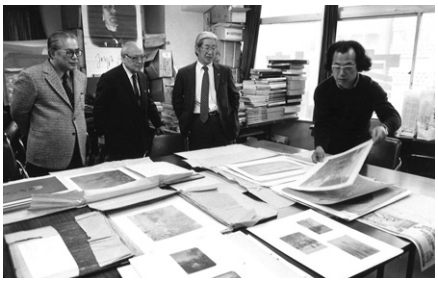
―― 「The family of Man」は、私たちにとって伝説の展覧会となっているのですが、それがJPSの「100年展」に影響を与えているのですか？

松本：それは写真の展示法についてもそうだし、勉強になったことはたくさんありますよ。「100年展」用として、毎日のように写真が集まってくる。それを見て驚かされるわけです。戦争に勝っている情景を撮った写真は、それまでに何度も見ているけれど、負けているところを撮った写真は少ない。それが出てくると、驚かされる。

―― まとめるのは大変だったでしょう？

松本：嬉しかったですよ。展覧会を企画したことで、色々な人と知り合えたということも勉強になったけれども、同時にそういう作業に関わったということの喜びもありました。こういう仕事は、自分１人でできるわけでもないのですから。

―― 私たちが写真家本人に会って話を聞く企画「声のライブラリー」を再開しようと考えたのは、会報の歴史を探る上で不可欠だと考えたからです。会報が日本の写真の歴史を学ぶ際にも役にたったという声もいただき、会報を作っている私たち自身が、も



四ツ谷JPS事務所にて、「日本現代写真史」編纂作業　左から小沢健志、渡辺義雄、三木淳の各氏と松本さん　（写真提供・松本徳彦）

っと会報の価値を高めなければならないということにも気がつきました。今は写真家を取り巻く状況が厳しさを増しており、何もかもが減量を強いられている。けれども文化的な活動はもっと積極的に行っていきたい。

松本：それは難しい問題です。それでは、その活動はお金があればできることなのか？お金はあった方が良いに決まっている。ではお金がない時にはどうするか？自腹を切ってでもやる意志があるのか。それだけの問題だと思います。25人集まった人が5人に減ってしまうというのは、そういうことなんです。僕は辞めた人について「逃げた」とか、そういういい方は一切しない。それが当たり前なんです。ボランティアで始めた仕事は、できないことはできない。できる人がやればいい。

―― 会報の方向性が弱っているのではないかとも考えます。JPSの会報というのは、色々な媒体がある中では、かなり頑張っているという自負はあるのですが、「こういうものを作りたいんだ」という考え方は、松本さんの姿勢に学ぶところが大きいと感じています。

松本：僕は、自分がこういうものがあったらいいなと感じたら、それを言葉にします。すると、それを作らなければならないということになる。何も、特別なことをしようというわけではありません。

■ 写真について考える機会を作る

―― 私たちがいま、写真を改めて勉強する際に、とても役に立っているのが、東京都写真美術館です。松本さんは、あの美術館の創設にご尽力されましたが、写真専門の美術館を作ろうという発想は、どこから始まったものなのでしょう？

松本：写真の文化センターが欲しいな、というような話は、どの時代にもありました。「日本の現代写真史展」が終わった頃、アメリカのコダック社が、世界中の写真家を対象として、コダック本社のあるニューヨーク州ロチェスター市のホールで、74か国から300人の写真家を集めて、写真の歴史を学ぶ会を毎年開催していたのです。そこに「日本からもどなたか参加しませんか？」というお話を、当時の長瀬産業からいただいたのです。その際に、日本の写真の歴史を語れる人、それから機械の話として、ペンタックスのクイックリターンミラーの機構を語れる人の2名を招待したいということになった。僕は、「日本の写真の歴史を語るのであれば、東松さんが適任ではないですか」といったのですが、「昔の写真の話と、現代史の両方学んでいるのはお前なのだから、お前が行け。せっかく招待が来たのだから、行ってこい」と東松さんからいわれました。それでは何を発表するのが良いのだろうと考えてみた。歴史年表を作って、持って行けば良いのかな？と考えていたさなかに、ロシアの戦闘機「ミグ」が函館空港に亡命するという事件が起きたのですね。1976年9月6日のことです。それには世界中がわいたのです。ところが、アメリカの人は、北海道がどこにあるかなど分からない。知らない人が多いと。そこで講演で「北海道開拓史」をやろうと思いついたんです。日本にどんな写真があるのかということを単に並べるのではなく、大切なのは、まず日本のことを知ってもらうことなのだと気がついたのですね。そこで、夏休み中は国立国会図書館に籠って、北海道のことを勉強しました。書いた文章をどうやって翻訳するかは『Modern photography』という雑誌の木俣拓さんという編集者がお手伝いをしてくれました。講演は2時間くらいのものでしたね。

ジョージ・イーストマン・ハウスのドライデン・シアター前にて　左から木俣拓、角館正道、松本、M.A.Matzkinの各氏　1976年10月10日
（写真提供・松本徳彦）

写真美術館設立運動のために作られた小冊子

―― 反響はありましたか？

松本：はい。ドライデン・シアターには120人くらいの人が集まっていたのだけれど、講演が終わると、ジャーナリストが私のところに何人もやって来ました。そして「日本には、こんな文化があるのか」と訊かれた。僕の講演は、彼らにとっての日本像と違っていたのでしょうね。その後十日ほどアメリカに滞在して、色々な所を周りました。ロサンゼルスの州立美術館では、子どもたちを集めて、写真のワークショップをやっていました。日本の小学生くらいの子どもを集めて、写真を見せるのです。日本式の教育では「これは誰々が撮った写真で、カメラマンは何年に生まれて」、ということをやるのだけれど、アメリカはそうではない。「この写真を見て、何を感じたか」ということを訊いて、考えさせる。僕はこれが写真教育だと感じた。何かを教えることではない。考えて、話をさせることが大事なんだ。自分がどう表現するか？それからすると、日本は先生がしゃべり過ぎだ。考えさせることが大事なんだ、とね。先のイベントには、日本からも毎年何人も参加しているのだけれど、それでは彼らがアメリカで何を勉強してきたのか。その報告のフィードバックが何もないんですよ。それでは広がりがありません。

―― そんなことがあったのですね。

文化庁へ提出した「写真保存センター設立要望書」についての記者発表　2006 年 7 月、JCII 会議室

松本：僕がアメリカで集めた資料を持ち帰り、ちょうど川崎に市民ミュージアムが出来るころでしたから、アメリカの事情を伝えた。それがどこまで反映されたかは分かりませんが。それからは、日本にも写真専門の美術館があれば、写真の世界に広がりができるのですということを会報に書きましたし、あちこちで話しました。それから、川崎市市民ミュージアムができて、横浜美術館ができて、東京都写真美術館ができた。その二年前くらいには、土門拳記念館ができていました。

――　そういう施設が生まれるまでは、大変だったのですか？

松本：きちんとした形の資料を作って、その上で事業として相談する。動き出せば、役所は早いんです。横浜が動きだしたら、東京も慌てて動き出しましたね（笑）。まあ、こういういい方をすると角が立ちます。元々、必要だということは理解されていたし、写真に理解のある方がいらっしゃったんですね。ただ、「私たちは、建物は作れます。それではそこに、どのような作品を集め、どのように見せるのかということについては、写真に造詣が深い方の意見が必要です」ということにはなりましたね。

――　東京に住む人間にとって、すぐ近くに写真専門の美術館があるということは、とても幸せなことです。それから、写真保存センターのことについても、少しお話をいただきたいのですが。

松本：写真保存センターというのは、僕がアメリカから帰ってきて、報告会をやり、その話を聞いていた人から「その話を書かないか」といわれた。それに対して「いや、今いちばん大切なことは戦争の記録で、戦争当時の写真を撮っているのに、フィルムの保存が適切ではなく、写真として使い物にならないということがある。だから、そういう写真の保存を急がなければならないのだ」と返事をしたのです。写真美術館を作ることも大事だけれども、失われかけている記録を、きちんと残さなければならない。

――　すると、写真保存センターと、写真美術館は対のようなものと考えて良いのでしょうか？

松本：何かをしなければいけないという機運が高まっていたのですね。

――　アメリカでは、フィルムがきちんと保存されているのですか？

松本：それが、そうではないんですよ。アメリカではプリントを大事にするんです。フィルムが劣化するのはやむを得ないという考え方です。だから、写真を再生する方法はプリントしかない。

――　現状では、写真保存センターは JPS と関わりを持っているのですが、松本さんのお考えでは、独立させた方が良いのでしょうか？

松本：それは独立させた方が良いのだけれど、それでは誰が管理をするのか、ということが課題になりますね。性急に事を進めるのではなく、ある段階を迎えたら、次を考えるべきだと思います。

――　松本さんは、長く JPS に関わりを持たれてきましたが、現在の JPS に対する提言はありますか？

松本：新入会員の方には、今、JPS の沿革史と、保存センター報告は必ずお渡ししています。問題は、それを読んでくれているか？ということです。事務局は大変な努力をしています。それを無にしてはいけない。

――　それからもうひとつ。松本さんは、このたび褒章を授与されました。

2024 年 4 月に紺綬褒章を受章

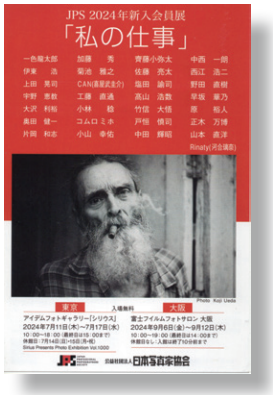
松本：僕は昭和 29 年から写真を始めて、この間に、プリントが何点くらい残っているのか、800 点くらいかなと思って数えてみたら 1,300 点あった。家族からは、これ以上写真を増やすなともいわれています（笑）。「はい。年内には片付けます」と家族には返事をしているのですが、でも捨てることはできない。これまでにも、幾つかの美術館には、僕の写真を収めさせていただいているのですが、まだ手元にある写真を、これからどう扱うのか。これが目下の僕の課題、仕事でもあります。

――　本日は、どうもありがとうございました。

（協力／柚木裕司会員、構成／出版広報委員・池口英司、撮影／出版広報委員・山縣 勉）

※「新・声のライブラリー」のインタビュー内容は動画でも記録しており、後日資料映像として公開する予定です。

JPS 2024年 新入会員展
「私の仕事」



東京：アイデムフォトギャラリー「シリウス」
2024年7月11日（木）～7月17日（水）
大阪：富士フイルムフォトサロン 大阪
2024年9月6日（金）～9月12日（木）

椿（こうぞ）蒸し

一色龍太郎（愛媛県）

コロナ禍明けの花火大会

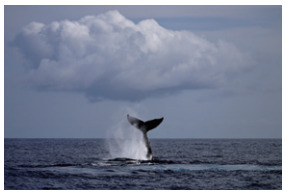
伊東　浩（東京都）

Hong Kong 2014

上田 晃司（東京都）

flowers #063

宇野 恵教（千葉県）



威 嚇

大沢 利裕（東京都）

滋賀県　左義長まつり
左義長奉火

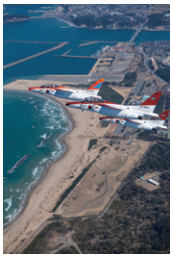
奥田 健一（奈良県）

つむぐ

片岡 和志（東京都）

Shetland Sheep

加藤　秀（静岡県）



翔 駆

菊池 雅之（東京都）

冬 花

CAN(喜屋武圭介)(滋賀県)

さかな談議にこぼれる笑顔

工藤 直通 (東京都)

Newcomers ～
SUPER FORMULA

小林　稔 (東京都)

Life with the Dog

コムロミホ (東京都)

イスラエル - パレスチナの
分離壁

小山 幸佑 (東京都)

サンディマンディラム
- 終の家 -

齊藤小弥太 (千葉県)

うるわしトラディショナル

佐藤 亮太 (東京都)

砂 子

塩田 諭司 (埼玉県)

Let's run / Brooklyn
Bridge/NYC

髙山 浩数 (神奈川県)

Professional

竹信 大悟 (兵庫県)

祭りの後で

戸恒 慎司 (千葉県)

太 古

中田 輝昭 (東京都)

ここで 50 年、商売やってます。

中西 一朗（神奈川県）

大きく見えた

西江 浩二（岡山県）

法輪寺 幽玄の舞い 小督

野田 直樹（大阪府）

淡

早坂 華乃（埼玉県）

金沢に生きる
～もてなしの文化～

原　裕人（石川県）

輝奏（かなで）

正木 万博（兵庫県）

富士と光芒

山本 直洋（東京都）

Osaka street

Rinaty（河合璃奈）（大阪府）

JPS 2024 年 新入会員展 実行委員会：
宇野 恵教／齊藤小弥太／ＣＡＮ（喜屋武圭介）／工藤 直通／小林 稔／戸恒 慎司／中田 輝昭

※ 展示作品各自２点から編集部でセレクトした１点を 50 音順に掲載しました。（構成：小池良幸）

※こちらの QR コードから、新入会員のメッセージがご覧いただけます。

東京展 会場風景（撮影：齊藤小弥太）

東京展 記念写真（撮影：戸恒慎司）

第６回「おやこ写真教室」開催

2024年６月９日　福島県双葉郡浪江町「福島いこいの村なみえ」

教育推進委員会

2020年度から始まった「おやこ写真教室」も今回で第６回目を迎えた。第６回目は東日本大震災の被災地でもあり、今現在も復興に向けての活動が続けられている福島県双葉郡浪江町「福島いこいの村なみえ」での開催となった。

この地での開催に至るきっかけは、公益財団法人上廣倫理財団の問い合わせから始まった。上廣倫理財団は1987年文部省社会教育局（当時）の許可を得て設立され、主に学術研究の助成と交流支援や学校教育の振興、社会文化活動を促進する支援及び助成事業を行っている財団だ。そこから被災地である福島県双葉郡浪江町で子どもたち向けの写真文化活動をできないかという相談が、当協会の教育推進委員会にきたのだ。そこで委員会で話し合い、おやこ写真教室を実施することを決めた。上廣倫理財団からの助成金をもとに、当協会が主催、後援に浪江町教育委員会、協力に上廣倫理財団と、3者体制が整い、福島と東京をつなぐオンライン会議で打ち合わせを重ね、6月9日の開催に至った。

6月9日は午前の部では4組8名の親子が、午後の部は5組10名の親子が参加した。1人1台貸し出しされたリコーのコンパクトカメラWGを手に取り、子どもたちは大はしゃぎ。スマートフォンや学校から支給されたタブレットでしか撮影したことがない彼らにとって、コンパクトカメラはとても珍しかったようだ。

最初に、講師を務める教育推進委員の鈴木正美会員と中村惠美会員から、カメラの各ボタン操作やズームのやり方、そしてマクロモードへ切り替える方法などカメラの使い方を学び、続いて、日の丸構図や3分割構図など構図の作り方、またカメラのアングルを変えると見え方が変わることなどを教えると、子どもたちより保護者の方たちの方が熱心に耳を傾けていたのが印象的だった。そして鈴木講師からは、自分の仕事の撮影現場でどのように撮影しているか、普段見ることのない撮影現場の動画を見せると、早送り場面では、笑いがおきるなど大いに盛り上がりを見せた。

マクロモードで小さな虫の撮影に挑戦！

次に近くの公園に行き、撮影実習を行った。この日は曇り空だったが、気温もちょうど良く過ごしやすい天気のなか、まずは全員で集合写真撮影。撮影は坂井田富三会員のアイデアで、ジャングルジムのような遊具のなかで、それぞれが好きな場所に立ちポージング。我々スタッフも集合写真のなかに参加し、リモコン撮影を行った。そこからは自由撮影となり、参加者は自ら見つけた被写体へ向かってバラバラになった。スタッフがシャボン玉を飛ばすと、シャボン玉を撮影しようと集まってきたり、滑り台から降りてくる子どもの良い瞬間を撮ろうと何度もチャレンジする保護者の方がいたり、はたまた小さな虫を見つけて地面に腹ばいになっ

網のトンネルのような遊具をくぐる子どもを狙うお母さん

風が強いなか、スタッフが用意したシャボン玉を狙う親子

レンズボール越しに撮った写真に興味津々！

講師による作品講評は笑いのたえない楽しい雰囲気に

て必死に撮影する子どもたちなど、知らない者同士だった参加者もいつしか友達になって、おしゃべりが弾み、遊びに夢中になって撮影をすっかり忘れてしまう子どももいるほどだった。撮影実習のあとは、室内の会場に戻り、ベストショットを選ぶ時間だ。「これがいいじゃん！」「えー、これ？」などと親子の会話が飛び交い、それぞれがベスト写真を選んだ。選んだ作品は、プリンター借用のご協力をいただいたエプソン販売株式会社のプリンター EW-M873T で、スタッフがプリント。プリント作業している間を利用して、SD カードでご協力いただいた Nextorage 株式会社の木村仁氏から SD カードの大事さやカードの種類によって書き込み速度がどれだけ違うかなどわかりやすく説明していただいた。その後は、待ちに待った作品講評会。鈴木講師と中村講師が１つ１つ丁寧に作品講評をすると、子どもたちの視点に驚くべきものがあり、大人たちを大いにうならせた。中村講師からは「わー、これ？何？面白い視点で素敵！」「こんな小さな虫、よく見つけたね。すごい観察力です」など、また鈴木講師からは「お母さんに見せる笑顔は格別ですね。この瞬間はお母さんしか撮れません。さすがです！」など和気あいあいとした雰囲気のなか、講評会を終了。

最後に親子の記念写真と各々の作品を２L サイズにプリントしたものをお土産に渡し、すべてが無事終了した。

アンケート結果では、保護者の方々から「初めてきちんと撮り方を教えてもらい、今後に生かしたい」「とても楽しかったです。これからは写真をもっと撮ろうと思いました」「プリントで写真をいただけるなんて嬉しいです」「今度はカメラの選び方などを教えて欲しいです」など。子どもたちからは「自然が好きになった」「もっと写真を撮ってみたい」「がんばったよ」などの感想とともに、アンケート用紙に虫やカメラの絵をかいてくれた子どもたちもいた。

初めての被災地での開催は、その土地に住む人々の感性や想いに触れることができ、大変有意義なおやこ写真教室となった。

後援：浪江町教育委員会
協力：（公財）上廣倫理財団、エプソン販売（株）、Nextorage（株）

※「おやこ写真教室」の様子は、右 QR コードより、日本写真家協会公式 YouTube チャンネルでご覧いただけます。

「おやこ写真教室」開催レポート
https://www.jps.gr.jp/oyako-photoevent6_report/

（記／教育推進事業担当 副会長・山口規子、
撮影／水咲奈々、坂井田富三）

屋外撮影実習の前に、カメラの使い方から学ぶ親子たち

スタッフを交え、参加者全員で記念写真

第49回 2024JPS展
入賞作品紹介

2024JPS展開催によせて

公益社団法人 日本写真家協会
会長　熊切大輔

公益社団法人日本写真家協会（JPS）は、1950年に創立した、現在全国に約1,300名の会員を擁する我が国を代表する職業写真家の団体です。写真家の地位の確立、著作権保護などを掲げ、写真文化の振興と啓発を目的として幅広い活動を行っております。

そのような様々な活動を行うなかで、中心的な事業となるのがJPS展です。当展は日本最大級の写真コンテストとして1976年から始まり、今回で49回目となる歴史ある公募展です。

コロナ禍などによる厳しい社会状況により、昨年までは応募数が減少していましたが、2024年は応募者、応募数とも大幅に増加しました。旅行や行事が再開したことで、撮影チャンスや被写体が戻ってきたことが大きな要因であり、写真を撮る喜びや楽しさがいよいよ復活してきたことを、皆さんも実感されているのではないでしょうか。

世界の状況も不安定さが増し、写真の伝える力、真の役割を改めて考え直す、そんなタイミングに差しかかっているように感じます。世相をも反映する多種多様な受賞作品を通して個性あふれる写真表現の世界をお楽しみいただければと思っております。

写真展の開催にあたり、ご協賛いただいた皆様、審査員の方々、そして応募者の皆様に、心より御礼申し上げます。

総　評

審査員長　熊切 大輔

写真を撮る、そんな当たり前の楽しみがここ数年思うようにいかない日々が続きました。撮影機会が減少しそのモチベーションも上がりにくい状況は、JPS展にも応募作品の減少という影を落としました。加えて生成AIによる画像生成技術など写真界に新しい問題も浮上してきました。写真表現のあり方を根本から見つめ直す時間にもなったのではないでしょうか。

そのような状況の中、2023年の初頭あたりから社会状況の改善の兆しを肌で感じられるようになりました。多くの祭りやイベントの復活、国内外への旅行者増加など、それはすなわち、撮影機会の増加にダイレクトに反映されました。そして迎えた今回の2024JPS展。

審査員：左から、熊切大輔（審査員長）、喜多規子、広田尚敬、前川貴行、村上仁一（雑誌『写真』編集長）の各氏　撮影：桃井一至

応募総数は1,720名3,832点と昨年から大幅にその数が増加しました。応募作品の傾向も変わったように感じられます。幅広い被写体、撮影地の作品が揃い審査員を大いに悩ませてくれました。ぐっとこらえていた時期に蓄えた技術や思いが、作品のクオリティアップにもつながったのか、作品の質も大きく向上した印象でした。

応募作品の中には若い世代の作品も増えてきました。写真のデジタル化は幅広い層に浸透し、表現の幅も広がりました。その自由度をのびのび楽しんでいる作品群は非常に刺激的です。そのような中、上位入賞作品も見ごたえのあるものとなりました。

文部科学大臣賞「時化の日」は今までにない、なんとも印象的な作品です。審査時もジワジワと上位に評価が上がってくるような感じで、審査員一同が「やっぱり気になる」といった感想で一致しました。

東京都知事賞「輪島」は写真の役割を再認識する作品となりました。2024年早々の悲惨な出来事。それをしっかりと記録し記憶することも写真の力であると評価いたしました。その他の入賞作も含めて本当にバラエティーに富んだ被写体、テーマを様々な手法で写し出された作品が集まり審査員一同大いに悩み、楽しく審査することができました。

第49回2024JPS展
東 京 展

東京都写真美術館（B1F展示室）／2024年5月18日（土）～26日（日）
10：00～18：00
（木・金は20：00まで、月曜休館）

共　催／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
後　援／文化庁、東京都

第49回2024JPS展
関 西 展

京都市美術館 別館2F／2024年6月18日（火）～23日（日）
10：00～18：00

後　援／文化庁、京都府、京都府教育委員会、
京都市、京都市教育委員会

文部科学大臣賞

賞状・盾・副賞
賞金 60 万円

日野 昭雄
（北海道）

「時化の日」
モノクロ単写真

東京都知事賞

賞状・盾・副賞
賞金 30 万円

渡邊 喜之（新潟県）
「輪島」　カラー単写真

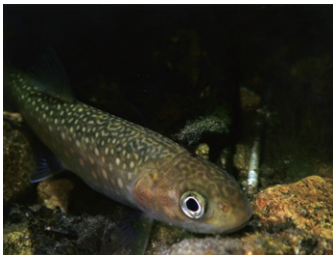
18歳以下部門

最優秀賞

賞状・盾・副賞

常川 大樹
（岐阜県）

「ブナ林地帯の高層湿原に生きる
生き物たち」　カラー５枚組



金賞
賞状・盾・副賞
賞金 10 万円

妹尾 憲絵（北海道）
「すすきの冬からす」
カラー５枚組

銀賞
賞状・盾・副賞

山田　龍（神奈川県）
「YANAKA」　モノクロ５枚組

銀賞
賞状・盾・副賞

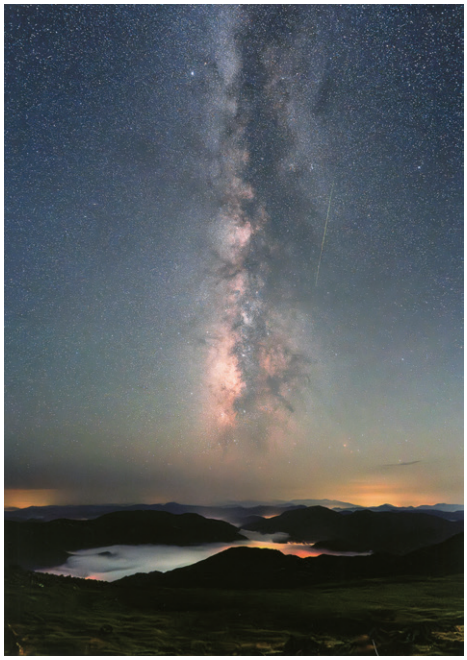
岩永 雅弘
（北海道）
「ニジマスの四季」
カラー４枚組

銅賞
賞状・盾・副賞

芦田 千賀子（京都府）
「無人駅」　カラー単写真

銅賞
賞状・盾・副賞

阪江 範康（滋賀県）
「カルストの空」　カラー単写真



銅賞
賞状・盾・副賞

大浦 美保（和歌山県）
「卒業式」　カラー３枚組

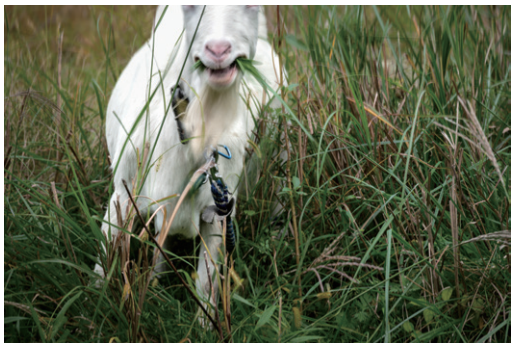
【ヤングアイ部門】

日本写真家協会 会長賞
賞状・盾・副賞

大阪芸術大学 芸術学部 写真学科
「群集の中」
久井 日和・大森 脩平・辻元 ましろ・中村 亜瑞美・西村 祐哉・佐野 昂晴・保科 祐太

ヤングアイ 奨励賞
賞状・盾・副賞

現代写真研究所 尾辻弥寿雄ゼミ
「FLOATING ZONE」
生田 一美・原田 敏朗



2023（令和５）年度小学生を対象とした「写真学習プログラム」報告

写真の楽しさ、面白さを伝える

2005（平成17）年より始まった「写真学習プログラム」は、当初、レンズ付きフィルムカメラで実施していたが、昨今ではコンパクトデジタルカメラを使用し、小学４～６年生を対象に、毎年全国の小学校20クラスで実施している。

写真を撮ることで、児童の育成に必要な「物事を注意深く観察することの大切さ」を体験し、その体験から写真という記録媒体を使って「表現し、伝えること」を学んでもらっている。写真の大切さに加え、撮影マナーも学習することで、写真を社会で幅広く活用してもらいたいという願いがある。

「写真学習プログラム」は、協会の公益事業として会員が学校に出向いて行う授業で、19年間に760校25,593人の児童に実施してきた。児童が、「写真への興味を抱く」きっかけとなる事業である。

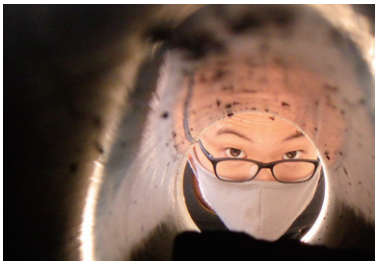
また、多くの方々にこの児童たちの作品を見ていただくため、参加児童の作品を特別企画「“PHOTO IS” 小学生の眼」として、富士フイルム（株）・富士フイルムイメージングシステムズ（株）が主催する「“PHOTO IS” 想いをつなぐ。あなたが主役の写真展2024」（会場・オンライン）で展示される予定となっている。

特別協力：富士フイルムイメージングシステムズ（株）
一般財団法人日本写真アート協会
協力：ウエスタンデジタル合同会社
（株）ケンコー・トキナー
リコーイメージング（株）

【2023年４月～2024年３月実施分】

No.	実施校	県名	人数
1	阿智村立浪合小学校４～６年生	長野県	22
2	木曽町立開田小学校４年生	長野県	12
3	勝浦市立豊浜小学校５～６年生	千葉県	7
4	世田谷区立千歳台小学校５年１組	東京都	34
5	世田谷区立千歳台小学校５年２組	東京都	33
6	世田谷区立千歳台小学校５年３組	東京都	32
7	松江市立八雲小学校６年１組	島根県	32
8	松江市立八雲小学校６年２組	島根県	32
9	勝浦市立総野小学校６年生	千葉県	5
10	横浜市立小坪小学校４年生	神奈川県	23
11	南城市立百名小学校５年生	沖縄県	27
12	南城市立百名小学校６年生	沖縄県	23
13	板橋区立上板橋第二小学校６年１組	東京都	31
14	板橋区立上板橋第二小学校６年２組	東京都	33
15	那須塩原市立槻沢小学校６年１組	栃木県	24
16	那須塩原市立槻沢小学校６年２組	栃木県	25
17	町田市立山崎小学校５年１組	東京都	25
18	町田市立山崎小学校５年２組	東京都	27
	参加人数合計		447

【2023 年度実施小学校児童の作品から】

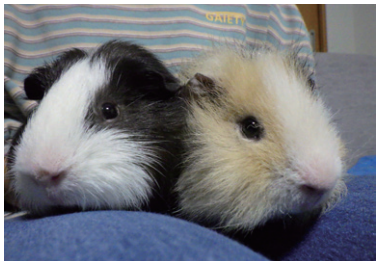

阿智村立浪合小学校 5 年生の作品

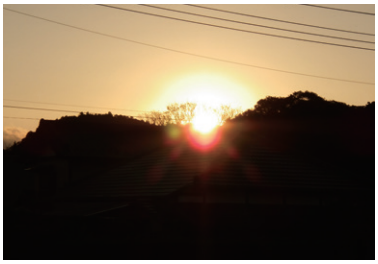
木曽町立開田小学校 4 年生の作品

勝浦市立豊浜小学校 5 年生の作品

世田谷区立千歳台小学校 5 年生の作品

世田谷区立千歳台小学校 5 年生の作品


松江市立八雲小学校 6 年生の作品


勝浦市立総野小学校 6 年生の作品

南城市立百名小学校 5 年生の作品

南城市立百名小学校 6 年生の作品

世田谷区立千歳台小学校 5 年生の作品

町田市立山崎小学校 5 年生の作品

町田市立山崎小学校 5 年生の作品

阿智村立浪合小学校 5 年生の作品

松江市立八雲小学校 6 年生の作品

那須塩原市立槻沢小学校 6 年生の作品

第49回2024JPS展
報　告

写真展事業担当理事　川村容一

2024JPS展は全日程を終え、盛況のうちに幕を閉じた。

東京展は、東京都写真美術館B1展示室にて2024年5月18日（土）～26日（日）の8日間、関西展は、京都市美術館別館にて6月18日（火）～23日（日）までの6日間で開催した。会期日数は昨年同様。

作品応募総数は1,720名5,223枚、内訳は一般部門が1,506名4,798枚、18歳以下部門が214名425枚と昨年比で約15%増加した。コロナの5類感染症移行から行動制限が解除され撮影の機会が増えたことが大きいと思われるが、JPS展への関心が高まったこともあるだろう。応募作品を見ると、海外で撮影したものより国内での撮影が多く、より身近な被写体に目を向けているようだ。また全体的にこれまでより明るい印象を受けた。

審査は熊切大輔審査員長、喜多規子氏、広田尚敬氏、前川貴行氏、村上仁一氏（雑誌『写真』編集長）の5名によって長時間に及び厳正に行われた。文部科学大臣賞は日野昭雄さんの「時化の日」、東京都知事賞には渡邊喜之さんの「輪島」、18歳以下部門最優秀賞には常川大樹さんの「ブナ林地帯の高層湿原に生きる生き物たち」が選出された。

表彰式は東京展初日に東京都写真美術館ホールで行われ、今回は特に多くの出席希望者があり会場は満員、ホールロビーのテレビで中継を観る付き添いの方々も多かった。続いて行われた受賞作品講評会では5名の審査員が上位入賞作品を丁寧に講評し、さきほどの式典とは全く違う張りつめた雰囲気を感じた。場所を変えての祝賀パーティーも昨年を上回る参加者で打ち解けた華やかな雰囲気のなか、受賞者同士、受賞者と会員、賛助・副賞提供各社担当者との笑顔の交流があちこちで見られた。

B1Fの展示会場では受賞作品434枚と審査員特別展示4枚がプリント展示で、ヤングアイ11校と会員作品81点は大型4Kテレビ3台を使った展示となった。明るく広々とした雰囲気の会場には長時間留まる方が多かった。また入口前のロビーには会期前のイベント報告やJPSの事業活動を紹介するパネル展示を行うことができた。外国人来場者のために英文表記も増やした。来場者数は11%増。増ページして作品を見やすくした図録は値上げしたが販売数を23%増やすことができた。

表彰式　（5.18 東京都写真美術館ホール、撮影・桃井一至）

今回は会期前に「JPS会員写真家による作品講評会」、「フィルムカメラ散歩撮影会＆暗室体験ワークショップ」を行い、会期中も「JPS会員写真家による作品講評会」と「プリントしてフィルム愛を分かちあおう」を開催した。加えて会場でもギャラリートークを3回行うなど積極的にJPS展のアピールを展開できた。

関西展は会期前イベント「JPS会員写真家による写真講評会　井戸端写真会～思いが伝わる写真とは？～」と「映えるライティングで撮るセルフポートレート」を開催。会期中は展示会場で表彰式のダイジェスト動画もテレビで再生し好評だった。入場者数、図録販売数は昨年とほぼ同じであったが最終日に開催された「作品講評会」、兵庫県立美術館の小林公氏による講演会「100年の時を超える安井仲治の写真 その創作の秘密に迫る」、そして懇親会は昨年を上回る参加者で盛会であった。

先人が築き上げた運営ノウハウに加えて新しいことにチャレンジできた一年であった。新たな課題が見えてきたのも事実であり50回記念となる2025JPS展に向けて更に邁進していきたい。

今回もご協力いただいた会員諸氏、賛助会員、副賞提供社の皆様、多くの関係者にお礼申し上げる。

2024JPS展図録の表紙

文部科学大臣賞受賞者の日野昭雄さんと熊切審査員長　（撮影・桃井一至）

審査員による受賞作品講評会　（撮影・桃井一至）

第 49 回 2024 ＪＰＳ展の報告

公募受付：2023 年 11 月 10 日（金）～ 2024 年 1 月 15 日（月）
作品審査： 1 月 30 日（火）
審 査 員：熊切大輔（審査員長）、喜多規子、広田尚敬、前川貴行、村上仁一（雑誌『写真』編集長）
後　　援：文化庁ほか
総展示数：534 枚（公募 238 名 434 枚、会員作品 63 名 85 枚、ヤングアイ 11 校 11 枚、審査員作品 4 名 4 枚）
応募総数：1,720 名、5,223 枚
（一般：1,506 名、4,798 枚　18 歳以下：214 名、425 枚）
入賞・入選者総数：238 名、434 枚
一般部門：196 名、358 枚（文部科学大臣賞 1 名、東京都知事賞 1 名、金賞 1 名、銀賞 2 名、銅賞 3 名、奨励賞 5 名、優秀賞 20 名、入選 163 名）
18 歳以下部門：42 名、76 枚（最優秀賞 1 名、優秀賞 10 名、入選 31 名）
総入場者数：4,799 名

入賞者氏名

文部科学大臣賞	日野昭雄	時化の日	単モノクロ
東京都知事賞	渡邊喜之	輪島	単カラー
金賞	妹尾憲絵	すすきの冬からす	5 枚組カラー
銀賞	山田 龍	YANAKA	5 枚組モノクロ
銀賞	岩永雅弘	ニジマスの四季	4 枚組カラー
銅賞	芦田千賀子	無人駅	単カラー
銅賞	阪江範康	カルストの空	単カラー
銅賞	大浦美保	卒業式	3 枚組カラー
			（奨励賞以下略）
18 歳以下部門最優秀賞		常川大樹	
		ブナ林地帯の高層湿原に生きる生き物たち	5 枚組カラー
			（18 歳以下部門 優秀賞以下略）

会員作品：63 名 85 枚

企画展示「ヤングアイ」
公益社団法人日本写真家協会 会長賞：大阪芸術大学 芸術学部 写真学科「群集の中」久井日和・大森脩平・辻元ましろ・中村亜瑞美・西村祐哉・佐野昂晴・保科祐太
ヤングアイ奨励賞：現代写真研究所 尾辻弥寿雄ゼミ「FLOATING ZONE」生田一美・原田敏朗
ヤングアイ参加校：11 校
東京工芸大学 芸術学部 写真学科、現代写真研究所 尾辻弥寿雄ゼミ、学校法人 日本写真映像専門学校、日本大学 芸術学部 写真学科、九州産業大学 芸術学部 写真・映像メディア学科、バンタンデザイン研究所 東京校 2 年制フォトグラフィ専攻、東京綜合写真専門学校、大阪芸術大学 芸術学部 写真学科、名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科、専門学校 大阪ビジュアルアーツ・アカデミー 写真学科、日本写真芸術専門学校 I 部 写真科

【東京展】
後　援：文化庁、東京都
共　催：東京都写真美術館
会　場：東京都写真美術館 B1F 展示室
会　期：5 月 18 日（土）～ 5 月 26 日（日）10:00 ～ 18:00（木・金は 20:00 まで）、月曜休館
表彰式・講演会：5 月 18 日（土）東京都写真美術館 1F ホール　13:00 ～ 14:30 表彰式　参加者数／ 172 名、15:00 ～ 16:30 審査員による受賞作品講評会　講師／熊切大輔、喜多規子、広田尚敬、前川貴行、村上仁一（雑誌『写真』編集長）　参加者数／ 176 名
祝賀パーティー：5 月 18 日（土）17:00 ～ 19:00　恵比寿ガーデンカフェ　参加者数／ 182 名
イベント：5 月 23 日（木）「JPS 会員写真家による作品講評会」参加者数／ 18 名、5 月 25 日（土）「プリントしてフィルム愛を分かちあおう」参加者数／ 15 名
東京展入場者数：3,482 名

【関西展】
後　援：文化庁、京都府、京都府教育委員会、京都市、京都市教育委員会
会　場：京都市美術館別館 2F
会　期：6 月 18 日（火）～ 6 月 23 日（日）10:00 ～ 18:00
作品講評会・講演会：6 月 23 日（日）京都市勧業館「みやこめっせ」大会議室　14:00 ～ 15:30 作品講評会　講師／熊切大輔、川村容一、柴田明蘭　参加者数／ 103 名、15:45 ～ 16:45 演会「100 年の時を超える安井仲治の写真 その創作の秘密に迫る」 講師／小林 公（兵庫県立美術館学芸員）　参加者数／ 72 名
イベント：6 月 9 日（日）「映えるライティングで撮るセルフポートレート」参加者数／ 1 組 2 名、「JPS 会員写真家による写真講評会 井戸端写真会」参加者数／ 8 名
関西展入場者数：1,317 名

協力：キヤノンマーケティングジャパン株式会社、ソニー株式会社、パナソニック株式会社
副賞提供社数：45 社

第 49 回 2024JPS 展
写真展事業委員会
担当理事：川村容一　委員長：加藤恵美子　副委員長：本間伸彦　委員：飯田耕治、小林みのる、斎藤大地、奈良岡忠、松井 章

関西展実行委員会
委員長：永野一晃　副委員長：大西としや　委員：上吉川祐一、辻村耕司、西村仁見、二村 海、守本智樹

東京展会場　（撮影・桃井一至）

関西展会場　（撮影・CAN（喜屋武圭介））

第 50 回 2025 JPS 展案内

写真展事業委員会

JPS 展は 1976 年に始まった日本最大級の写真コンテストで、2025 年で 50 回を迎え、記念回として 3 会場で展示を行う予定です。毎回数多くの作品が寄せられます。様々な被写体を個性的に表現した作品をお待ちしております。

下記のホームページにすべての応募規定・注意事項を掲載しています。応募に必要な記入用紙のダウンロードもできますので、熟読のうえ、ご応募ください。https://www.jps.gr.jp/2025jpsten_oubo/

＜第 50 回 2025 JPS 展　応募規定＞

●テーマ

自由　＊注意事項をよくお読みください。

●応募資格

アマチュア、プロフェッショナル、年齢、性別、国籍を問いません。ただし JPS 会員は除きます。

●応募部門

一般部門：年齢を問いません。

18 歳以下部門：2006 年 4 月 1 日以降生まれの方。

●応募プリント

用紙サイズは A4 または六つ切 8 × 10 インチ（203 × 254mm）に限る

カラー、モノクロ共プリントのみ（デジタル・銀塩を問いません）。デジタル加工も可。ただしデジタル加工・合成等の欄に印を入れること。加工・合成した作品も、必ず応募者本人が撮影したものであること。画像生成 AI を使用した作品は受付いたしません。入賞・入選者には素材データ・原板（ネガ等）の提出を求めることがあります。

●出品点数

単写真＝制限はありません。組写真＝5 枚までを 1 組の限度として何組でもかまいません。組写真は、左より順に並ぶように構成して番号をつけてください。ただし、写真同士を貼り付けないこと。また台紙にも貼らないで応募してください。

●受付手数料

一般部門：1 枚につき 2,500 円（組写真の場合も 1 枚 2,500 円）

18 歳以下部門：1 枚につき 800 円（組写真の場合も 1 枚 800 円）

郵便局より下記、郵便振替口座へ 2025 年 1 月 10 日までにお振込みください。お振込みがない場合は審査しません。

作品の中に受付手数料を同封することは、厳禁とします。

応募作品返却希望者は、返却料 2,500 円を加算してお振込みください。（応募作品の返却は 6 月下旬から 7 月上旬を予定しています。海外からの応募の場合は返却できません）

郵便振替 口座番号：00110-5-651936

口座名称（漢字）：日本写真家協会 JPS 展

＊通信欄に応募部門、応募合計枚数、応募者の郵便番号、住所、氏名、氏名フリガナ、電話番号を必ずご記入ください。

＊氏名には必ずフリガナをふってください。

●受付及び締切

2024 年 11 月 10 日（日）～ 2025 年 1 月 10 日（金）まで。

郵送または宅配便に限ります。直接持参されても受付いたしません。最終日消印有効。

●審査員

熊切大輔（審査員長）、コムロミホ、芳賀日向、HASEO、永原耕治（隔月刊『風景写真』編集長）（予定）

●審査結果

3 月中旬頃、応募者全員に文書にて通知。また、ホームページ（https://www.jps.gr.jp）とメールマガジンでも発表します（電話でのお答えはいたしません）。

●展示用作品

入賞・入選作品は、後日指定する期日までに各自で指定サイズに引伸し、再提出していただきます。その際には作品の原板・データが必要になりますので、必ず保存しておいてください。文部科学大臣賞、知事賞（仮称）、金・銀・銅賞作品については大型サイズになる場合があります。

●展示及びパネル製作費

入賞・入選作品は当協会特注パネルにて展示しますので、一般部門は 1 枚につき 10,000 円、18 歳以下部門は 1 枚につき 5,000 円を指定の期日までに納入していただきます。応募者の申し出による入賞・入選の辞退はできません。応募規定違反など何らかの事由により入賞・入選取り消しとなった場合には、違約金として 5,000 円を申し受けます。やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開とし、パネルは後日着払いの宅配便で返送します。製作費の返金はいたしません。ご了承のうえご応募ください。

●図録

第 50 回 2025JPS 展図録の刊行を予定しています。図録の原稿には応募作品を使用します。

●賞

一般部門

文部科学大臣賞　1 名（賞状・盾・賞金 60 万円・副賞）

知事賞（仮称）　1 名（賞状・盾・賞金 30 万円・副賞）

金賞　1 名（賞状・盾・賞金 10 万円・副賞）

銀賞　2 名（賞状・盾・記念品・副賞）

銅賞　3 名（賞状・盾・記念品・副賞）

奨励賞　5 名（賞状・盾・記念品・副賞）

優秀賞　20 名程度（賞状・記念品・副賞）

入選　150 名程度（賞状・記念品）

18 歳以下部門

最優秀賞　1 名（賞状・盾・副賞）

優秀賞　10 名程度（賞状・記念品・副賞）

入選　30 名程度（賞状・記念品）

審査員特別賞　1 校（賞状・盾・記念品・副賞）

※団体でまとめてご応募いただいた学校の中から選出します。

フィルム賞　1 名（賞状・副賞）

※フィルムを使ったすべての受賞作品の中から選出します。

●展示会場・会期

東京都写真美術館　2025 年 5 月 17 日～ 5 月 25 日（予定）

京都市美術館別館　2025 年 7 月 1 日～ 7 月 6 日（予定）

愛知県美術館　2025 年 7 月 15 日～ 7 月 21 日（予定）

※ やむを得ない事情により展覧会が催行できない場合には、ホームページ上での展示及び公開に変更いたします。

●注意事項

1. 原則として未発表作品に限ります。商用利用（販売・ストックフォト）された作品は応募できません。過去にコンテスト等で入賞・入選した作品及びそれらに類似した作品（同じ対象を同じような条件で同じ時期に撮影した作品）は応募できません。また、現在コンテスト等に応募し結果が判明していない作品も応募できません。
2. 被写体の肖像権、著作権には十分にご注意ください。スナップ等で人物を撮影された場合には、コンテスト応募の承諾を得てください。
3. すべての応募作品の著作権は撮影者に帰属します。ただし、入賞・入選作品は巡回展終了までの間に当該作品を他に使用する場合、当協会の許諾を得てください。
4. 入賞・入選作品は、審査結果発表後、優先的に当展の広報宣伝等の目的範囲内で雑誌その他に使用することがあります。
5. 応募作品の返却を希望される方は、受付手数料納入の際、返却料 2,500 円（枚数に関係なく）を加算してお振込みください。※海外からの応募の場合は返却不可となります。返却は 6 月下旬から 7 月上旬を予定しています。
6. 入賞・入選の展示作品は展覧会終了後、着払いの宅配便で返送します。
7. 作品受理以前の事故、破損につきましては、その責任を負いかねます。作品は慎重に取り扱いますが、輸送途中の不可抗力による事故等に対する責任は負いかねますのでご了承ください。
8. 受付手数料、パネル製作費はいかなる場合でも返金いたしません。
9. 応募者は応募規定、注意事項を全て了承したものとみなし、違反した場合には入賞・入選は取り消しとなり違約金として 5,000 円を申し受けます。応募作品到着後における応募、入賞・入選及び展示の辞退はできません。また、過去に規定違反のあった方の受付はお断りすることがあります。
10. 応募者の個人情報の利用は今回の JPS 展と今後の応募のご案内などの範囲とし、管理を慎重にいたします。
11. 18 歳以下部門に応募された方が入賞・入選された場合は、年齢確認の資料を提出していただきます。

●氏名、住所、題名、フリガナ等は、わかりやすく楷書でお書きください。

●組写真の場合、作品目録の題名は、1 組につき 1 行で書いてください。写真の枚数分題名を書く必要はありません。

●作品目録は、必ず本人控用のコピーを保存しておいてください。

●応募票が不足する場合は、コピーし、また作品番号を修正してご使用ください。

● JPS 展の最新情報をお届けするメールマガジンを配信しております。（https://www.jps.gr.jp/jps-ten-magazine/）

●応募後、住所変更等がある場合はお知らせください。

●応募に関するよくある質問　https://www.jps.gr.jp/jpsten_faq/

2024（令和６）年度第 25 回
公益社団法人日本写真家協会定時会員総会報告

日時：2024 年５月 24 日（金）14:00 ～ 15:50
場所：東京都写真美術館 1F ホール
議決権のある正会員総数:1,213 名（５月 23 日現在定足数 607 名）
出席正会員数：723 名（内訳・本人出席 83 名、代理委任２名、議決権行使書 638 名）
その他の出席者：外部理事４名、外部監事２名、税理士１名、名誉会員５名、賛助会員 15 社 19 名
決議事項　第１号議案　2023（令和５）年度事業報告書及び決算報告書承認の件
　　第２号議案　名誉会員推挙承認の件
報告事項　1.「2024（令和６）年度事業計画書」の件
　　2.「2024（令和６）年度予算書」の件
　　3.第 50 回「日本写真家協会賞」の件
　　4.会費滞納による正会員資格の喪失手続きの件
　　5.その他

定刻、進行の小池良幸専務理事から総会開催のための本日の出席正会員は定足数を満たしていると報告があった。議事に先立ち、2023 年度の物故正会員・名誉会員を読み上げられ冥福を祈った。次に 2024 年度の新入会員 29 名、総会出席の会員理事 13 名、外部理事４名（欠席２名）、監事３名、名誉会員５名の方々を紹介した。続いて「『つながる JPS』を新理事体制で行い良い反応が増えた。JPS のブランド力を高めることで会員メリットとなり、賛助会員皆様、関係団体皆様へご恩返しになると思う。改革・挑戦を引き続き行います」と熊切大輔会長の挨拶があった。

その後、定款により議長に熊切会長を選出、開会を宣言し、議事録署名人を池上直哉、宮沢あきら両会員に依頼し、書記を小野吉彦、記録撮影を鹿野貴司両会員にお願いして議案の審議に入った。

第１号議案．山口規子副会長が「2023（令和５）年度事業報告」について「公益事業１、公益事業２、及び収１事業、他１事業、他２事業、管理部門事業」を説明した。次に小池専務理事が「「2023 年度決算報告」について、財務諸表（損益計算書〔正味財産増減計算書〕、損益計算書の事業別区分経理の内訳表、貸借対照表及び財産目録）を基に説明した。続いて、公認会計士の長吉眞一監事から「支出状況、財産状態が正しく示されていて、理事の職務執行においては不正や法令違反はありませんでした」と監査報告がされた。

質疑応答では、和田直樹会員から「㋑会長全国行脚の意図と成果は、㋺東京カメラ部と会長、協会との関わり、㋩日本写真保存センターについての単独決算報告の必要性、㋥二十年近く経過している写真学習プログラムの外部からの評価について」の質問と意見があった。回答として、㋑は熊切会長が成果の報告を行い、事業開始にあたっては業務執行理事会での承認を得ていること、小池専務理事が費用支出は管理費で行っていると説明した。㋺は、熊切会長が「著作権の権利処理の考え方において当協会の考えと異なるものがあるが、敵対するのではなく、話し合いの場を設けていきたい」と発言し、著作権担当の吉川信之理事は、補足的に「東京カメラ部」の業務における著作権や著作者人格権の扱い方の懸念を述べた。㋩は、担当の髙村達副会長が「次年度以降の独立開示」を検討する旨を述べた。㋥は、担当の山口副会長が外部識者による意見や評価が受けられるような仕組みを検討する旨を述べた。質疑応答の後、第１号議案は、賛成絶対多数で原案どうり承認可決された。

第２号議案．名誉会員推挙承認について髙村副会長から「桑原史成、水谷章人の両正会員を名誉会員に推挙する」と説明があった。質疑応答はなく、賛成絶対多数で承認可決された。

以上により、第１号及び第２号の議案の審議は終了し、引き続き報告事項について説明を行った。

はじめに議長から「定款 34 条に基づき、2024 年度の事業計画書、予算書及び資金調達及び設備投資の見込みを記載した書類は、2024 年３月４日の第 59 回理事会で審議、承認され、2024 年３月 31 日に内閣府に提出した」との報告があった。

報告事項１．山口副会長が「2024 年度の事業計画書」に基づき、それぞれの事業の説明を行い、内容的には例年通りの事業を継続して行う計画であるとの報告を行った。

報告事項２．予算案については小池専務理事がはじめに「総会資料 19 頁の 2024 年度収支予算書における『前年度予算額』欄に誤りがあり、入場の際に別紙『修正版』を配布した」ことを出席者に確認した。引き続き「修正版収支予算書」を基に報告を行った。

報告事項３．髙村副会長が「定款」第５条第５号、「細則」第 29 条により、第 50 回「日本写真家協会賞」はライカカメラジャパン株式会社に贈ることを、2024 年４月 15 日の第 60 回理事会で承認した旨の報告を行った。

報告事項４．小池専務理事より、「『定款』及び『細則』により、2023 年度会費納入の督促を行った結果、未納者が７名いる。第 60 回理事会で正会員資格喪失者承認を行い、総会後、本人への通知と JPS ニュースでの告知で資格喪失手続きが完了する」と報告した。

質疑応答では、和田会員から「①協会ホームページのリニューアルに関する費用の予算化と実行スケジュールについて、②国際交流委員会の事業計画にあるセミナーの実施について、③国際交流委員会の「KYOTOGRAPHIE」との連係の進捗状況について、④「周年事業」について、⑤「会員有志関西展」について、の質問があった。①は熊切会長より「ホームページ立ち上げから十年程経過しセキュリティーや、スマホでのスクロール停止などもあり、リニューアル案がスタートした。理事会承認を得て調査研究中である。見積等を取り進展後に事業化予定である」と説明があり、長吉監事からは「このリニューアルに対する資金は、特定資産における『システム構築積立預金』から充当されるとの説明を受けています」との発言があった。②と③に関しては、熊切会長から「内容を工夫し様々な企画を実施する」と回答があり、大津茂巳担当理事からは「表現者たち vol.14 の庄揚帆（セールス・チャン）氏からセミナー開催要望を受け、今期中実施を目指している」と。③は、「今年度は国際交流委員会の仲介により会場での著作権委員会による著作権と肖像権に関するセミナーを実施した。今年度は事業検討までで、来年度以降連携する事業の開催を企画検討して進める」と説明した。伏見行介理事から「KYOTOGRAPHIE との連携は模索中で、事業ではない」と補足回答があった。④は、熊切会長から「80 年の節目を目指し積み立てている。貴重なご意見を参考に進める」、⑤は、熊切会長から「当協会の事業活動ではないので、今後話し合いたい」との発言があった。

以上をもって熊切議長が議事終了の辞を述べ、午後３時 50 分に閉会宣言をした。

（記／書記・小野吉彦、撮影／鹿野貴司）

「日本写真保存センター」調査活動報告（41）

寺師太郎（理事・日本写真保存センター担当）

1．令和５年度事業終了報告と今年度事業計画

(1) 文化庁への事業報告

令和５年度も、無事事業を終了し３月末に文化庁へ報告を行った。成果として報告書を納品し事業説明の後、講評として事業の中長期的視点に立ったロードマップと成果の公表、活用についての方針を定量的に示すよう指示があった。具体的には原板収集の終了時期と目標収集点数、利活用における実績の明示、広く周知を図るための施策についてであった。講評全体から、収集保存の重要性（原板消失防止）は理解するものの、広報周知から利活用につなげ自走に向けた収益力強化の意識が必要との方向が示された。写真保存センター業務においてもその視点での意識改革が必要であると痛感した。

(2) 令和６年度事業計画

令和６年度事業は令和６年４月１日から令和７年３月31日の期間において、予算額1500万円を上限に契約を締結し事業を開始した。前年度写真保存センター講評にて指摘のあった項目について実施すべく計画を策定した。原板収集については、収集数と保存作業のバランスが取れるよう中長期的な計画を現存原板の推定などを行いつつ作成する。特に現在の収集済原板の整理の処理スピードを加味して年間２件程度の収集を計画し、併せて委員によるデジタル化も検討しできる限り早い原板の国立映画アーカイブ相模原分館への収蔵を目指す。

また、原板取得の契約に際しては権利関係の整理を行い、著作者人格権への配慮を加味し、トリミングや氏名表示といった点で写真家の意思が尊重される方向性の契約書への更新を行う。公開・活用については、存命の著名人などパブリシティー権に対する方針が曖昧だったものを明確化し、画像公開の扱いを検討することとした。いずれも、他のアーカイブとは一線を画し、写真家の権利を守る団体であるJPSが運営していることを明確にすることで今後の原板収集に資するものと考える。

(3) 写真原板の利活用と広報活動

本年度は、写真保存センターの活動を広く周知するべくこれまでに２回の講演等を行った。「知っておきたい写真著作権＆肖像権セミナー・名古屋」（2024年７月６日・電気文化会館）においては、画像をデジタル化する際の手順について写真保存センターで採用されているカメラによるデジタル化の事例を紹介。写真保存センターでは１億画素のカメラを使い35㎜のスリーブを４分割（４コマ）撮影することで１コマあたり2,500万画素となることから、4K対応のアーカイブとして採用している。フィルムのアーカイブにあたっては、アンチニュートンガラスでネガを挟んでフィルムをデジタル化していること、デジタル化によって増えていくとデータについては、12TBのハードディスクを４台搭載したラック型のNASで管理し、24時間およそ20度に室温を保つようしNASの寿命に配慮していることなどを伝え、好評の内に終了した。名古屋の会場では約七十名の参加者に拝聴いただき、講演の内容は写真館向け業界紙「スタジオNOW」にも記事掲載された。

写真保存センターでのデジタル化事例を紹介する高村代表。7月６日、名古屋。（撮影：加藤智充）

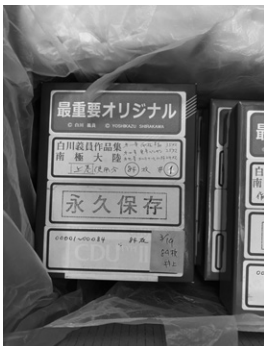
70名参加の名古屋会場（撮影：加藤智充）

また美術館、博物館、図書館、大学などの専門家が集まる「アート・ドキュメンテーション学会年次大会」（2024年６月15日・東京都写真美術館）にて保存センターの活動意義とその実際をシンポジウム形式で発表した。基調講演として髙村達代表の髙村家に伝わる髙村光雲、高村光太郎、高村智恵子、髙村豊周作品の写真アーカイブにおける写真原板のデジタル化、原板自体の退色の問題、デジタルデータを活用した展示用レプリカ製作、著作権保護期間満了後の作品の写真作品化による新たな権利獲得についてなどが語られた。また、寺師担当理事からは保存センターが原板を保存収

「アート・ドキュメンテーション学会年次大会」で写真保存センターの紹介をする寺師理事。6月15日、東京。（撮影：三島大暉）

集する意味と意義について、原板収集から保存までの流れや、デジタル化の手法、安全な保存環境、広報宣伝や教育目的利用などの利活用、写真原板の持つ唯一性の価値と画像の違いなどについて、約百二十名の参加者に講演を行った。

高村代表も加わったディスカッション、左から、東京文化財研究所：田良島哲氏、東京工芸大学名誉教授：吉田成氏、JPS：寺師、東京大学史料編纂所：桑田恵里氏、井上聡氏
（撮影：三島大暉）



保存センター神田事務所での一時保管状況

資料としてお預かりした今回収蔵原板掲載写真集

2. 白川義員作品収集について

昨年、収集を予定している白川氏の代理人より「ご息女の帰国中に話を進めたい」との意向を受け調整を進めていた写真集14冊のポジを白川事務所から保存センターへ移送した。現在は24時間空調の屋内で保存をし、整理を進めていく順番を待っている。今回主要写真集である『アルプス』『ヒマラヤ』『アメリカ大陸』『新約聖書の世界』『旧約聖書の世界』『キリストの生涯』『聖書の世界』（新潮社版）『中国大陸』『神々の原風景』『仏教伝来』『南極大陸』『世界百名山』『世界百名瀑』『永遠の日本』に使用された原板約1万点を受領した。原板の現状は白川氏の手によって出版写真集別に分類がなされており、掲載原稿に振られたナンバーと枚数が記入されたフィルム箱に収納されてる。

保存センター神田事務所での一時保管状況

段ボールは白川事務所のまま

今後は受領原板の状態と枚数の確認を行い、保存条件に適合するかを確認の上寄贈契約を結ぶべく白川氏代理人弁護士と調整を進めている。

3. 令和６年度のセミナー開催について

保存センターでは、本年度も主催セミナーを計画し、下半期に２回開催予定。10月に「後世に伝えるフィルムデジタイズとフィルム保存」（仮）セミナーの開催を計画している。ニュース、メール等でご案内をするので、皆様のご参加をおまちしている。

4. 今後の活動について

日本写真保存センターでは今後も、広報活動を積極的に行うことで周知をはかり、データベースだけでなく、収益の伴う利用も促進していきたい。特に日本写真著作権協会の設置する教育利用写真アーカイブに日本写真保存センターの画像を提供することで、利活用の促進、活動周知に繋げていきたい。会員の皆様におかれましては、保存センターの周知に加えて、教育利用写真アーカイブの周知、またご参加に引き続きのご支援をお願いしたい。

（写真保存センター内画像　撮影：寺師太郎）

教育利用写真アーカイブログイン画面（https://boshu.jpca.gr.jp/login）

セミナー研究会レポート

◆2023年度第3回技術研究会報告◆

どうやる、どう使う、初めての画像生成AI

2024年3月26日(火) 14：00～16：00
JCIIビル6階会議室及びオンライン　参加数：108名

講師：山田哲也会員

2023年度の最後となる技術研究会は、講師に山田哲也会員を迎え開催した。参加者は会員90名（会場22名、オンライン62名、賛助会員6名）、非会員18名を合わせて100名を超え、テーマである「画像生成AI」への関心の高さを物語るものとなった。

内容はタイトルの通り、画像生成AIの未経験者、初心者に向け、その仕組みや概要、そしてやり方、使い方などを豊富な実例やサンプルを交えて紹介するものとした。

休憩を挟んだ後半の冒頭では、休憩時間にダウロードした生成AIエンジンを使って、参加者のスマホで実際の操作と仕上がりを体験してもらった。アンケート（回収率70％）では、8割を超える方々が、生成AIによる作品制作の経験は無いとのことで、様々な生成画像の例や実演や体験は「分かりやすかった」と、とても好評で、前述のアンケートでも［大変良かった］、［良かった］の合計が9割を超えるなど、参加者の満足度の高い研究会を開催することができたようである。

「日進月歩」といっても過言ではない生成AIの状況からは目を離せないといってよいだろう。今後もそのキャッチアップを心がけ、必要があれば、更に進んだ技術研究会の開催を考えていきたい。（記／島田 聡、撮影／野田知明）

◆日本写真家協会／KYOTOGRAPHIE共催事業報告◆

人を撮ること、人が写ること 著作権と肖像権を考える

2024年4月27日(土) 14：00～15：50
八竹庵（旧川崎家住宅）2階大広間　参加数：62名

講師：吉川信之会員

開催されて12年、京都の春のイベントにすっかり定着したKYOTOGRAPHIE（京都国際写真祭）と共催にて著作権セミナーを開催した。

KYOTOGRAPHIEのインフォメーションセンターの八竹庵（旧川崎家住宅）2階大広間にて、座敷に座って素晴らしい中庭を見ながら清風の吹くなかでの開催になった。事前告知の遅さとWEB頼りの集客に心配もあったが、当日小雨の天気だったにも関わらず、定員を上回る62人の参加者であった。

開会の冒頭、KYOTOGRAPHIE共同代表の仲西祐介氏と髙村達副会長が挨拶し、講師の紹介を行った。セミナーでは、吉川信之会員（著作権委員会 担当理事）が作例写真を出しながら、撮影する際の肖像権の注意点を色々話し、またそのなかで肖像権と著作権の関係を分かりやすく話した。その後、生成AIについての現状と権利関係のことも説明した。

最後に、質疑応答の時間では、皆さんが実際に体験された肖像権問題の相談、また人物を撮影した後で、生成AIを使った作品での肖像権の問題など、なかなか難しい話が多く出てきた。生成AIの生み出す画像での著作権と肖像権の問題はこれから多くの課題が生み出されるであろう。

（記・撮影／平 寿夫）

◆2024JPS展関連イベント報告◆

「JPS会員写真家といっしょ フィルムカメラ散歩撮影会 ＆暗室体験ワークショップ」

2024年4月20日(土) 11:00～16:00
株式会社ケンコー・トキナー本社 4階セミナールーム
2024年4月27日(土) 14:00～17:00
JCII貸し暗室　参加数：12名

4月20日と27日に「フィルムカメラ散歩撮影会＆暗室体験ワークショップ」イベントを開催した。これは昨年度に開催した「フィルム愛を分かち合おう」イベントのアンケートで撮影会と暗室体験の要望が多く寄せられたのでそれに応えるべく企画したものだ。

12名の参加者は1日目、㈱ケンコー・トキナー本社4階セミナールームで講義の後、中野の街を富士フイルムイメージングシステムズ㈱提供の「ネオパン100 ACROS II」を使ってグループで散歩撮影。フィルムカメラを持っていない参加者はリコーイメージング㈱よりペンタックスのカメラを無償で借りることができた。爽やかな春の撮影日和に恵まれ、参加者はどんなふうに写っているのかすぐに分からないフィルム撮影ならではのドキドキ感を楽しんでいた。

翌週2日目はJCII貸し暗室にて㈱写真弘社が現像、ベタ焼きをした撮影フィルムのなかから、参加者がカットを選び自分の手でプリントをする日。ほとんどが暗室初体験の人たちに対して委員8人、㈱写真弘社とジェットグラフ㈱の技術者たちのおかげ

でほぼマンツーマンで指導をすることができ、参加者は理想通りのプリントをすることができた。参加者それぞれのベストプリントは、5月18日から開催のJPS展東京展受付前室にて活動レポートと共にファイルに入れて閲覧展示する。

（記／小林みのる、撮影／斎藤大地）

◆2024JPS展関連イベント報告◆

～ Meets the Film Photography Lovers ～ プリントしてフィルム愛を分かちあおう

2024年5月25日（土）14:00～16:00
東京都写真美術館1Fスタジオ　参加数：15名

講師：荒谷良一（会員）、渋井誠（㈱写真弘社）、今井美沙、関谷幸汰（㈱ロモジャパン）

2024JPS展関連イベント「プリントしてフィルム愛を分かちあおう」を東京都写真美術館1Fスタジオにて開催した。「フィルム愛イベント」は昨年に続き2回目になる。フィルムで写真を楽しむ若者が増え、往年のフィルムカメラの中古市場価格も上がる一方で、従来のコアなファンにプラスしてフィルム写真自体が写真趣味の入り口になっているという人が多くいる。この入り口に立ってくれた人を「JPSとしてサポート、扇動し、さらなる沼の深みに招き入れたい」というのが「フィルム愛イベント」の開催動機である。前回のテーマが広すぎてつかみどころがあいまいだった、という反省から今回は“ネガは眠らせずにプリントをしよう”というテーマに絞った。

荒谷会員には昨年、全作品をモノクロバライタ手焼きプリントで展示した写真展「木造校舎の子供たち」のエピソードを中心にフィルムの存在感、写真愛の伝わり方など熱い語りが感動を呼んだ。㈱ロモジャパン今井氏、関谷氏からはネガフィルムをスマホのカメラ機能を使い手軽にデータ化ができる「DigitaLIZA Max」ソリューションの紹介を実際のパソコン操作も含めてプレゼンテーションしてもらった。渋井氏からはプロラボならではの手焼きプリント、ラムダプリントや紙質の違い、スムーズなプリント発注の仕方などを豊富なサンプルとともに学ぶことができた。参加者はそれぞれの講師の方々の語った内容がどれも興味深い内容として聞き入っていた。

最後の自由の時間では同じ被写体をフィルム、デジカメ、iPhoneで同時に撮ったプリントを比較検証したり、荒谷会員にご持参いただいた膨大な数のバライタ手焼きプリントやベタ焼きプリントを参加者に手に取って鑑賞してもらったり、マウントしたポジフィルムをスライド映写機で壁面に投影したり、ロモグラフィーの新しい110カメラや復刻レンズを手にしたり、大いに盛り上がった。

（記／小林みのる、撮影／川村容一）

◆2024年度第1回技術研究会報告◆

ひと味違う、こだわりの作品プリント ～フレスコジグレーとプラチナパラジウムプリントで、美しい作品を長期保存～

2024年6月21日（金）14：00～16：00
JCIIビル6階会議室　参加数：44名

講師：髙村 達会員

2024年度第1回となる技術研究会は、講師に髙村達会員を迎え開催した。またテーマであるフレスコジクレーとプラチナパラジウムプリントのサービスを提供している株式会社堀内カラー、株式会社トクヤマ、株式会社FLトクヤマ、三菱王子紙販売株式会社から各1名にも登壇いただき、プリント技術やサービスの紹介を行った。参加者は合計44名、うち非会員が8名だった。

内容はタイトルの通り、フレスコジクレーとプラチナパラジウムプリントという長期保存に適した2つのプリントについて、前半では講師がどのような理由でそれぞれのプリント方法を選択するに至ったのか、それぞれのプリントがどのようなものであるか、それぞれの特色は何かについて講演した。現像・露光風景は動画を交えながらプロセスの解説を行い、参加者はその音や仕組みに驚いている様子だった。

また後半は作例を見せながら作品作りのポイントなどについて解説した。とくに石膏や木彫、風景や花など幅広い作品で解説されたことで、参加者は自分のテーマがそのプリントに合うのかどうかを考えながら聴講できていたようだった。

会場では講師の作品を30点程度展示し、講演内で実際にプリントに触れる時間を設けた。参加者は表現を間近で確認したり、紙の質感の違いなどを感じ取っていた。講師による一方的な講演ではなく、参加者が作品を見て回りながら、講師と近い距離で話を聞いて質問できたことで、プリント表現というテーマで理解を促すことができたようだ。

（記／篠田岬輝、撮影／齊藤小弥太、井上六郎）

◆国際交流委員会ウェブサイト企画◆

「表現者たち」

JPSホームページの記事から抜粋して紹介する。

Vol.15
ムダな事は何もない　梁 丞佑（ヤン スンウー）

私がなぜ写真と出会い写真家を志そうと思ったか。
いつも話している話は、『韓国でダラダラ過ごす日々に終止符を打とうと思ったからだ。』というものだ。ちょうどその頃父が亡くなりぼんやりとこのままではダメだと遅まきながら気づいたのだ。私はいつも体験をしないと気づけない。

だから本当は何になっても良かったのだ。そこでなんとなく写真を選んだ。（中略）

一人待っているところに仙人ような見た目の老人が近づいてきて、タバコを分けてくれと言う。タバコをあげると今度は火をつけてくれと言う。タバコを吸う人はライターくらい持っているだろうと思いながらも、火をつけてあげた。すると、「タバコ代の代わりにあなたの将来を見ましょうか？」と言ってきた。インチキくさいなと思いながらも暇だったので話に付き合った。そして仙人は私の顔を繁々と見つめて「将来あなたは教授か写真家になりますよ。あなたは生かされていますから命を大切にしなさい。」と言われたのだ。

そんな職業とは程遠く「やはりインチキか。何を言ってるんだ。」と思いながら聞きながしていた。しかし、確かに私は子供の頃から人の命を助けたり目の前で人が亡くなったりする事が普通の人に比べて多く、生かされていると言うのにはなんとなく同意したからか、ふと友達に話してみた。すると案の定、大爆笑され馬鹿にされた。それからと言うものその話は封印して妻ぐらいにしか言った事はない。一応写真家を名乗っている今となっては、更に嘘くささがまし益々話せないネタになっていたのだが話してみた。

今となってはその仙人にもう一度会いたい。多分そういう事も頭の片隅にあったから写真を選んだのかもしれないと今になって思う。こんな、まさに『当たるも八卦当たらぬも八卦』という感じで入った写真の世界で、思った以上にハマり苦労することになるとは当時の自分からは想像もできないことだった。

【プロフィール】

梁 丞佑（ヤン スンウー）

1996年来日、2000年日本写真芸術専門学校卒業、2004年東京工芸大学 芸術学部 写真学科卒業。
2006年同大 大学院 芸術学研究科メディアアート写真領域博士前期課程修了。2016年出版の『新宿迷子』で第36回 土門拳賞受賞。ドキュメンタリー写真、スナップ写真をメインに作品を制作し定期的に発表。最新写真集『荷物』が2023年11月にZen Foto Galleryより発刊。

Vol.16
"My Private Universe"
ChristianLichtenberg
" 私の中の宇宙 "

クリスチャン リヒテンベルグ（訳：八木ジン）

私の名前はリヒテンベルク、リヒテンは光 ベルクは山という意味であり、ドイツ語では収集するという意味でもある。「光を収集する」 私にとって写真家とは何か、それは名前からも"光を収集する者"なのである。私は1974年に東京で写真家のアシスタントとして働き始めました。その後、建築写真家を経て広告会社のアートディレクターとしてスイスで働き、しばらく仕事をしながらアートティストとしてハイブリッドな生活を送っていたが、芸術家の道を探求することを決め、写真だけでなく、他のメディウムも開放した。現在では、ミクストメディア、ビデオ、音声、言葉、インスタレーションを使用している。

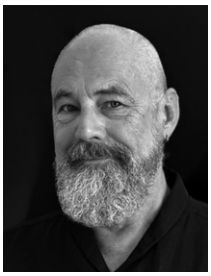
Into The Great, Wide Open 大いなる、広い空間へ

（20枚の大判写真シリーズ）風景との対話

私のマインドではすべてを構造化し、分析し、整理するのが好きだ。私の魂は呼吸し、広がり、飛ぶための空間を必要とする。いくつかの広大な風景に対して、人間は非常に小さく、重要でもなく、脆弱になる。それは私たちを正しい位置に置くことでもある。私たちは時間と空間の中で自分が何であるかに気づくだろう。私たちの内なる宇宙は外の宇宙に溶け込む。物理的な現象の間の無限の空虚は、極性を超えた思考空間を創造する。平和と自由の感覚が侵略してくるのである。恐れるものは何もなく、ただの変容する。最終的にその思考は自然に帰る。そこには信じるべきものも理解するべきものも、持てるものも何もなく、ただの神秘がある。あなたはあなたになる。それ以上でもそれ以下でもない。すべてがそのまま。瞬間は永遠に変わり、圧倒的な多様性はバランスが取れ、もはや脅威ではない。すべてが軽くなり重荷が肩から落ちる。どうして見えなかったのか？それは常にそこにある。すべきことは、覚えて外に出て、しばらく静かにすること。電話も、写真を撮ることも、活動もない。ただただ存在すること。

上からナミビア、グリーンランド、ウェールズ ©Christian Lichtenberg

【プロフィール】



Christian Lichtenberg

クリスチャン リヒテンベルグ（1953～）は、サンパウロ（ブラジル）のビエンナーレグランプリなど、いくつかの国際的および国内的な賞を受賞しており、美術館での展示や、作品が所蔵されています。彼はアートコンサルタントとしても活動しており、各種の建築プロジェクトにアーティストとして関わっていました。また、重森三玲などの多数の出版物や書籍に取り上げられており、彼の幅広い活動が紹介されています。

協会に寄贈された会員の出版物を到着順に掲載いたします。
(2024年2月～7月)
①発行所
②発行年月
③サイズ
(タテ×ヨコ)、頁数
④定価
⑤寄贈者
⑥電子書籍ストア
本紹介／出版広報委員・池口英司

大地とともに

タカオカ邦彦

① JCIIフォトサロン
② 2024年4月 ③ 24 × 25㎝、31頁 ④ 1,200円 ⑤発行所

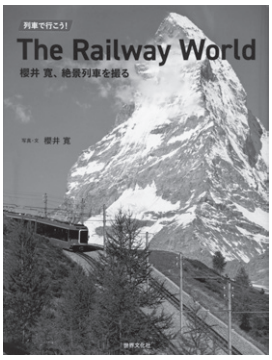
2024年4月に開催された写真展の図録。農業、漁業など、自然と深く関わる仕事に携わる人々を収める。モノクロによる穏やかな描写が、その真摯な生き方をあぶり出しているかのようだ。これも写真というメディアの力なのだろう。

3.11震災を見つめ続けて

亀田昭雄

①新日本出版社 ② 2024年2月
③ 16.7 × 18.2㎝、132頁
④ 2,800円 ⑤亀田氏

発生から13年の間撮り続けられた写真による東日本大震災の写真集。被災現場の写真だけでなく、穏やかな日常を取り戻すべくひたむきに働き続ける人々の姿が印象的だ。「さらなる痛苦は後世に遺せない」という編者の言葉も重い。



列車で行こう！ The Railway World 櫻井 寛、絶景列車を撮る

櫻井　寛

①世界文化社 ② 2024年3月
③ 24 × 18.2㎝、208頁
④ 2,600円 ⑤発行所

世界を舞台にした鉄道写真集。豪華列車、有名列車ばかりでなく、無名のローカル線にも足を向け、絶景ポイントを探し出す著者の情熱に頭が下がる。各写真に解説が加えられ、それぞれの路線のプロフィールを知ることができる。

幸福の種蒔き桜

大沼英樹

①プレスアート ② 2024年2月
③ 26.2 × 21㎝、144頁
④ 3,200円 ⑤発行所

「種蒔き桜」はその名の通り、農作業を始めるべき時を知らせる。桜の木も、人々の暮らしと切っても切れない仲にあるのだ。本書は東北地方に咲く様々な桜と、そこに集う人の姿を収録。満開の桜の下に、生きることの喜びがある。

DVD18枚組

あの頃の京都の空は広かった・・(23分)
息づく建築 (43分)
旧摩耶観光ホテル（廃墟）(27分)
American West GHOST TOWN (37分)
茶室 (1時間25分)
村野藤吾×仕事痕跡 (1時間13分)
大爆発　日本の祭り (52分)
大震災・町の変貌全記録 (1時間)
33-34 裸婦 (22分)
居場所 其の一 (3時間)
居場所 其の二 (3時間)
人間曼荼羅 (35分)
立ち飲み屋徘徊 (26分)
四季の記憶 (47分)
Four Seasons of Water (23分)
国宝建築の姿形 vol.01 (1時間16分)
国宝建築の姿形 vol.02 (1時間12分)
国宝建築の姿形 vol.03 (1時間14分)

①喜多　章 ② 2024年 ③ 19 × 13.5㎝ ④－円 ⑤喜多氏

18枚のDVDを媒体としてリリースされた写真集。被写体は「茶室」、「廃墟」などバラエティーに富み、スライドショーの形で鑑賞できる。いたずらに彩度を上げることを避けたのだろう各写真に、著者の知性がにじんでいる。

雨の日に

佐藤秀明

①デザイン＆ギャラリー装丁夜話
② 2023年11月 ③ 15 × 21.2㎝、96頁 ④－円 ⑤佐藤氏

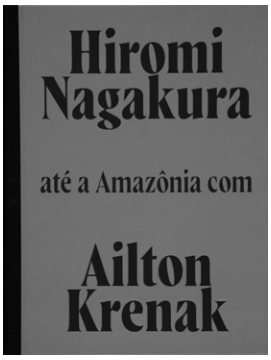
雨の日の写真集。家から出ることさえおっくうになる日でも、雨のなかには魅力的な情景が広がっている。カラフルなこうもり傘。ぬれた枯れ葉。霧にかすむ桜、そして虹。見慣れたはずの風景を、別の世界へと導くコンダクター。それが雨。

白鳥の歌を聴きたくて

金城真喜子

①金城真喜子 ②2024年3月
③15.5 × 21.5㎝、30頁
④1,700円 ⑤金城氏

旬を過ぎ、色を失いかけている花の姿を、透過光も巧みに使用して細部まで描き出した写真を集める。あでやかさを失った花にも、盛りの時とは異なる美しさがたたえられていることが理解できる。高い撮影技術に裏打ちされた1冊。



até a Amazônia com Ailton Krenak

長倉洋海

①INSTITUTO TOMIE OHTAKE
②2023年10月 ③28.7 × 22.5㎝、240頁 ④R$171 ⑤長倉氏

アマゾンの風景と、そこに生きる人々の姿を記録する。深い自然のなかに生きる人たちの姿はつつましやかで、しかし力強い。この地でもまた、人々の営みは大自然と共にあるのだ。人が生きることの意味を改めて考えさせられる。

1970年代～2000年代の鉄道 地方私鉄の記録 第2巻【北関東編】

写真・諸河　久、解説・藤本哲男

①フォト・パブリッシング
②2024年4月 ③25.7 × 18.2㎝、112頁 ④1,800円 ⑤発行所

関東鉄道、上信電鉄など、北関東のローカル私鉄12路線の風景を集める。非電化の路線も少なくはなく、個性的な車両が集う姿は魅力的だ。淘汰と代謝が急速に進む現代にあっても、地方私鉄には、昔と変わらない風景が残っている。

TOKYO EAST WAVES

大西みつぐ

①ふげん社 ②2024年3月
③20 × 28㎝、144頁
④6,000円 ⑤発行所

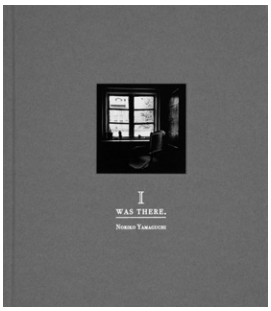
80年代から90年代初頭にかけて、東京の東側の街で撮影されたスナップで構成。画一化が進む東京で、この地域にはまだ「一風変わった風景」が数多く残されているように見受けられる。そんな小さな発見の連続が楽しい。

桜ー刹那と永遠ー

喜多規子

①日本写真企画 ②2024年3月
③25.3 × 26.3㎝、108頁
④3,000円 ⑤喜多氏

全国各地に桜を追う。オーソドックスな風景写真だけでなく、水面を流れる花びらなど、シンボリックなカットも収録され、芸術性の高い1冊に仕立てられている。桜の撮り方も、無限にあるに違いない。



I WAS THERE.

山口規子

①MONO GRAPHY
②2023年11月 ③23 × 20㎝、84頁 ④3,600円 ⑤山口氏

2002年に行われた、ひと月のヨーロッパ旅行の記録。有名観光地を巡るわけではなく、著者のことを誰も知らない場所で出会った風景を、モノクロ写真でつづる。主人公は人。誰もがカメラに向けて優しい眼差しを送っている。

盲腸線データブック

池口英司

①天夢人 ②2023年11月
③21 × 14.8㎝、160頁
④1,800円 ⑤池口氏

全国に存在する「盲腸線」、すなわち片方の終点が他の鉄道と接続せず、行き止まりになっている形の鉄道路線を一同に集め、その概要を解説したガイドブック。無味乾燥に見えがちなデータとじっくり対峙すれば、そこに発見がある。

この惑星の声を聴く

高砂淳二

①クレヴィス ②2024年4月
③21.7 × 24㎝、144頁
④3,000円 ⑤発行所

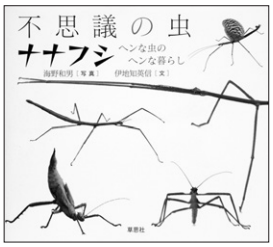
地球の姿を記録する。浸食された岩が林立する海岸線、月に照らされる湿原。無邪気に遊ぶ子ゾウ、サケを探す母熊……。そんな何もかもを乗せて、私たちが住む地球が回っている。迫力に満ちた写真がずらりと並ぶ1冊の叙事詩。

いのちのかたち

江成常夫

①論創社 ② 2024 年 3 月
③ 29.6 × 23.8cm、232 頁
④ 4,800 円 ⑤江成氏

イチゴ、リンゴ、アゲハチョウ、カタツムリなど、著者が「庭先の日常」と呼ぶ小さな生き物にレンズを向ける。撮影法、光線には十分に注意が払われ、ただ 1 枚の写真が、高い芸術性を備えている。これこそが著者の生き様なのだろう。



不思議な虫ナナフシ ヘンな虫のヘンな暮らし

写真・海野和男、文・伊地知英信

①草思社 ② 2024 年 5 月
③ 19.8 × 22cm、120 頁
④ 2,900 円 ⑤海野氏

世界で最も重く、最も長い虫といわれているナナフシにレンズを向け、生態を紹介する。ナナフシだけが備えるメカニズムも丁寧に解説され、ページを繰るうちに、この不思議な虫が、だんだん愛らしく感じられるようになる。

離島建築 島の文化を伝える建物と暮らし

箭内博行

①トゥーヴァージンズ
② 2024 年 4 月 ③ 21 × 15cm、192 頁 ④ 2,000 円 ⑤発行所

離島に建つ建物は、主に厳しい気候条件に適合させるために独特の建築様式を備えるようになる。それに気づいた著者が、全国の離島を訪ね、建物の姿を記録した。それはどれも質素ながら力強い。住まう人の心が宿っているのだろう。

靖國の櫻

山岸　伸

①日本写真企画 ② 2024 年 2 月
③ 25.7 × 18.2cm、96 頁
④ 2,500 円 ⑤山岸氏

テーマは靖國神社の桜。あらゆる撮影法、作画法が駆使されたのだろうフォトジェニックな作品が並んでいる。身近な場所にもこれだけの被写体があることを示した好例。それだけに、撮影には存分な労力が費やされたことだろう。

螻蛄の唄

三浦　誠

①三恵社 ② 2024 年 5 月
③ 18.2 × 25.6cm、102 頁
④ 3,300 円 ⑤三浦氏

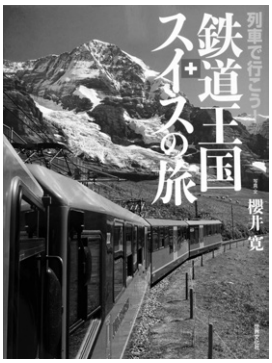
部屋の片隅に残る古い扇風機など、日常生活のなかで出会った被写体を集める。著者はこれを「私小説私写真作品」と形容するが、本書に収録された写真は私小説に似て、様々な解釈が可能な、深い味わいが感じられる。

三浦綾子 祈りの世界

三浦綾子、写真・おちあいまちこ

①日本キリスト教団出版局
② 2024 年 4 月 ③ 19 × 14.8cm、80 頁 ④ 1,400 円 ⑤おちあい氏

敬虔なキリスト教徒であった三浦綾子の精神世界を、祈りの言葉と写真によって再構築するスピリチュアルな書籍。載せられた言葉も写真も美しく、人が生きることの意義に、改めて思いを募らせることができる。



列車で行こう！ 鉄道王国スイスの旅

櫻井　寛

①世界文化社 ② 2024 年 6 月
③ 24 × 18.2cm、208 頁
④ 2,700 円 ⑤発行所

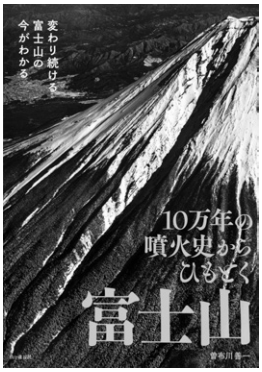
幾つもの登山鉄道、山岳鉄道が建設され、濃密な鉄道ネットワークが構築されているスイスをテーマにした写真集。登場する鉄道ごとに簡単な路線図と解説文が添えられ、ガイドブックとしても楽しむことができる。

地球を訪ねる

富山愛子

①求龍堂 ② 2024 年 7 月
③ 20 × 22cm、144 頁
④ 2,800 円 ⑤富山氏

世界中の魅惑のスポットを紹介する。ナイアガラ瀑布、タージ・マハールなど著名な場所も多いが、その存在は知っていても、現地を訪れるのは簡単ではないスポットも多いはず。それらの場所を訪ねる労力は大きかったはずだ。



10 万年の噴火史から ひもとく富士山

曽布川善一

①山と溪谷社 ② 2024 年 7 月
③ 25.7 × 18㎝、128 頁
④ 2,300 円 ⑤発行所

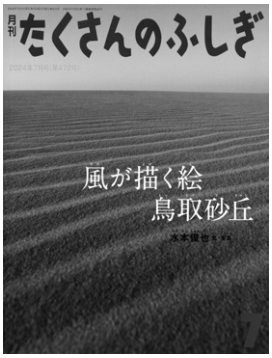
山頂火口、白糸の滝、崩落谷と大滝、樹海など、富士山の誕生と深く関わる様々な場所を紹介、その成因、現況を解説する。知っているようで知らないことが多い富士山について、改めて知識が得られる一級の写真集であり、博物誌だ。

ROYAL WING

森下泰樹

①ロイヤルウイング
② 2023 年 5 月 ③ 19 × 26.3㎝、40 頁 ④ − 円 ⑤森下氏

横浜港の港内クルーズ船、レストランシップとして 2023 年まで活躍していた「ロイヤルウィング」の写真集。総トン数 2,928 トンのこの船は、単なる港内クルーズ船に留まらない威容と風格を備えていた。本書でその在りし日を偲びたい。



月刊「たくさんのふしぎ」通巻 472 号「風が描く絵 鳥取砂丘」

水本俊也

①福音館書店 ② 2024 年 7 月
③ 25 × 19㎝、40 頁 ④ 736 円
⑤水本氏

本書のテーマは鳥取砂丘の風紋。詳細に観察すれば、その姿にも気象条件に応じて様々なものがあることを教えてくれる。本書では併せて砂丘に生きる生き物も紹介。この巨大な砂の山が、生命の集合体であることを理解できる。

にっぽんの里山

今森光彦

①東京都写真美術館
② 2024 年 6 月 ③ 22.5 × 25㎝、204 頁 ④ − 円 ⑤中村竜太郎氏

日本の里山の風景を四季それぞれに紹介する。高山でも、深い谷でもない「ありふれた」風景に、見飽きることのない美しさが宿っていることが解る。本書に登場する水田や畑は、どれも荒れ果ててはいない。そこに人の心が宿っている。

オランウータン 森のさとりびと

前川貴行

①新日本出版社 ② 2024 年 6 月
③ 29.2 × 21.7㎝、36 頁
④ 1,800 円 ⑤前川氏

「森のさとりびと」、「森の賢人」と形容されるオランウータンの写真集。独立独歩の行動様式、時に寂しげに見える表情が、そんな形容を生み出したのだろう。撮影の苦労は相当なものだったはずだが、この生き物がより愛しくなる。

こどもを撮るマニュアル本

今井しのぶ

①日本写真企画 ② 2024 年 6 月
③ 24.7 × 18.3㎝、164 頁
④ 1,818 円 ⑤今井氏

子どもの撮影は、実はとても難しい。大人の言うことを聞いてくれないし。そんなこどもを撮るためのマニュアルがこれ。といってもしつけの本ではなく、撮影の技術論。内容は実に盛りだくさんなので、これから子どもを撮りたい人は必携。

- 生誕 100 年 - 渡部雄吉がとらえた北海道

渡部雄吉

① JCII フォトサロン
② 2024 年 7 月 ③ 24 × 25㎝、31 頁 ④ 1,500 円 ⑤発行所

2024 年 7 月から 8 月にかけて開催された写真展の図録。50 年代から 60 年代にかけて撮影されたルポルタージュ写真が並ぶ。開拓民の夢は大きかったが、苦労が絶えなかった北海道。人々の真面目な表情に、当時の北海道の姿が見える。

ともに生きる 山のツキノワグマ

前川貴行

①あかね書房 ② 2024 年 7 月
③ 25.3 × 18.8㎝、32 頁
④ 1,500 円 ⑤前川氏

熊による被害が報告され続ける昨今だが、「子熊にだけ近づかなければ大丈夫」と語る人もいる。本書はツキノワグマや森に生きる動物の姿を収め、「ともに生きる大切ななかま」と訴える。その生態を知り、共生の道を探り出したい。

寄　贈　図　書

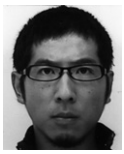
一色龍太郎様……石鎚山に抱かれて
金指栄一様……在所の譜
鮑利輝様……PHOTO 秘境
ふげん社様……浦部裕紀・空き地は海に背を向けている
……市川信也・2014〔ni-ou-ichi-yon〕、大塚 勉・TRANS-BODY
りぼん舎様……松田洋子・episode
JCII フォトサロン様……石山貴美子・マネキン
……広川泰士・sonomama sonomama
……青木 勝・NOSTALGIC WINGS 1970-1995
……井桜直美・ステレオ写真に浮かび上がる幕末・明治の日本 Part3
Weed&Miller&Du Pin&Riemer&Champion&Gulick
キヤノンマーケティングジャパン様……第 1 回 GRAPHGATE
東京写真記者協会様……第 64 回 2023 年報道写真展記念写真集
東京都写真美術館様
……記憶：リメンブランス－現代写真・映像の表現から
……TOP コレクション 時間旅行 千二百箇月の過去と
かんずる方角から
日本写真会様……日本写真会創立 100 周年記念写真集
風景写真出版様……橋本義光・鯖街道 … 若狭から京へ …
東京国立近代美術館様……中平卓馬 火－氾濫
日本リアリズム写真集団……2024 年「視点」第 49 回展作品集
日本写真協会様……「東京写真月間 2024」図録
日本大学芸術学部写真学科様……LOCUS2024
武蔵野美術大学 美術館・図書館様
……監修・大日方欣一・生誕 100 年 大辻清司 眼差しのその先
フォトアーカイブの新たな視座

受賞おめでとうございます。今後ますますの活躍をご期待申し上げます。

■「2024 年日本写真協会賞　功労賞」受賞　2024年6月3日

受賞者：川田喜久治（1959 年入会）

最初の写真集『地図 The Map』（1965 年）から、Instagram に日々アップロードし続けている膨大な写真群に至るまで、川田喜久治氏は、現実の中に折り畳まれた意味の複数性を、時代を超え、メディアを変え、加工し、掘り出し、みつけだそうとする。写真を通じた、その行為に終わりはないことを指し示す。時代に応じた現実との関わりを探り、物象と抽象が交差する写真の新たな領土を開拓する「地図」を描き続けた功績に対して。



■「2024 年日本写真協会賞　作家賞」受賞　2024年6月3日

受賞者：公文健太郎（2014 年入会）

2012 年ネパールを題材にした『ゴマの洋品店』で日本写真協会賞新人賞を受賞以降の活躍が目覚ましい。主な写真集は『耕す人』『地が紡ぐ』『暦川』『光の地形』。2022 年には香川県の離島「手島」の過疎を題材に『NEMURUSHIMA-THE SLEEPING ISLAND（眠る島）』を上梓。この間の写真展は 18 回に及び、エネルギッシュな作品発表活動への評価も高い。その顕著な活躍と今後への期待も込めて。

■「紺綬褒章」受章　2024年4月27日

受章者：松本徳彦（1962 年入会）

公益のため多額の私財を寄附したため。

第 18 回 JPS フォトフォーラム
「記録、伝える、その先に見えるものーある大地の物語」

日　時：2024 年 11 月 9 日（土）
　　午前の部　10：30　　午後の部 14：00　（2 回入れ替え制）
場　所：東京都写真美術館 IF ホール
講　師・パネルディスカッション：中条 望、小山幸佑、齊藤小弥太
　　パネルディスカッション司会進行：清水哲朗
申し込み方法：9 月 20 日（金）受付開始
JPS ホームページの申込フォームからお申し込みください。
https://www.jps.gr.jp/2024photo_forum/

追悼　謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

今井　光潔　正会員

2024 年 1 月 23 日、肺炎のため逝去。89 歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（1965 年入会）

麻賀　　進　正会員

2024 年 4 月 19 日、急性心筋梗塞のため逝去。77 歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（1986 年入会）

工藤　弘之　正会員

2024 年 6 月 15 日、脳腫瘍のため逝去。68 歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（2022 年入会）

富山　愛子　正会員

2024 年 6 月 24 日、すい臓がんのため逝去。74 歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（1995 年入会）

岩崎　日照　正会員

2024 年 7 月 16 日、くも膜下出血のため逝去。75 歳。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（2000 年入会）

経過報告（2023年8月～2024年4月）

◎ **8 月 28 日　2023 年第 18 回名取洋之助写真賞作品選考会**
PM1:30 ～ 3:30　JCII ビル会議室　10 名　◯選考・山田健太、清水哲朗、熊切大輔、応募者・13 名 14 点　名取洋之助写真賞・中条望「GENEVA CAMP-取り残されたビハール人 -」、奨励賞・齊藤小弥太「土地の記憶」、小山幸佑「私たちが正しい場所に、花は咲かない」

◎ **10 月 2 日　賛助会員との懇談会**　PM5:00 ～ 7:30　JCII ビル会議室
賛助会員 24 社 35 名、JPS28 名

◎ **10 月 11 日　日本写真保存センター 2023 年度第 2 回諮問委員会議**
PM2:00 ～ 3:30　JCII ビル会議室　21 名（リモート参加含）

◎ **10 月 11 日　日本写真保存センター 2023 年度第 2 回支援組織会議**
PM4:00 ～ 5:00　JCII ビル会議室　支援組織会員 8 社・1 団体 10 名、JPS9 名（リモート参加含）

◎ **10 月 22 日　おやこ写真教室**　PM1:00 ～ 5:00　LUMIX BASE TOKYO
参加数 6 組 12 名

◎ **10 月 28 日　写真展事業委員会イベント**　PM2:00 ～ 4:00　㈱ケンコー・トキナー本社 7 階セミナールーム　参加数 16 名
◯ポートフォリオレビュー～ JPS 会員写真家が丁寧にアドバイス～

◎ **10 月 30 日　関西地区委員会オンラインセミナー**　PM6:00 ～ 8:00
オンライン　参加数 56 名　◯写真家のための「電子帳簿保存法」セミナー

◎ **11 月 3 日　第 17 回 JPS フォトフォーラム**　AM10:30 ～ 16:30
東京都写真美術館 1 階ホール　参加数合計 288 名　◯「旅を撮る」講演者・小澤太一、竹沢うるま、パネリスト・小澤太一、竹沢うるま、山口勝廣　司会進行・飯田裕子

◎ **11 月 16 日　関西地区「JPS 入会希望者説明会」**　PM1:30 ～ 2:30
大阪市立総合学習センター梅田 6 階第 2 研修室　参加数 14 名

◎ **11 月 16 日　第 1 回「会長全国行脚」関西地区**　PM3:00 ～ 4:45
大阪市立総合学習センター梅田 6 階第 2 研修室　参加数 41 名

◎ **12 月 12 日～　国際交流委員会企画「表現者たち」vol.14**
JPS ホームページ　◯「Only after we run, can we know the joy of wind.」 Sails Chong　庄 揚帆

◎ **12 月 13 日　第 49 回日本写真家協会賞贈呈式**　PM4:30 ～ 4:45
アルカディア市ヶ谷　◯受賞者・株式会社ワン・パブリッシング『CAPA』

◎ **12 月 13 日　第 18 回名取洋之助写真賞授賞式**　PM4:45 ～ 5:05
アルカディア市ヶ谷　◯受賞者・中条望、齊藤小弥太・小山幸佑（奨励賞）

◎ **12 月 13 日　第 6 回笹本恒子写真賞授賞式**　PM5:05 ～ 5:20
アルカディア市ヶ谷　◯受賞者・高橋宣之

◎ **12 月 13 日　2023 年度会員相互祝賀会**　PM6:00 ～ 7:40
アルカディア市ヶ谷　参加数 334 名

◎ **12 月 21 日～ 27 日　第 6 回「笹本恒子写真賞」受賞記念展**
アイデムフォトギャラリー「シリウス」　入場数 363 名
◯高橋宣之写真展「神々の水系」

◎ **1 月 19 日　2024 年 JPS 会員関西新年親睦会**　PM6:00 ～ 8:00
センパキッチン グリーンハウス梅田　参加数 57 名

◎ **1 月 24 日　写真保存センター委員会セミナー**　PM2:00 ～ 4:00
JCII ビル会議室 / オンライン　参加数 59 名、オンライン参加数 29 名
◯「一歩進んだ画像保存術、プロが勧める NAS 活用法」～写真保存センター NAS 導入事例から～

◎ **1 月 26 日～ 2 月 1 日　2023 年第 18 回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展（東京展）**　富士フイルムフォトサロン東京　入場数 5,577 名

◎ **1 月 31 日　第 2 回「会長全国行脚」中部地区**　PM5:00 ～ 6:30
Share8P『ランダム』チサンマンション第 3 名古屋 3 階 302 号室　参加数 27 名

◎ **2 月 20 日　新入会員入会資格審査会**　PM1:45 ～ 4:45
JCII ビル会議室　8 名

◎ **2 月 24 日　CP+2024 イベント**　AM10:50 ～ 11:30　パシフィコ横浜
◯「学生 vs プロ写真家のフォトバトル」

◎ **3 月 1 日～ 7 日　2023 年第 18 回「名取洋之助写真賞」受賞作品写真展（大阪展）**　富士フイルムフォトサロン大阪　入場数 3,646 名

◎ **3 月 4 日　第 59 回公益社団法人日本写真家協会理事会**　PM2:00 ～ 3:40
JCII ビル会議室　16 名、欠席理事 3 名、監事 3 名（リモート参加含）
◯第 1 号議案：2024（令和 6）年度事業計画案の件　第 2 号議案：2024（令和 6）年度収支予算案の件　第 3 号議案：資金調達及び設備投資の見込みの件　第 4 号議案：特定積立金の積立及び取崩しの件　第 5 号議案：「公益社団法人日本写真家協会細則」一部変更の件　第 6 号議案：2024（令和 6）年度新入会員承認の件、他

◎ **3 月 5 日　雲南省撮影家協会の表敬訪問**　AM1:00 ～ 11:40　JPS 会議室　5 名

◎ **3 月 18 日～　国際交流委員会企画「表現者たち」vol.15**
JPS ホームページ　◯「ムダな事は何もない」梁 丞佑 ヤン スンウー

◎ **3 月 26 日　第 3 回技術研究会**　PM2:00 ～ 4:00
JCII ビル会議室 / オンライン　参加数 46 名、オンライン参加数 62 名
◯どうやる、どう使う、初めての画像生成 AI

◎ **4 月 1 日　2024（令和 6）年度新入会員説明会**　PM2:00 ～ 6:00
JCII ビル会議室　新入会員 29 名、役員・委員 27 名、賛助会員 17 社 34 名

◎ **4 月 4 日　第 3 回「会長全国行脚」中国地区**　PM4:00 ～ 6:00
コジマホールディングス西区民文化センター 大会議室 C　参加数 14 名

◎ **4 月 15 日　第 60 回公益社団法人日本写真家協会理事会**　PM2:05 ～ 3:15
JCII ビル会議室　18 名、欠席理事 1 名、監事 3 名（リモート参加含）
◯第 1 号議案：2023（令和 5）年度事業報告書案承認の件　第 2 号議案：2023（令和 5）年度決算報告書案承認の件　第 3 号議案：「公益社団法人日本写真家協会 細則」一部変更の件　第 4 号議案：「公益社団法人日本写真家協会 入会規程」一部変更の件　第 5 号議案：名誉会員推挙の件　第 6 号議案：第 50 回「日本写真家協会賞」承認の件　第 7 号議案：2023（令和 5）年度会費滞納による正会員資格の喪失の件　第 8 号議案：2024（令和 6）年度第 25 回定時会員総会内容決定の件、他

◎ **4 月 20 日、27 日　2024JPS 展関連イベント**　AM11:00 ～ 16:00/ PM2:00 ～ 5:00　㈱ケンコー・トキナー本社 4 階セミナールーム / JCII 貸し暗室　参加数 12 名　◯ JPS 会員写真家といっしょ フィルムカメラ散歩撮影会＆暗室体験ワークショップ

◎ **4 月 26 日　日本写真保存センター 2024 年度第 1 回諮問委員会議**
PM2:00 ～ 3:30　JCII ビル会議室　23 名（リモート参加含）

◎ **4 月 26 日　日本写真保存センター 2024 年度第 1 回支援組織会議**
PM4:00 ～ 4:50　JCII ビル会議室　支援組織会員 8 社・1 団体 11 名、JPS10 名（リモート参加含）

◎ **4 月 27 日　日本写真家協会 /KYOTOGRAPHIE 共催事業**　PM2:00 ～ 3:50
八竹庵（旧川崎家住宅）2 階大広間　参加数 62 名　◯人を撮ること、人が写ること　著作権と肖像権を考える

写真解説（表紙、表４）

アリアと息子エブラヒム、別れの夜（2022 Osmaniye-Turkey）（表紙写真）―――― 小松由佳

アリアとエブラヒムの故郷は、シリア中部のパルミラだ。羊の放牧をして暮らしていたが、2011年以降、シリアは内戦状態に突入した。親子はトルコに逃れて難民となり、羊を飼って暮らしている。戦火の中で成長したエブラヒムは、10歳から家計を支えて働いてきた。2022年、13歳になったエブラヒムは、不法移民としてイギリスを目指すための過酷な旅に出発する。親子の別れの夜、故郷の思い出にちなむものを身につけてもらい、撮影した。
写真展「あなたは　ここにいた～燃やされた故郷、パルミラ～」

そっと静かに（表４写真）―――― 清家道子

カメラを持っていなければごくありふれた風景でも、ファインダーを通すとそれはまるで違う世界になってしまう。どこを切り取るかで夢を見せてくれる。それはまるで美しい嘘のようです。だから私は写真の世界に夢中のままなのかも知れません。「水の惑星」というタイトルは壮大なイメージですが、実は、とりわけ私の周りの小さな世界なのです。
写真展「水の惑星」

第 50 回 2025JPS 展 イベント（予定）

■「暗室体験イベント」～プリントしてみんなでフィルム愛を分かちあおう～

日　時：10 月 20 日（日）　10：00 ～ 16：30（9：50 受付開始）
会　場：JCII ビル 貸し暗室・6 階会議室　参加費：10,000 円（材料費、税込）　定員：13 名
※暗室で自分のモノクロネガから引き伸ばしを体験します。
午後から引き伸ばしたプリントを鑑賞して講師や他の参加者と写真について語り合いましょう。

■ 2025JPS 展第 50 回記念「秋の大作品講評会」

日　時：10 月 26 日（土）　13：20 ～ 16：30（13：00 受付開始）
会　場：JCII ビル 6 階会議室　参加費：3,000 円（税込）　定員：40 名
講　師：飯田耕治・大西みつぐ・川村容一・菊池哲男・斎藤大地・高橋智史・土屋勝義・奈良岡忠・松井 章・山口規子
※皆さまの作品を 10 名の JPS 会員写真家がプロとしての豊富な経験を基にアドバイスします。
写真力がアップすること間違いなし。

詳細はホームページをご確認ください。https://www.jps.gr.jp/jpsten/

編集後記

◎目はフォトグラファーの命です。白内障の手術をしました。「99.9% は成功するので心配ありません」との事でしたが見事？失敗！といっても、目が見えなくなった訳ではありません。計算間違えだった眼内レンズを再手術で取り替えました。現在経過観察中です。（伏見）

◎新体制スタートから早１年、ようやく組織運営の流れが自らのルーティーンとなってきた。出版広報担当理事の業務は経験上問題ないが、新たに兼任となった専務理事の職務に戸惑いと責任の重さを痛感している。財政状況の把握から事業計画、理事会・総会運営、等協会運営の要となる立場だけに、常に緊張感を持って万事に対応したいが、最後まで気持ちを持続できるかが心配だ。（小池）

◎「メッセージボード」コーナーでは、皆様からの投稿を募集していますが、現状は編集側から寄稿をお願いしている状況です。それでも本号は事務局への写真集献本も多く順調に依頼することが出来ました。写真展の開催も多く、すっかりコロナ禍以前の状況に戻りました。近年の異常気象も戻ってくれないでしょうか。（小野）

◎今年の夏は、30 年ぶりくらいで「青春 18 きっぷ」を買いました。JR の普通列車であれば、１日 2400 円でどこまでも行ける切符です。2 枚使って名古屋から松本、飯田を周り帰宅。一日中電車の中にいるので、撮った写真は１日 10 枚くらいですが、体力を確認できたので良しとしましょう。（池口）

◎写真学校のイベントに参加するため、８月中旬に８年ぶりにマレーシアのクアラルンプールを訪れた。「東京よりも涼しい！」「街を走る車が綺麗！」「高層ビルが乱立している！」。８年の間の街の変貌ぶりに、経済的な勢いを感じた。それにしても赤道に近いクアラルンプールの方が東京より気候的に過ごしやすいのはなぜ？（飯塚）

◎今年は「カメラ」と呼びたいくらいのスマートフォンやオリンピックイヤーに合わせた、フラグシップモデルの登場（ついに税込み価格 100 万円を超えました！）。そして、フィルムカメラも出てきて大賑わい。Technical ページでは、フィルムカメラの記事を担当いたしました。ぜひご覧ください。（桃井）

◎写真家の趣味というものに興味がある。趣味も写真ですというのはおもしろくない。その人の写真が、まったく別のものとどのように繋がっているのかを探るのが楽しい。そんな私の最近の趣味は、古いトミカの収集と、昭和時代の電話ボックスにベタベタと貼られていた風俗チラシの収集。一体、写真にどんな影響が？（山縣）

◎先日、JPS の理事、委員長向けに外部から講師を招いて「ハラスメント勉強会」が開かれました。ハラスメントの定義から始まり、写真家向けに特化した事例や予防と対策など中身の濃い講義でした。結局のところ、自分の行為が「ハラスメント」であるかどうかを認識することが予防につながると、改めて気付かされた次第です。（事務局 杉山）

日本写真家協会会報 第182号（年2回発行）　**2024 年 9 月 10 日　印刷・発行　©編集・発行人　熊 切 大 輔**
URL https://www.jps.gr.jp/　Email info@jps.gr.jp　本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます
出版広報委員　伏見行介（常務理事）、小池良幸（担当理事）、小野吉彦（委員長）、池口英司（副委員長）、飯塚明夫、桃井一至、山縣　勉
発行所　公益社団法人日本写真家協会（JPS）
〒102-0082 東京都千代田区一番町25番地 JCII ビル303　電話 03（3265）7451（代表）　FAX　03（3265）7460
印刷所　株式会社光邦
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3 丁目11番18号　飯田橋 MK ビル　電話 03（3265）0611（代表）

TAMRON
Focus on the Future

50-300mm F/4.5-6.3 Di III VC VXD (Model A069)
ソニー Eマウント用

“あと少し”に応える
広角端50mm。

NEW

50-300mm F4.5-6.3

for Sony full-frame mirrorless
(Model A069) ソニー Eマウント用　Di III: ミラーレス一眼カメラ専用レンズ

www.tamron.co.jp

製品の詳細情報はこちらから▶

PENTAX

一眼レフの未来を創る。

日本で初めて一眼レフをつくったペンタックス。

その哲学、技術、情熱のすべてを注ぎ込んで、この一台は誕生しました。

APS-Cフラッグシップモデル、PENTAX K-3 Mark Ⅲ。

写真を撮ろう。

K-3 III

株式会社リコー ／ リコーイメージング株式会社
お客様相談センター：0570-001313（ナビダイヤル） www.ricoh-imaging.co.jp

RICOH
imagine. change.

Canon

make it possible with canon

5

写真に限界はない。

動画には可能性しか見えない。

映像表現に、双璧の力を。

道なき未知を切り拓く、

EOS R5 Mark II。

「私」が知らない「私」の新境地へ導く。

前人未踏の私へ。

NEW

EOS R5 Mark II

110 million EOS 160 million RF/EF

EOSは2023年3月に累計生産台数1億1,000万台※1、交換レンズRF/EFレンズシリーズ※2は2023年5月に累計生産本数1億6,000万本を達成しました。

※1 銀塩（フィルム）とデジタルの双方を合わせた累計生産台数。映像制作用のシネマカメラを含む。※2 EFレンズ、EF-Sレンズ、RFレンズ、RF-Sレンズ、EF-Mレンズ、EFシネマレンズ、エクステンダーを含む。2023年6月29日時点。

Home Page

◎キヤノン EOS R5 Mark II ホームページ

canon.jp/eos-r5mk2

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

ヨドバシカメラ
GOLD POINT CARD
www.yodobashi.com
ポイントカードは、ヨドバシカメラが初めに考案したシステムです。

新規会員募集中 日本写真家協会会員様専用の

ゴールドポイントカード

12%ポイント還元

※現金・デビットでのお支払時。一部対象外商品ございます。

専門知識豊富な販売員が親切丁寧にご案内いたします！

ヨドバシカメラ
www.yodobashi.com

新宿西口本店 〒160-0023 新宿区西新宿1-11-1 ☎ 03(3346)1010	**マルチメディア新宿東口** 〒160-0022 新宿区新宿3-26-7 ☎ 03(3356)1010	**マルチメディア Akiba** 〒101-0028 千代田区神田花岡町1-1 ☎ 03(5209)1010	**マルチメディア錦糸町** 〒130-8580(駅ビルテルミナ1・2・3階) 墨田区江東橋3-14-5 ☎ 03(3632)1010	**マルチメディア上野** 〒110-0005 台東区上野4-10-10 ☎ 03(3837)1010
マルチメディア町田 〒194-0013 町田市原町田1-1-11 ☎ 042(721)1010	**八王子店** 〒192-0082 八王子市東町7-4 ☎ 042(643)1010	**マルチメディア吉祥寺** 〒180-0004 武蔵野市吉祥寺本町1-19-1 ☎ 0422(29)1010	**マルチメディアさいたま新都心駅前店** 〒330-0843 さいたま市大宮区吉敷町4-263-6 ☎ 048(645)1010	**マルチメディア川崎ルフロン** 〒210-0024 川崎市川崎区日進町1-11 ☎ 044(223)1010
アウトレット京急川崎 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町21-12 ☎ 044(221)1010	**マルチメディア横浜** 〒220-0004 横浜市西区北幸1-2-7 ☎ 045(313)1010	**マルチメディア京急上大岡** 〒233-0002(京急百貨店1・8・9階) 横浜市港南区上大岡西1-6-1 ☎ 045(845)1010	**千葉店** 〒260-0015 千葉市中央区富士見2-3-1 ☎ 043(224)1010	**マルチメディア新潟駅前店** 〒950-0901 新潟市中央区弁天1-2-6 ☎ 025(249)1010
マルチメディア宇都宮 〒321-0964(トナリエ6・7・8階) 栃木県宇都宮市駅前通り1-4-6 ☎ 028(616)1010	**マルチメディア甲府** 〒400-0031 山梨県甲府市丸の内1-3-3 ☎ 055(230)1010	**マルチメディア郡山** 〒963-8002 福島県郡山市駅前1-16-7 ☎ 024(931)1010	**マルチメディア仙台** 〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡1-3-1 ☎ 022(295)1010	**マルチメディア札幌** 〒060-0806 北海道札幌市北区北六条西5-1-22 ☎ 011(707)1010
マルチメディア名古屋松坂屋店 〒460-8430(松坂屋名古屋店南館4・5階) 愛知県名古屋市中区栄3-16-1 ☎ 052(265)1010	**マルチメディア梅田** 〒530-0011 大阪府大阪市北区大深町1-1 ☎ 06(4802)1010	**マルチメディア京都** 〒600-8216 京都府京都市下京区東塩小路町590-2 ☎ 075(351)1010	**マルチメディア博多** 〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街6-12 ☎ 092(471)1010	ヨドバシカメラの インターネットショッピング www.yodobashi.com

YOU ARE A COPYRIGHT OWNER

デジタルの時代だからこそ
改変してほしくない写真もあります

デジタルの時代だからこそ、改変してほしくない写真もあります。
勝手にトリミングされたり、勝手に合成されたりしないように、著作権が守ってくれます。
これを「同一性保持権」と言います。
著作者の創作意欲を守るための権利、著作者人格権のひとつです。
写真著作権を大切に。

【会員団体】
公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

JPCA
一般社団法人 https://jpca.gr.jp
日本写真著作権協会
Japan Photographic Copyright Association
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

おめでとうございます

当協会では、写真技術に関する発見、発明および写真文化の発展等について、著しい貢献もしくは寄与、功績のあった個人または団体に対して「日本写真家協会賞」を贈り顕彰しています。第 50 回「日本写真家協会賞」は、ライカカメラジャパン株式会社に贈ります。表彰理由は、「ライカA型を 1925 年に発売以来、ライカカメラは世界の写真文化発展に寄与し続けている。ライカが生まれなければ、写真の歴史は違ったものとなったであろうとも言われている。伝統あるフィルムカメラを作り続けながら、最新のデジタルカメラ開発にも挑戦して、フィルム、デジタル、インスタントカメラを発売する唯一無二のカメラメーカーとなっている。ライカカメラジャパンは多くの直営店による独自のカメラ販売方式を行い、ギャラリーも多数展開して国内外の写真家を紹介している。カメラと写真の両方で我が国の写真文化発展に貢献していることに対して。」

そこで同社の製品に対する考え方、これからの展望について、同社代表取締役社長の福家一哲さんにお話を伺いました。

―― このたびは受賞おめでとうございます。まずは受賞の率直なご感想をお聞かせ下さい。

福家：ありがとうございます。受賞は私たちにとって良い意味での驚きであり、このような権威のある賞を頂戴し、嬉しく思っております。私どもは近年、単にカメラを販売するだけではなく、写真の魅力を広く伝えていくことに力を注いでいます。その意味でも、今回、写真家協会賞を頂けたということは、大変嬉しく思います。

―― 御社は、近年になって、直営店の展開を始めました。まず銀座にオープンし、数を増やされてゆく中で、京都にも直営店ができました。ライカ京都店は、祇園にあってロケーションも素晴らしいです。それとは対照的に、東京の表参道の店舗はとてもモダンです。直営店の展開にはどのような狙いがあるのでしょうか。

福家：私どもが最初の直営店となるライカ銀座店をオープンしたのは 2006 年のことで、これは世界で初めてのものです。その際の目的は主に2つあり、1つはライカのブランドイメージ、あるいは世界観をしっかりとお伝えするということ。それから、写真の魅力を伝えられるギャラリーを作ろうということでした。私どもは機材を販売しているわけですが、長い歴史を持つライカというカメラが、それでは他と何が違うのか。専門のスペースを持てば、それを様々な形でお客様に伝えることができるのです。

第50 回「日本写真家協会賞」
受賞者：ライカカメラジャパン株式会社

福家 一哲さん
ライカカメラジャパン（株）代表取締役社長

―― 直営店の店作りに何かこだわりはありますか。

福家：ライカ京都店は関西の基幹という位置づけですが、京都という町は、多くの人が写真を撮りに来る町だと思います。そこに写真の拠点があるといいな、と感じたことが出店のきっかけでした。ライカ表参道店は渋谷から青山にかけてのエリアに、それまで拠点がなかったということを受けたものです。また、先に出店していた銀座よりも若い人が集まる街と捉えています。ある日、街を歩いていたところ、最適な建物が貸し出されているのを見つけ、すぐに連絡をとりました。

―― ライカカメラ社はパナソニックと提携をされていますが、どのようなメリットを感じていらっしゃいますか。

福家：協業による広がりという部分が大切かなと思います。それは製品の開発の面でもそうですし、ユーザーの広がりという意味もあります。お互いの強みを活かし合おうということです。

―― ライカカメラ社が手掛けたスマートフォンに「ライツフォン」があります。これにはどのような考え方をお持ちでしょうか。

福家：スマートフォンで写真を撮る時代になって、何もしないわけにはいきません。私どもの哲学として「写真を撮る人に寄り添う」というものがあります。多くの人がスマートフォンで写真を撮る時代にライカにもそれががあるということです。マーケティング面から捉えても、スマートフォンは、ライカを知って頂く入口としての魅力があります。

―― 将来的な計画があれば教えて下さい。

福家：写真を撮られる方、写真が好きな方に、もっと満足して頂く。そして、私たちはこれをソーシャリゼーションと呼んでいますけれど、ライカを中心にしたコミュニティを作っていきたいと考えています。

―― 本日はどうもありがとうございました。

（2024 年７月４日　有楽町・ライカカメラジャパン（株）本社にて、聞き手／出版広報委員・伏見行介、山縣 勉
撮影／出版広報委員・桃井一至
構成／出版広報委員・池口英司）

Message Board

◆大西みつぐ（2004 年入会）

80 年代といえば「バブルの時代」。東京周辺では新たな「まちづくり」がはじまり、規格通りの「市民祭り」や「公園」があちこちに誕生するなど、妙に気だるい空気感とともに平和で幸せ感満載の日常が続いていた。

新しい写真集『TOKYO EAST WAVES』は、第 22 回平凡社太陽賞受賞作の「河口の町」(1985)、第 18 回木村伊兵衛写真賞受賞作として「遠い夏」と並ぶ作品「周縁の町から」(1993)、そして現在も続編を撮り続けている「NEWCOAST」(1995) の 3 部構成。当時、これらのカラーシリーズは、70 年代から日本にも大きな写真表現のうねりとして伝わったアメリカの「NEWCOLOR」という新たな表現に影響されたものだった。

（東京都江戸川区在住）

◆森下泰樹（2007 年入会）

『濱の女王、ロイヤルウイングのファイナルクルーズ』に向けた、写真展及び写真集制作を担当させていただいた。広告撮影をきっかけにライフワークとしても本船はもとより、乗組員、料理人、スタッフの方々の本船を愛し仕事を楽しむ姿を撮影することができた。写真展では本船で働く人を主に、写真集は横浜港を優雅に航行する姿、そして文化工業遺産としての本船機関各部の貴重な記録として残すことができた。所有者様が書籍コードを取得し国立国会図書館に収蔵されたことは本船関係者にとっても、写真家としても言葉に表せない喜びである。

隣国での解体を控え引き渡し地である、国内最後の寄港地壱岐まで見送りに行った。63 年という客船では世界でも類を見ない長寿、穏やかに最後を待つ雄姿は今でも忘れられない。

◆亀田昭雄（2004 年入会）

太平洋沿岸地域を襲い、命と暮らしを奪った東日本大震災。三陸沿岸の岩手県と宮城県の被災地の実情を 2012 年から毎年撮影してきた。福島県は放射能汚染により 2014 年から撮影。追い求めた風景は無惨な姿が多かったが、年毎に変化する復興の形と人々の前向きに生きる姿に感銘を受けた。

震災から 13 年の今年、12 年間撮り溜めた写真集『3.11 震災を見つめ続けて』を出版し、写真展を地元埼玉と岩手県陸前高田市、さいたま市北区で開催。地元埼玉ではテレビ放映され、また特集番組も組まれた。今後も復興する姿を見つめ続けていきたい。

（埼玉県上尾市在住）

◆櫻井 寛（1992 年入会）

今年は日本とスイスの国交樹立から 160 年という節目の年です。それを記念して、東京・新宿の「OM システムギャラリー」にて 10 月 10 日～ 21 日まで写真展を開催し、同時に世界文化社より写真集を出版しました。

タイトルはどちらも「列車で行こう！鉄道王国スイスの旅」です。

スイスはまさに鉄道王国で国土面積に対する鉄道密度は世界一です。特筆すべきは過去 42 年間、鉄道路線の廃止はゼロ km。ローカル線が次々に廃止されている日本は、スイスの鉄道を大いに見習うべきではないでしょうか。

海外の鉄道取材が多い私ですが、スイス取材はこれまでに 42 回の多くを数えます。写真集も写真展もベスト作品で臨みますので、どうぞ、ご期待ください。写真展には毎日在廊予定です。

（東京都稲城市在住）

◆前川貴行（2007 年入会）

今年 6 月に写真絵本『オランウータン 森のさとりびと』新日本出版社刊を上梓しました。2012 年からインドネシアのボルネオ島に何度も通って取材を重ねました。

続く 7 月にも、写真絵本『ともに生きる 山のツキノワグマ』あかね書房刊を上梓しました。ツキノワグマはフリーランスになった直後からコツコツと撮影をしてきましたが、出会いが難しく写真が溜まるまでずいぶん長い時が必要でした。どちらの本も人間との軋轢や課題を抱えながらも、共生していくためにはどうしたら良いかをテーマとして制作しました。被写体の魅力もさることながら、我々が抱える問題を共有して行きたいとの思いです。ぜひ手にとってご覧いただけましたら幸いです。

（東京都八王子市在住）

◆高砂淳二（2015 年入会）

海中、森、生き物、風景など、地球の姿を撮り始めて 39 年目に入りました。果てしなく大きく、人間が何をしてもビクともしないと思っていた地球は、実は有限で、まるで繊細なバランスを保って生きるひとつの生命体のような存在なのだと思うようになりました。

自然の中に入り静かに耳を澄ますと、木々や虫や海や大地が、地球を代弁するかのようにささやきかけてくるような感じがします。そんな地球の声ひとつひとつをカメラで拾い集めているうちに、僕らも木々や虫やほかの生き物同様、この惑星（ほし）を構成する大事なピースなのだと思うようになりました。

どんなピースで生きたらいいか、本書『この惑星（ほし）の声を聴く』で問いかけられたら幸いです。

（東京都渋谷区在住）

◆金城真喜子（2007 年入会）

コロナ自粛が続いていた 2021 年に、完全版下で入稿すると低価格で写真集を作ってくれる印刷会社があることを知り、撮影までのセッティング『花写真　Haw to set up』を作りました。その後、自分の本も作ってほしいという方がいて 2 冊目を経験しました。

昨年、撮りためていた写真をアイデムフォトギヤラリー　シリウスのオーデイションに出したところ通りました。枯れかけた花や葉をテーマにしていたので評価が得にくいと考えていた

ので写真展ができるのは嬉しく、版下づくりの改善点を考慮して『白鳥の歌を聴きたくて』を作りました。だいぶ慣れてはいたのですが、ハードルが2つありました。背表紙と電子印鑑です。背表紙は幅が1cm足らずなので気を使います。電子印鑑は実際の印鑑ではなくネット上なので安全かなという心配がありました。納品された本は背表紙のタイトルも真ん中に収まり、色調もオリジナルに近くトラブルもありません。小さな本ではあるけれど、出版社に行くこともなく、データを送ってしまえば1冊単位で出来上がってくるというのは楽しいです。

（東京都世田谷区在住）

◆諸河 久（1982年入会）

2024年7月、昨年末から手掛けてきた『1970年代～80年代の鉄道　地方私鉄の記録【南関東編／北関東編】』（既刊）に引き続き、『1970年代～2000年代の鉄道　第3巻　地方私鉄の記録【甲信越編】』を上梓した。

甲信越は東京在住の私にとって通い易い地域だったから、10代の学生時代から各地を渉猟して鉄道写真を楽しんでいた。地方私鉄の沿線は豊かな風情に恵まれ、都会では体験できないフォトジェニックなシーンを捉えることができた。今回掲載の松本市内を走った路面電車を撮影した35mmモノクロネガフィルムは、大敵であるビネガーシンドロームにも罹患せず、極めて良好な状態だった。デジタルデータ化してモニターに浮かび上がる画像には、六十余年前の世相が克明に記録されていた。

モータリゼーションの普及により、若き日に巡った路線の殆んどは廃止に追いやられた。本書の上梓にあたって、かつての撮影地の数か所を再訪したが、路線跡と思われる一条の細道から、過ぎ去った佳き日々を追憶するのは辛いものがあった。

（東京都中央区在住）

◆今井しのぶ（2020年入会）

『こどもを撮るマニュアル本』
（日本写真企画）

ベビー・キッズフォト専門家の撮影術。今、ママカメラで一番人気の講座内容を大公開した本が完成！専業主婦からプロフォトグラファーになって13年。フォトレッスン生徒のべ五千人、プロ養成講座の卒業生三百名以上の今井しのぶが執筆。

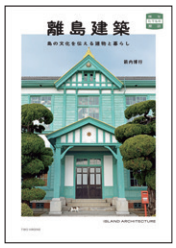
「こどもに素敵な写真を残したい」「みんなに喜ばれる1枚を撮りたい」「前の自分よりも上手く撮りたい」を応援する本。マニュアル撮影、ロケーションフォト、ストロボ、フォトブース、声掛け、七五三、レタッチなど、簡単で楽しく撮れる内容。百名を超えるキッズが登場！

可愛くて、素敵で、明日にも撮りたくなる写真が溢れていて、ギフトにも喜ばれる1冊です。

（神奈川県川崎市在住）

◆箭内博行（2016年入会）

かれこれ25年以上、日本の島々を撮り続けている。日本には人の住む有人島がおよそ400島あり、個性豊かな自然、暮らし、島人たちの人情に惹かれながら、今まで350の島々を旅してきた。過去3冊の著作は島々の自然や民俗をテーマとしたが、今回の新作『離島建築』（トゥーヴァージンズ刊・2024年）は、100島150以上の「島の建物」に焦点をあて、写真と文で島旅へ誘う紀行だ。なぜ、こんな立派な建物が僻地の離島に残されているのか？それは、かつて船が主要交通だった頃は、人とモノが行き交う海路の離島こそが、時代の先端をいく文化の集積地だったから。今もひっそりと残る波止、住居、遊郭跡などの建築群が、往時の島々の繁栄や島人たちの生きざまをそっと教えてくれる。



（埼玉県さいたま市在住）

◆海野和男（1978年入会）

『不思議の虫ナナフシ　ヘンな虫のヘンな暮らし』　（草思社）

枝に擬態することで有名なナナフシは機会があるたびに撮影してきた。ぼくのライフワークが擬態だからだ。見つけるのが大変だし、珍しいものも多く、今回の本の写真は古いものは四十年も前に撮影したもので、それ以後、一度も出会えていないものもある。今では海外にはナナフシを専門に撮っている人もいるけれど、四十年も前はナナフシを撮っている人はほとんどいないので、大英博物館のBrock博士の目にとまり、研究に寄与したということで、ぼくの名前を学名にしたナナフシもいる。トビナナフシの中には、驚くと、翅を広げて別の生き物のように変身するものもいる。ナナフシは標本にすると皆、色が変わってしまうので生態写真は重要だ。今回は日本にいるナナフシ、撮り溜めた世界のナナフシを集めて本にしてみた。

写真：翅を広げて威嚇するセンストビナナフシ　（東京都千代田区在住）

◆おちあいまちこ（2015年入会）

本書『三浦綾子　祈りの世界』は、故三浦綾子氏の生誕100年を記念して2022年に出版された『三浦綾子　祈りのことば』に続くものです。

前作は、1991年刊行の故児島昭雄氏（JPS会員）の写真と三浦綾子氏の祈りのことばのコラボ本『祈りの風景』が基となっています。30年の時を経て、その中の31編の祈りに私の写真を添える機会をいただいたのです。

この本の仕事を終えた頃、父の書斎で『祈りの風景』を見つけ、しかも児島氏のサインがあって本当に驚きました。今年に入り、前作に収めきれなかった三浦氏の祈りと短文を集めた2作目の刊行が決まりました。前作とは違う感じの作品を、との新たなチャレンジの依頼にドキドキしましたが、児島氏との不思議な繋がりを思い起こし、それに支えられながら取り組みました。

（東京都多摩市在住）

◆喜多規子（2021年入会）

今年の3月～5月にかけて写真展「桜 ―刹那と永遠―」を全国4か所で開催すると共に、同名の写真集（日本写真企画）を上梓しました。コロナ禍を経験し、日本人の桜に寄せる心の機微に気づかされました。桜は年に一度、ほんの短い間だけ華やかに花を咲かせ、やがて散ってしまう桜の刹那の美しさと、時を超えて永遠に咲き続けて欲しいという願いを込めて作品に昇華しました。桜は人の命にも喩えられることが多く、写真展ではご自分の人生に重ね合わせて涙を流された方がいらっしゃったのがとても印象的でした。多くの方にご覧いただき、人々の生きる力や永遠の生命に想いを馳せるきっかけのひとつになっていただければ嬉しいです。

（東京都港区在住）

朝の賑わい ―――――――――――――― 大久保勝利

長野県白馬村の冬季の白馬大橋は、朝焼けの白馬三山の撮影者で賑わい、朝焼け撮影を終え午前８時頃から東からの日の出の撮影方向に移動、白馬三山から流れる松川の水流は逆光で川霧が立ち込め、日が昇るごとに川霧の自然のアートが楽しめ「朝の賑わい」は寒さを忘れ感動に満たされた。

FUJIFILM　X-H1 XF18-135mmF3.5-5.6

Melancholy at Twilight ―――― 川村剛弘

冬のベルゲンの街角。トラムの停留所で別れを惜しむ２人。北欧の街は、雑踏が限りなく少ないように感じる。静かな街の風景に溶け込んでいく映画のワンシーンのような場面だった。スローシャッターでありながら被写体の表情を捉えていることから、見つめ合う感情の深さを物語っている。1 億 200 万画素のミディアムフォーマットでありながら、フルサイズ機に勝るとも劣らない機動力が生み出した瞬間だと感じる。
FUJIFILM　GFX100 Ⅱ GF55mm f1.7R WR

夜光性静物観察記～福井県勝山市のホワイトザウルス（2代目）～ ── 山下晃伸

福井県勝山市は多くの恐竜のモニュメントを設置している。このホワイトザウルスは2009年に福井駅に設置された後、2013年に勝山市に移設された。2016年に首が破損する事故が発生し撤去されたが、多くのファンの力により2017年から2代目が設置されている。全長17m、高さ6.8mあり、実在したティラノサウルスよりも大きい。夜にはスポットライトが当たっており、綺麗に照らされている。夕日を浴びている姿はとても神秘的で、2018年に撮影をした。
FUJIFILM　GFX50S　GF32-64mm F4 R LM WR

FUJIFILM

FUJIFILM
Value from Innovation

MORE THAN FULL FRAME

GFX 100S II

新開発の 1 億 2 百万画素ラージフォーマットセンサーが描き出す、驚異の解像力と諧調表現がその物語の空気感まで伝える

- 新開発 1 億 2 百万画素高速センサー「GFX 102MP CMOS II」と高速画像処理エンジン「X-Processor 5」搭載
- AI による被写体検出 AF 採用、連写性能も 7.0 コマ / 秒 の 高速化
- 5 軸・8.0 段※1のボディ内手ブレ補正機能を搭載しながら質量は 883g※2と軽量化を実現
- 「フィルムシミュレーション」に「REALA ACE」含む 20 種搭載

※1 CIPA 規格準拠　ピッチ / ヨー方向、「フジノンレンズ GF63mmF2.8 R WR」装着時。
※2 付属バッテリー、メモリーカード含む。

富士フイルムデジタルカメラサポートセンター 受付時間:月～土 9:30～17:30 ※日・祝日・年末年始を除く
TEL :0570-04-1060（ご利用いただけない場合:03-6625-2809）

http://fujifilm-x.com/ja/

JAPAN
PROFESSIONAL
PHOTOGRAPHERS
SOCIETY

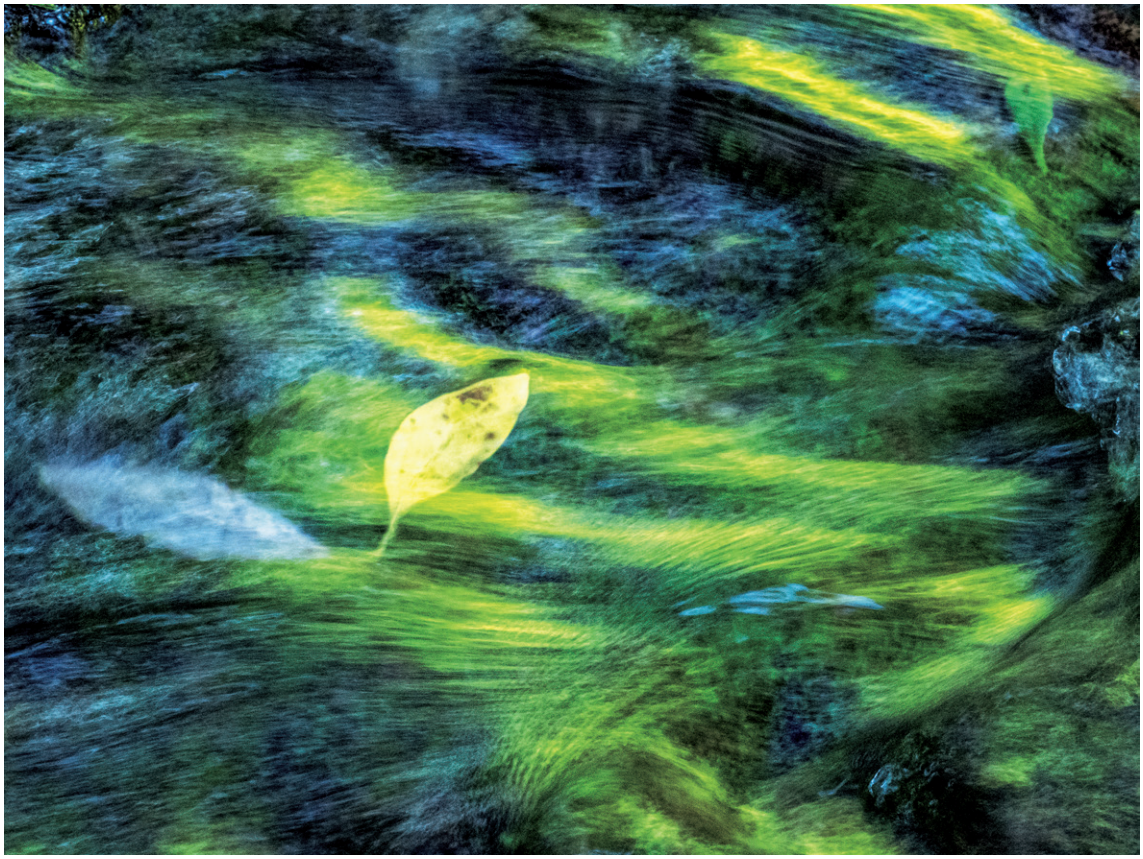


Photo Seike Michiko